
非公式男的男攻略マニュアル

塩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非公式男的男攻略マニュアル

【Nコード】

N0535M

【作者名】

塩

【あらすじ】

目が覚めたら、死んだはずの双子の兄になっていた。

＊見た目は男、精神はイケメン好きの女の子、実態はただの変態。さまざまな男の子たちと繰り広げる一味違ったアブノーマルぎりろまんす。男が平気で男を口説くっていいのでしょうか。精神的には問題がないとして、でもこれじゃ地でボーイズラブ？なんかもう勢いだけで突っ走るジャンルもよく分からないネタ話。

いきなりナンパもアリですか

右を見ても男。左を見ても男。前を見ても後ろを見ても、どこをみても360度パノラマは男、男、オトコ。

ごくりとのが鳴る。緊張のためか、こめかみに汗も流れる。

初めて見る校舎は、それはなんといっても神秘的だった。舞い散る桜の花びらが彩りを加え、まるであたしの知っている世界じゃないみたい。

それはきつと、少し前のあたしだったら関わることのなかった場所だから。それくらい、今のあたしは変わりすぎて――

「ひゃっ!？」

「あ、わりい!」

自分の世界に浸ってモノログなんてやってるからだ。

背中からぶつかられて、あたしは見事に地面に両手をついていた。せっかく新しかった学ランの膝部分も砂まみれ。条件反射で振り返ると、そこにはおろおろと両手を差し延べる男の子がいた。

美・少・年。

「大丈夫か? 怪我したのか? 立てるか?」

「はは、なんのこれしき! それより良かったらこれからお茶でも

どーですか？」

「はっ？ いきなり何だよ、断る」

「そんなこと言わずに、ほらほら、ねえねえ」

「バツ、おまつ、手放せ！」

と、ガンガンに抵抗されても、あたしは怯まなかった。それというのも、この男の子はあたしよりも背が低く、力でもあたしのほうが勝っていたからだ。

ふわっふわの短めの癖毛に、あたしの腕に歯を突き立てる姿なんてさながら小さな子猫のよう。

はは、警戒してる、かわいい、はなぢ出そう。

「はーなーせ！」

「暴れんなよ、いいところに連れてってやるから」

「ッ……！」

必殺・耳元囁き。

自分で言うのも何だが、あたしの低音ボイスはかなりのスウィート成分を含んでいると思う。現にさっきまで暴れまくっていたかわいこちゃんは一瞬、顔を赤くして大人しくなっていた。

はは、ちよろい。

その隙を逃さず、あたしはその両肩に腕を乗せて上から囲い込むポジションを取る。

「あんた……」

ん？　どうかした？

真っ赤な顔でキロリと睨まれても全く怖くない。それどころか、あおられてるのかとドキドキしますけれども。イケメンってこれだから始末が悪いよね。好きだ。

麗しのその唇が震えながら動く。あたしはその動きを目で追いながら、放たれる言葉を今か今かと待つ。

それは了承？　それとも愛の告白？　今晚はいけるところまでいっっちゃう？

「…………変態さんなのか？」

あ、うん、ある意味ね。

…………じゃねえ。なんだその冷静な返し！

思わず素になっちゃったわー。もっとう、頬染めて「いじわる…………」とかいうのを想像してただけにショックです。

まあ、ネコミミ（幻想）をびよこんと倒して気弱に見上げてくるのにはグッときますがね。そうともあたしは変態ですとも。

「往来で何やってんだてめーら」
「おうっ？」

抱き寄せてやろうと腕に力を込めたけど、一足遅く。子猫ちゃん

は、すでにあたしの手から消え去っていた。スカッとからぶるあたしを目の前に、違う片腕が彼を引き寄せていたのである。

子猫ちゃんが見つめ合う形になっていた視線を上スライドしていき、その腕の持ち主を辿る……あたしと同じか、少し高いくらいの背丈。

「一馬、先行くなつったろ」

「ミツカ」

駄目だイケメンだ。これぞ正統派の男前。顔のパーツ配置もさることながら、前髪と後ろ髪の計算しつくされた流れ方や、質素な制服ですらオシャレに着こなすスタイルは神に祝福されているかと思えない。

「あのなー！ ミツカが女の子に囲まれてるのが悪いんだろ！ 一人だけいい思いしやがって……置いていくのも当然だ！」

「一馬が寝坊するからこの時間帯に登校することになったんだぞ。いつもの時間だったらこうはならなかった」

「あーもうるせえ！ おれのせいにするな！ ハゲ！」

「分かった。反省してこれからは起こすとき痛くしてやる」

そしてあたしを差し置いての痴話喧嘩。絵になるかどうかは言うまでもないが、ハッキリ言おう。リアルBLに興味なんざねえ。

ああでも、拳を握ってぷるぷると震える子猫ちゃんはかわいい。

そこでようやく、あたしの存在を思い出したのか、ミツカと呼ばれたその男がスツとあたしに視線を向ける。

うおー、目で殺す気満々ですな。綺麗な顔をそうして有効活用しないでもらいたい。いくらあたしと子猫ちゃんの邪魔をした相手だといってもね、あたしはイケメンには弱いんですよ！

「おまえ、誰？」

「……」

「無視するとはいい度胸だな」

あ、ごめん、そうじゃなくて見とれてた。

「一馬に用か？ 話だったら今ここで聞くが」

「なーんか、カッタイなー。笑ったらもったかっこいいのに」

「……おい、一馬？」

「ミツカ、無理無理、コイツ、変態さんらしいんだ」

こそつと耳打ちしてるけど、丸聞こえだよ、子猫ちゃん。おかげで納得してくれちゃったらしい、ミツカがあたしに軽蔑の眼差しを向けてきた。

「まさかと思ったが、おまえもそういう類か……」

「そういう類って何ですか。この健全なる青少年に向かって！」

「青少年だから言ってるんだろ！ 男のクセに男を口説くな、変態」

あたしに男を口説いちや駄目だとも？ 確かにミツカの言っていることは間違っちゃいない、そういう種類の人間がいるということ
を認めなければ、だ。

けれど間違っただけで欲しくないのは、あたしが本当に男か？という点である。

見て分かる通りに、上から下まで全身男。断定してしまうのも無理はないが、ここはハッキリ言わせてもらおう。

あたしはただの男じゃない。ちょっぴりイケメン好きな、元女だ。

いきなりナンパもアリですか（後書き）

なんでこんなことに……

すみませんただひたすら平謝り系。ちよつと試し連載。

こうなったもんはしょうがない

「初めましてこんにちは、田中宗二です」

簡単な挨拶を済ませ、ぺこりと頭を下げるとぱらぱらと拍手が起こった。女子が来るならともかく、同じ男が来たところで歓迎なんてチリほどにもないだろう。ま、男子校ならこんなところが妥当だ。あたしは特に気にせずに教室内を見渡す。思ったほど歓喜しないのは、これが想像とかけ離れた光景だったからだろう。

……なんつか、むさい。

男子校イコールイケメンの宝庫なんてのは、間違った知識か。偏りすぎてたファンタジー思考か。

イケメンなんてそうそういるもんじゃない……だとしたら、男所帯はむさくるしいに決まってる。今更ながら気付いた現実は、うっそりとあたしを沈ませた。

「そーじ！」

だらだらと指定された席に着こうとしたら、耳にあたしを呼ぶ声が聞こえてきた。

「あ、カズマ？　だっけ」

「おう、おれ、柳井一馬。おまえ転校生だったんだな。道理でみたことないと思った。あ、おまえ、この席ね」

まるで猫じゃらしふられてるみたいなの、そんな好奇心旺盛な様子で椅子を引かれた。相も変わらず子猫ちゃんという呼び名にふさわしい男の子、柳井くんはどうやら同じクラスだったようだ。まるで枯れた砂漠にさく一輪の可憐な花のようだよ。しかも隣の席？これは神のお導きに感謝せざるを得ない。

お礼を言いつつその席に着く。

ニコニコニコ、なんかすごーく見られてる。のは何故だろう。なに？もしかして今からでもランデブーは遅くないですか？

その期待に応えようと見つめ返してみたら、視線を遮るように何かが目の前に飛び込んできた。

「教科書とか！ 見せてやるからな。あと何かあったらすぐ言えよ。お隣さんの特権だ」

「……はあ、どうも」

教科書をハイと受け取る。どうやら今までずっとお隣さんが空席で寂しかったらしい。ここぞとばかりにお隣さんぶれるのが嬉しくてしょうがないようだ。

なんだそのピュアなかわいさ！

思わず自由奔放な手が動きを始めたところで、ヒヤッと悪寒が。

「一馬に変なマネしやがったらぶっ飛ばす」

悪寒が前からですってよ。くると振り返ったのが、まさかミツカだなんて神様も本当におイタが過ぎる……。

ああ、それにしてもミツカ、黒い笑顔がとてもよく似合う。きっとここに柳井くんがいなければあたしは鼻血を吹いていたに違いないよ。憎いけどカッコイイ。なんというジレンマ。

というわけで、転校初日。

お昼の時間がやってきて、あたしは前と横からそれぞれのイケメンオーラを浴びていた。

「……おまえが、女？」

「うん、ちょうど一ヶ月前、目が覚めたら死別した双子の兄とそっくりになって。もちろん体のつくりも一緒だったわけなんだけど」

あれはビックリしすぎて思わずムラムラするのを忘れたわ。いや、結局自分の体に欲情するのってどうなのかとも思うけど。

家族や友達もあたしのこと忘れてるし、だったらいつそ兄ちゃんとして振る舞うことにした。確かにあたしは兄ちゃんを埋葬したことを覚えている。世界の兄ちゃんに対する認識がどう変わったのかは分からないけど、なぜかあたしは兄ちゃんとしてこの男子校に転校してきた、と。

どうよこの奇跡。

「つまらない、却下」

「え、今の、何かのマンガのストーリーだったのか！？ ビビッた、事実かと思った」

……まあ、こうなりますよね。むしろ柳井くんが半ば信じたのが恐ろしい。

「何も男が好きなのをそうやって正当化しなくてもいいだろ」

あたしをジト目で見ながらミツカが責め立てる。いや、事実なんですがね。

「じゃあ、男が好きでいてもいいってこと？」

「それは許さん」

「けちい」

ミツカは断固として男が男を好きになることを認めちゃいないようだ。あたしだって精神は女なんだから男を好きになる権利くらいあると思うのだけど、それは今更ミツカには通じない。

文句をいいつつミツカの腕にしなだれかかったら、面倒くさそうに払われた。女々しい！だなんて、だって女だもの。

「あはは！ そーじって変わってるよな」

「柳井？」

「おもしれーじゃん。普通におれに言い寄ってくるやつらとは違うっていうか、おれ、別におまえのこと嫌いじゃねえよ！」

ほら、お隣さんだしな！とか、キラキラの瞳で言われた。嬉しいけど、柳井くん、嬉しいけど、その理由が八割方を占めているように思えて仕方ないよ。

しかし、気になるセリフが。「普通におれに言い寄ってくるやつら」？

そういえばクラス中から視線を浴びていると思ったのは、柳井くんが原因なのか。あたしが新星の転校生だから注目されているのかと思っただけど、とんだ勘違いだったようだ。恥ずかしー。

さすが男子校……こういうところはちゃんと脳内ファンタジー。それがイケメン同士じゃないってことだけなのね。

まあ、柳井くんがあたしに気を許し始めたせいで、一人のイケメンもまた気が気じゃないようだけど。でもイケメン同士でもときめかないのは、あたしが無類の男好きのせいだからだろうか……。

しかし柳井くん、あたしがお弁当もってきてないからって自分のご飯、せっせとあたし用に取り分けてくれてる。あたしは望んじやいないのだけど、お隣さんぶりたいんだなあ。

それもさすがに悪いと思って、もはや柳井くんにより増えたんじやなからうかと思われるあたし用の弁当の裏弁当を手を取った。そして、顔の前に掲げて、アイコンタクト。

「ほら、もう十分。ありがと、柳井」

ってあれ、固まってしまった。あ、うそ、まさかもっと盛りたかった？　どんだけピュアなの柳井くんー！

呆けたままだった柳井くんに、ごめんねごめんねと念じつつ笑いかけると、真っ赤になって顔を横に振った。

「おまえ……」

そして何故かミツカに睨まれた。

あ、やっぱり、弁当もらいすぎ？　柳井くんとは対照的に、なんて心の狭い男だ。つつつても、柳井くんがあだからミツカがこうなってしまうのも仕方ないのだろう。なんたって、二人は小学生のときからずっと一緒だそうだから。今も寮では同じ部屋らしいし。

「だいたいなんで一緒にメシなんて……」

「あ、もしかしてそこから怒ってたの」

柳井くんを守りたい気持ちは分からんでもない。なんたってかわいい子猫ちゃんだしね。

まあ、そこまで言うなら譲ってやってもいいか。

あたしは柳井特製弁当をミツカの前に置いて、立ち上がった。

「悪いけど柳井、ミツカ腹減ってるみたいだからあげるね。自分は学校探索も兼ねて外で適当に食べてくる。邪魔してごめんねー」
「あ、宗二！」

柳井くんが呼び止めてくれたけど、手を振って教室から出た。あのままあたしがいてもたぶん、柳井くんが板挟みだったろーし。あたしにもいたけど、過保護な友達がいるのは大変なのだ。

サ、イケメン巡りの旅にでも出発するか。

メガネ男子は王道がいい

創立十年だとかいうこの男子校、校舎内は男子校と思えないくらいきれいだった。特別な設備はないものの、精神上女なあたしが生活する上でも満足な程には整っている。

トイレはまあ、男用しかないわけですけども。まあ、一ヶ月もすると男用の便器にだって慣れた。まだまだ人前ではできないけどね……。

淡いクリーム色したビニールの廊下を歩く。あたしが前通っていたところは板目だったから、なんだか変な感じ。小学校の時の廊下と同じだからかな。上靴も典型的な先が青いやツだから、まるで小生に戻ったみたい。

そしてその当時から、イケメンにきやあきやあ言ってたなあたしってば……。その度に兄ちゃんから呆れられてた。

……あたし、どうして兄ちゃんの姿になっちゃったんだろう。兄ちゃんが死んだのは、偶然の車両事故だった。肉体だってバラバラに潰れちゃって、今更ながらこうやって形になるはずもない。

あたしの本体だっていずこに？

考えれば考えるほど分からん。

そんなこと言ったら、本当にあたしという人間が存在していたのかどうかも分からなくなっている――

「ん?」

こんなときに何ですが、イケメンリーダー察知。きたろうよろしく、脳天の髪の毛がびょいんと逆立った気がする。

周囲を確認するといつの間にか、中庭まで出てしまっていたらしい。様々な花壇が植えられていて、本当に男の園なのかと疑いたくなる。

誰か手入れしてるんだろうか？

と、見た先に男発見。

じょうろを手にし、花に水をやっているようだ。

……お、なんだか花を愛でるいい男臭が。つつい、と近づいてみたら、ぱっと顔がこちらを向いた。

「おおっ？」

「こんにちは、どうかしましたか？」

「いえ……コンニチハ」

あたしが気配を絶っていたはずなのに、気取られたあげくあたしがビックリしてしまった。

振り返った男は、メガネ男子。一見して野暮ったいが、あたしのイケメンリーダーはどうやらこのメガネ男子に反応している模様。

あーもしかしてメガネ外したら美形とかいう王道設定？ 意外と嫌いじゃない。

「水やり？　きれいに咲いてるんだね」

あたしは膝に手を置いて、花に目を向ける。お茶に誘おうかとも思ったけど、こういうタイプはおそらく、花を誉められるのが一番喜ぶ。

いや、いきなり落とそうっていうわけじゃなくね。元女として人間関係を円滑に進めるためにはこういうテクニクも必要ってことで。

「ふふ、気に入って頂けました？　ここに人が来るのも珍しいので、そう言ってもらえると嬉しいですよ」

汗を拭う姿を、強い眼光で見つめる。今だ、メガネよ曇れ！

「どうしました？　そんなに見つめて」

メガネを外せばいいと思って。

とは言えず、いいえ、と無難に首を振った。すると、メガネ男子は手にしたじょうろを地面に置くとあたしの手を取り、近くのベンチまで誘った。

「何年生ですか？」

「あ、今日転校してきたんだ。二年の田中宗二です」

「そうですか、僕は三年の椿本健吾です。良かったら仲良くしましょう？」

はいどうぞ、と小さな赤い花を渡される。うおお、思わずときめいた。メガネ姿じゃそこまで燃えるものはないけれど、こういうロマンチックな対応には女として惹かれない手はない。

女に違わずお花だって好きだしね！　なによりこれ、柳井くんに似合いそー。

「ありがとうございます。それより、先輩だったんですね！　敬語だったからてっきり同じ年か下かと」

「ふふ、クセでつい。田中くんはさっきと同じように砕けてもらって構いませんよ」

「いえ、さすがにそれは」

いちいち優しい先輩だ。にこにこーつと微笑まれて、ほんわかと心が温かくなる。ビバ・イケメン！とか燃えたぎってる場合じゃない。

しばらくここで花に囲まれていたいなー、隣で椿本先輩も笑ってるしなー。

夢心地に陥っていると、あたしを現実に引き戻す声が響いた。

男的にたぶらかす的な

「田中！」

ざわり、と自然の木々が揺らめいた。風と一緒に桜の花びらが散る。視線を向けた先にはそんな花びらを纏う人影だ。

……絵になりすぎて思わず見惚れた。

「……ミツカ」

「どこまで行ってんだおまえは。誰もおまえを追い出しちゃいないだろ！ 考えろ変態！」

しかし第一声がこれでは、百年の恋も醒めるってものよ。
花びら小道を抜け、あたしの側までやってきたミツカは、怒ったように眉根を寄せていた。

「別に追い出されたわけじゃないって。それに自分がないほうが良かったんでしょ？」

「おまえがまた一馬に手を出そうとするからだろ」

「まだ出してないじゃん」

「出す気でいるのが許せねえんだよ！」

なんだ結局怒りに来たのかこの男は。じっと見つめると、ますます不快そうに睨まれた。

「一馬もなんでおまえなんか懐くんだ……おかげで俺がとぼちりだ」

「ああ、呼び戻してこいって言われた？」

「うるさい」

頭をはたかれた。ぐわんぐわんとぺこちゃん人形みたいに揺れた。凶星か。

行くぞ、とぶつきらぼうに言われてあたしも続こうとしたけれど、そう簡単にはいかなかった。後ろでが引かれている。

「……あ、先輩」

「もう行くんですか？」

すっかり忘れてた……。

あたしは罪悪感に捕らわれつつも、その手に触れた。力を込められているわけではないので、強く引っ張ったらきつと解けるだろうけど。

「この花、ありがとうございました。また花壇のお花も見に来ますね」

この言葉を離れる合図にしてみたのだけど、先輩は手を放してくれそうになかった。それどころか強く引っ張られてあたしは前屈みに先輩に近づいてしまう。

耳元に吐息が。

「また、明日」

吐息と熱と、色気が。

砕けそうになる腰を必死で支え、あたしは笑顔でハイ！と頷いた。ひやーっ！　なんて女殺し！　男の姿じゃなければ、きつと真っ赤になっていたに違いない！　……ってあれ、別に男の姿でもいいのか。

「椿本と一緒にいたのか」

きゃーでもどうしょー、なんてくねくねしていたら、少し前を歩くミツカがぼそりと聞いてきた。その後ろ姿を追いつつ、あたしはそうだよと答える。

「優しい先輩だよね！　なんかフラグ立っちゃった感じ」

「気持ち悪い」

「そう？」

あつさりと流すのは、もはやそれどころじゃなかったから。耳元に残る、先輩の甘い囁き……これはメガネ解除にも勝る至福なんじやなからうか。

こういう人っているよね！ 自分はその気じゃないのに、自然と人をたらしこむひと！ それが美形じゃないだけギャップがあつてときめくというか。

「椿本には注意しろよ」

「え、何嫉妬？ 困るよ、ミツカくん」

「いっぺんしねよてめえ」

怖いね、うん。

それより、お腹空いたんだけど。結局教室に戻るなら何か買って帰りたいな。柳井くんからもらったお弁当はミツカに上げちゃった形になってるし、それ返せっていうスタンスになると恥ずかしいし。

「ミツカ、ミツカ」

「……」

「おい、ミツカ」

三度呼ぶとようやく振り返った。何故か不満そうに見下ろされている。

「つーか、おまえ、何その呼び方」

「え？ だって、柳井がそう呼んでたし」

「……俺の名前は三ッ瀬和磨だ」

「かずま？ あれ、柳井と一緒にだ」

「だから、一馬は俺のことミツカって呼んでんだよ」

ああ、ミツセとカズマでミツカね。名前にしては珍しいなと思ってたけど、本名じゃなかったのか。

「へー、んじゃ三ッ瀬、改めてよろしくね」

「別に、呼び方変えなくてもいいけど」

「あ、そう？ じゃさ、和磨って呼ぶ？ 自分、柳井は柳井って呼んでるし、分かりやすいでしょ」

「おい、そういう意味じゃ……！」

「決定、和磨ね、よろしく」

異論は認めない、とばかりに和磨の背中を強く押す。前につんのめっても和磨はまだ何か言いたそうだったけど、無言で笑ったら口を閉じた。

目は口ほどに語るってね。今の、何か文句でも？ って言葉がきくと通じたんだろう。

「変態のくせに……」

「そんなこというやつには、こうだー！」

男好き女をなめんなよ。減らず口をたたく男の背中からがふんと

抱きついてやった。校舎内の廊下だっただけに周囲がどよっとしたのも分かったけど、気にせず役得満喫。

いやあ、程良く引き締まる良いボディです。洗剤の香りか、清楚な匂いも好感が持てて、思わず鼻を寄せてしまった。

さすがにやりすぎたと思ったときにはすでに遅く、和磨は力強くあたしを吹っ飛ばすと自分の体を抱いてとんでもないものを見るような目であたしを見てきた。

「お、俺を巻き込むな！」

「はは、悪い悪い。でもなんか良かった」

「やめろ！」

面白いなー。柳井くんは柳井くんでかわいいけど、和磨はからかいがいがあってかわいいやつだ。かたっくるしいだけにそれを崩すのが楽しかったりして。

……本当にあたしって変態じみてる。

今更ながら気付いてもしかたがないことだ。男の身になったときに、あたしはもう何もかもが変わっている。

実家通いで、登校は大連れ

朝、起きてクマのぬいぐるみに囲まれながら身支度をする。断じて言っておくけれど、このファンシーな内装はあたしの部屋のものじゃない。もちろん、この身に魂をゆだねたときからずっとこれだ。即ち、兄の部屋である。

そもそも兄として目覚めたときにはもうあたしの部屋は微塵もその存在を残しちゃいなかった。扉を開けてみればあらびっくり、使わない家具がガッツリ押し込まれた物置だったのである。真面目な勉強部屋だったのに……南無。

「よっし、お着替え完了」

つーわけで、兄ちゃんの部屋インあたしでお送りしてます。

しかし女の子であるあたしの部屋よりファンシーってどうなのよ。外面とのギャップがまた激しいもんだけど、もちろん誰にもこのお部屋のことは秘密だったらしい。

最後に鏡でチョチョイと前髪をセットして、部屋を出た。

ダイニングには朝ご飯が用意されつつあった。フライ返しを振り回しながら、母さんが手際よく机に三人分を並べていく。

「あら、そうちゃん、おはよう」

「母さん、おはよー。今日もかわいいね」

「まあっ、そうちゃんたらどうしたのよ！　そんなお世辞みたいなこと言うなんて！　最近はおしゃれだし、まるで娘を持った気分だわー」

ははは、いましました。忘れてるようだけど、過去にいましたから。

フリルのエプロンが似合う母さんは、お世辞ではなく、本当にかわいいひとだと思う。童顔のせいで年齢よりもはるかに若く見えるし、ふわふわした雰囲気や言動がさらにそれを引き立ててる。そりゃこんなひとに娘がいたら見てみたいもんだわ。

あ、いますいます、ここにいました忘れてました。

「宗二、母さんを口説くのはやめなさい」

「父さん……別に口説いてやいませんがね」

新聞紙をバサァっと広げつつ、視界にフェードインしてきたこのスリッ姿のサラリーマンこそ、我が父である。父さんはちゃんと年相応だけれど、残念なのが中身というかなんとか……母さん相手だから仕方ないかもだけど、いつまでたっても奥さんラブな人。今日もきれいだよハルカさん、とか甘いボイスで囁くけど、それもう聞き飽きました。毎度毎度同じことしか言えないのかね、アキユキさん。

とにかくいつも通りに、こんな感じで食卓につく。いつも通り、というには何かが足りないけれど。足りないことをあたし以外に知る人なんていやしない。

三人で、ささやかながら楽しい朝食。不思議だけれど間違っ
ては無いみたいだ。

「あ、そろそろ来るころじゃない？」

母さんの一言で思い出した。あたしは味噌汁をぐくりと飲み下す。

「来なくてもいいって言ってあるんだけど、一応」

「でも、分かるわ。小太郎くんは、そんなの聞く子じゃないもの」

ニコニコ、笑顔が素晴らしいけれど、言っていることは結構酷い。
でも、確かに母さんの言っていることも否めない。

悲しきかな、あたしもフォローはできないよ、とお茶碗を流しに
片づけた。

そろそろ来るならしょうがない、出掛ける準備をしておこう……。

と、ちょうどそのとき、ピンポンとベルが鳴った。

「ほら」

音符マーク付きで、母さん。やけにウッキウキなのは、母さんが
コタローを気に入ってるからだろう。なんたってマダムキラードも
んね、母性本能くすぐってくるもんね、父さん気が気じゃないけ
どね。

「や、でもホントにコタローとは限らな」

「宗二先輩ー！」

「くないね、うん」

コタローだね。

あたしは、勉強道具入りのリュックを背負って玄関に向かった。父さんが「暗くなる前に帰ってきなさい」と釘を刺す。そうそう、父さんって母さんも好きだけどあたしのこともそこそこ好きだったよね、今は兄ちゃんに向けた言葉かも知れないけれど。

「今、出る」

玄関を開けた瞬間、大きな影が飛びかかってきたのでサッと避けた。ドーンと現実にはあり得ない音がしたけど、いつもと何ら変わらない。

家の中から、あらあらあらあ、っていう母さんの声が聞こえてるから、まだ平和。オーケー平和。

「はよっす！ 先輩！」

「うん、おはよう。コタロー。朝から元気だね」

「五時間前からジョギングしてましたオッス！」

五時間前で。軽く夜中だよアンタ。

わけのわからない元気を持て余す、お隣さん家のコタローくんはあたしの一個下。わふわふと犬が尻尾を振ってるかのように嬉しそうな姿は、本当に微笑ましいのだけれど。

「じゃあ行きましょ！」

「あ、うん」

しゅばつと立ち上がってあたしの隣に並べば、思わず身が竦む。いや、でかすぎ。後輩とか言ってるくせに、あたしより頭一個分はでかい。この姿で出会い頭ハグされようものなら、心臓潰れて死に至る。

「でもコタロー、来なくていいって言ったのに」

「だから昨日は行かなかったっす！　それとも、今日もダメだったっすか？」

「……ユルス」

っていうか、モユルス。そのウルウルした瞳は反則だ……。

何故か、コタローは小さなときからあたしに懐いていた。あたしってのはもちろん、兄ちゃんじゃないあたしに、だ。それが今兄ちゃんの姿になっても慕われているのは、変な気がしないでもないけど。

「でも先輩、どうして転校しちゃったっすか？　せっかくオレ、同じ高校に入ったのに」

「あ、悪い。事故で入院してたから折り合い悪くなっちゃって」

ということになっているらしい。兄ちゃん、二ヶ月意識を失ってた設定、で目覚めたときにはあたしが入っていたという現実。

「でもがっこ、そんな遠くないでしょ？ ほら、我慢しよう、ね」

「先輩……事故後なんだか変わったと思ったけど、やっぱり変わってなかったす。優しく、強くて、かわいくて……ってあれ、これはおかしいっす、かわいいって、男の先輩にこんなこと！」

「あははは、誉め言葉として受け取っておくよ」

ちょっとだけ、嬉しかったのも事実だから。コタローは、本当のあたしのときにもそうやってあたしを誉めてくれた。

きっとその名残なんだな、あたしがいたという証みたいで安心する。

「でも、コタロー。盲目もほどほどにね、そろそろ彼女でも作ってよ」

「オレ、先輩一筋っす！」

「それはちょっと心苦しいっす」

以前だったら、かわいいわねえ、と微笑ましく思ったりもしたけど、今この姿で言われると果てしなく危険というか、洒落にならない部分がある。まるであたしがコタローをその道に引きずり込んでいるみたいで申し訳ない。

コタローだって、くりくりの瞳と淡い色の短髪でゴールデンレトリバーみたいにかわいいんだから、あたし以外の誰かを見つければいいのに。そりゃイケメン好きなあたしには嬉しい話だけど、そうはいってももう弟みたいなもの、そういう対象で見られるかっていうと否。

それにこう、純粹に尽くしてくれるのにも飽きたっていうかね…。

「もう着いたね」

「え、もうっすか？ 早いっすー！」

くっちゃべりながら歩いていたら、あたしの通う高校にたどり着いてしまった。校庭にふと柳井くんの背中を見つけて、思わずテンション急上昇。

事故を装って背後から飛びついたらどうでしょう、と思ったけど、その隣に和磨を見つけて邪な思惑を断念した。命と引き替えにそんなはしゃげるわけがない。

「先輩？」

「あ、ごめん。もう行くよ」

「せんぱーい」

「なんでそんなキューンて鳴くの。帰りも迎えに来てくれるんでしよう」

「キューン！」

「鳴くな」

あたしは、わっしやわしやとコタローの頭をなでまくり、校舎に向かって走った。振り返ると、千切れんばかりに手を振るコタロー。ああ、人見てる、見てるから

でもやっぱり、振り返さずにはいられないほど、あたしもついつい気を許している。

意外とそういう人なんです

この学校の授業のレベルは割と高い。それは、何故あたしがこの学校に入れたかと謎に思うほどである。

朝っぱらから飛び交う暗号もとい英数字の数々……ここは偉大なる地球のそのニッポンであるかを疑わずにはいられない。

要は、つまり、結局。

みんなが当然こなす授業のレベルに、あたしの頭脳が追いついていないのだ。

「おまえって変態だけじゃなくて、頭も残念だったんだな。あ、残念だから変態なのか」

「こらそこ。変態、残念を連呼しない」

「オレがお隣さんの間は、面倒みてやるからな！」

「できれば一生お願いします」

あ、つい、本音が漏れちゃった。

じゃなくて。

前から横からと、それぞれ貶めと励ましを投げかけるのは、もうすっかり仲良くなった柳井くんと和磨である。何を隠そうこの二人はあたしよりも遥かに勉強ができ、できないあたしにここぞとばかりに言葉のアメとムチを降らすのは当然のことなのだ。

ま、人間勉強が全てじゃないけどね……。

ため息を付くフリをして、ちらりと上目で二人を見やる。難解で

窮屈なお勉強の時間が終わった今、四時間目の体育に向けて準備が始まっている。

生お着替えでした。

「そーじ、着替えねえの？　もしかして体操服もまだなのか」

「あ、それは今朝もらったから大丈夫。そんなことより……」

「一馬、はやく上着ろ」

「わぶっ！」

ちっ、見抜かれた。

変な目で一馬を見んな、ともう一人の和磨に釘を刺される。そうは言われても、目の前に上半身裸の美少年がいたら見てしまうのも道理でしょう。

無理矢理体操シャツを着せられた柳井くんは、うわーびっくりしたー、とか言いながらふわふわ猫っ毛を撫でつけていた。

……うん、ムツキムキとかじゃなくてホント安心したわ。

「まったく油断も隙もねえな」

「ははは、大丈夫、和磨の裸体もバッチリキャッチしたから」

「やめろ変態！　マジ油断なんねえな！」

そりやもう、顔も良くて勉強もできてと来れば、ほどよい肉付きでスタイルも良いなんて予想するまでもなかったというかなんというか。残念なところなんて何一つない、完璧なイケメンである。あ、唯一の弱点はその怒りっぽさかな。

と、本当にちんたらしてたら体育の授業遅れちゃう。

「おまえもこの話の流れでよく豪快に脱げるよな……」

まあ。言っただって、そりゃ、男の体は見慣れていますし。もとより自分の体に興味はありませんから。

気にせず体操服に着替えていたら、じつとあたしを見つめる視線に気付いた。柳井くんだ。

「……柳井？　もしかして、興味ある？」

「ちがつ！　そうじゃなくて！」

ぶんぶんと真つ赤な顔で手を振られた。いやー、赤面性な柳井くんもいちいちかわいいなあ。分かってるよ、という意味も込めて笑顔を向けると、きょろりと視線を外された。

「あのさ」

「ん？」

「そーじ、ミツカのことと磨って呼んでんだな」

「あ、そっか。二人とも同じ名前だったんだね！　ほら、自己、幸い柳井のことは柳井って呼んでたからさ、和磨のことは和磨って呼べるでしょう」

せっかくだしね、と付け足すと、柳井くんが何か言いたそうに見上げてきた。ずっと見てたら、次第に眉間にしわが寄って、耐えかねたかのように「そーじ、オレも」と声がこぼれた。

なんだこのネコ、かわいいことしてくる……！

「おい、田中……」

「うん、分かったよ！」

「そーじ！」

「柳井も、和磨って呼びたかったんだよね。でも、和磨が先に柳井のこと一馬って呼ぶから！ そろそろ呼び名交代する？」

どう？と首を傾けたら、何故か柳井くんがガツカリしたように見られた。ガツカリどころか、残念だとも言いたげに半ばあたしを痛めつけるオーラが含まれていた。

みんなして残念残念って何なんだ。

教室を出る間際、和磨がおまえ意外と普通だなと言ってきたのはそれはそれでけなされてる気分だ。

体育はバスケットボールだった。身長もそこそこあるだけに多少期待もされたけれど、あたしの運動神経は並でした。

女の子時代はどちらかというと運動神経良かった方なんだけど、それはどうやら女子の中だけでの話。この中身がそのまんま男の体

に入ったところで、男の運動神経には敵わない。けれど、まだしくりこなかった以前に比べて動けるようにはなっているから、もしかすると運動を重ねていればまだまだ向上ははかれるのかもしれない。

そして柳井くんは、小さいが故に活躍できずかわいさ振りまくし、和磨は和磨でやる気なさそうにしながらもスーパープレイかましまくるし、なんつーかもうさすがだね。

体育の授業が終わって、あたしたち三人は廊下を通り、教室を目指していた。まだ春は終わってないけれど、閉めきった体育館内では暑さがハンパなかったので、外で水浴びをしてきた。

水もしたたるなんとやら、あー二人とも目の保養。じろじろみてたら、また和磨にはたかれた。すみませんね、変態女は大人しく地面でも見つめていましょうかね。

そんな矢先、ふいに視線を感じてあたしは顔を上げた。通りすがりの男子たちがこちらを見つめつつ通り過ぎていく。何？　もしかして転校生って知ってんの？

へらっと手え振ってみたけど、完全に無視された。

つーか、毎度ながら別にあたしのこと見てるわけじゃ。それどころか、カメラのレンズが狙ってるのは、あたしの隣を歩く柳井くんの模様。

「そーじ？　誰に手振ってんだ」

「いや、うん」

「……そーじ？」

どーせならツーショにしてくれ、と柳井くんの顔に頬寄せてみた。マシユマロかと思った。そして案の定引き剥がされるあたし。

「触んなボケ」

「和磨のけち。あ、ねえ和磨、ちょっと聞きたいことあんだけど」
「なんだよ……バカ、顔近づけんな」

まあまあ落ち着いて、あたしを女だと思いな。

そんなことはどうでもいいんだが、避ける体を手をとりむりやり引っ張って件の聞きたいことを口にしてみる。

本人前にして大きな声じゃ言えなかったから、こそこそ話。

「柳井ってさ、もしかして校内にファンクラブでもあるの？」

「はあ？　どういう意味だよ」

「だって、ほら、今すごい隠し撮りされてるけど」

「ああ……あれは、ファンクラブまではいかねえけど、一馬の顔は男ウケが良いんだよ。だからああやって写真撮っては売りさばくやつらが出てくる。こないだ潰したはずだが、また性懲りもなく……」

「フーン」

「てめえも欲しいとか抜かしやがったら、どうなるか分かってんだろうな」

和磨、そんな近くですごむなよ。何がこわいって、ときめきそうなところだよ。濡れてるせいで、髪から顔に伝う水の粒がやたらセクシーだったら。

あたしは邪念を片手で振り払いつつ、あのさ、と強気で反論。

「そういうの、自分だって嫌いだってば。だって、写真だけで満足できるとでも……」

「ああ？」

「じゃなくて。そういうの。一方通行なもの。どうせなら、生身で直接仲良くしたいと思わない？」

そこまで言うと、ついと服のすそが引っ張られた。

柳井くんが怪訝そうにあたしたちを見てる。こっそりひそひそ話をしてたのを、たぶん仲間はずれにされたと思ったのだろう。

呆氣にとられている和磨に苦笑いして、柳井くんに向き直る。濡れた髪の毛を丁寧に撫でつけてあげると、すぐに機嫌を直したのかネコのように目を細めて頭を預けた。

ほら、だってね。

こんな顔、仲良くでもない限り見られることはない。

「うへへ、柳井かーわいい」

「っーか、だから触んな！」

和磨に引き剥がされて、結局その至福の時は一瞬で過ぎ去った。このときばかりは、写真に残して欲しいなと思ったけど、いつの間にか盗み撮りカメラマンはいなくなっていた。まあ、結果オーライだ。

あー不思議そうに首を傾げる柳井くんもナマでちょーぷれみあむ。

どうよこれ見てよ、と和磨にニヤニヤ顔を向けたら激しくそらされた。まじかよおい。

写真って、でもいくらくらいすんのかな。近くにいればそこまで買いたいとも思わないけど……もしかしたら、こんな風に仲良くしたくてもできないひとがいるのかもしれない。もし、それがあたしだったら写真買っちゃったりしてたのかもしれない。

どうなのかな、とか考えてたら、視界に金髪のイケメンをキヤッチした。と、次の瞬間にはもう真っ暗。

「……見んな」

すっかり和磨の体に背中を預けたままだったから、観察体勢に入ったあたしの目元を背後から覆うのは簡単だったらしい。

和磨め。柳井くんを守ってるというよりも、変態なあたしをガードしてないか？

「けち」

「チョーシくるうこと言うしな……なんかむかつく」

「そんなに？」

意外と真面目っつーか、細かいっつーか、心が狭いっつーか。分かったよ分かりましたよ、とギブの意をこめてその腕に手を掛けたら、何故か空白の間ののちうるせえと手放された。

かずまくんたちの朝

携帯の着信音で、目え覚めた。

「ん……？」

ベッドに寝転がったまま枕元に置いていたそれに手を伸ばすも、触れた瞬間電子音が途切れたので、そこで初めてメールだと気付く。

体を起こして、携帯電話のディスプレイをのぞき込んだ。

7時13分……。カーテンがまばゆく照らされている。

もう、朝か。

「おい、一馬？」

腹をぼりぼりとかきむしりながら、二段ベッドの上に目を向ける。いつもながら寝相悪く転がっている一馬。普通に起こしても起きないから、今日も今日とて朝から一苦労だ。

「ふああ」

俺もまだねみいんだっつの……。本当だったら登校までかなりの余裕があるが、俺たちは早く行かなくてはいけない理由がある。

理由っつーか、あれだ。近隣の女子校生と登校時間が被ってしまうと、かなり面倒なことになってしまう。この高校に入学してから一年と半年経ったが、そうなるかと未だにどうすることもできない。

欠伸を噛み殺しながら、一馬の体を揺する。うなり声をするだけで、起きる気配は皆無。強めに叩く。無言。

「おい、一馬起きろ。早く起こせつつたのおまえだろ」

しかし不思議なことに、いつも女子に絡まれんの俺だけなんだよな……。だから別に一馬は普通通りに登校しても構わないんだが、小さい頃からの習慣か登下校は一緒だ。それに一馬はどっちかつつーと学校に着いてからが面倒だから、それに備えるために俺がいた方がいい。

「……みつか？」

「一馬。やっと起きたか……。ってあーあーあー、そのまま寝んな！
目、開けろ」

「うー、やだ」

「ぐずるな。ほら早く顔洗ってこい。つーかいったんこっち向け！」

それにしても、一馬の寝起きの悪さは異常だ。一度寝たら簡単には起きないし、起きててもぐずぐずして動かないし。早寝してるくせになんて都合の悪い。

最終的に無理矢理担ぎ上げてベッドから下ろした。まるで介護してるみたいに一馬を支え顔を洗ってやったところで、ようやく意識がはっきりしてきた。

「あ、ミツカおはよう」

「ああ、おはような。やっと起きてくれて何よりだ」

朝っぱらからなんで俺だけぐったり。しかしまあ、俺のこの疲労も無駄じゃないようで、今から普通に準備しても早い時間にここを出られる。

……学校の寮とはいえ、校舎のすぐ横に建ってないのが問題だな。

俺も一馬に続いて顔を洗う。洗面台は広いとは言えないが、もっと文句を言うなら俺はユニットバスにしたい。このすぐ隣の扉に広がる空間なわけだが、トイレと風呂が一緒だなんて一体どこのビジネスホテルだよ。

ちなみに、部屋の方も二段ベッドと勉強机二つ入れたら、あとはちょこんとちゃぶ台の前に座るスペースしかない狭さ。

顔を拭きつつ戻ると、一馬が俺のベッドから何かを取り上げた。

「ミツカ。携帯、光ってたよ」

「あ？ あー、そーいやさっきメール来てたっけ」

「ん」

「サンキュ」

手を伸ばす一馬から携帯を受け取りディスプレイを見る。……と、画面を通り過ぎた向こうの一馬と目が合う。

「どうした」

「……や、おれもミツカくらいでっかくなりてえなーって」

「何いきなり、諦めたんじゃないかったか？」

「分かんないけど。最近よく思うんだよなー、だってちっちゃいのおればかりだし……」

台詞回しが変わだ。おればかり、ってなんだか俺以外にも比較対象がいるかのような言い方。

ひとまず「ふうん」と聞き流しつつ、メールを見る。読み進めて行く内に、知らず知らず眉間にしわが寄っていく。

「なんか変なメール？ 誰？」

「いや、送り主というより……」

ほら、と見せる。

「あ、拓磨じゃん。あいつが珍しいね」

「それより読んでみろよ」

「えー？ なになに……『昨日変な男に絡まれた』」

……無言。お互いそのままの状態で無言。
しばらく経ってから、戸惑った一馬の視線を受け取る。

「ま、ますます珍しい。拓磨、絡まれるのはともかくもそういうの、ミツカに言うタイプじゃないじゃん」

「あいつ、勉強以外にはトコトン無頓着だからな」

「前にストーカーされてたときだって、おれたちが知らない間に自分一人で警察に付きだしたくらいだし」

「……だよな」

読めなさすぎる。画面をスクロールしてみるも、それ以上のことは一切書かれていなかった。

拓磨。

俺の一つ下の弟。感情表現に乏しく、常に勉強をしているようなヤツ。本当に俺の弟かと言いたくなるくらい根暗だが、一馬に言わせてみれば顔はそっくりらしい。俺もメガネをすればああなるってことか？　なんか嫌だ。

「でもそれってつまり、ミツカに助けを求めているんじゃない？　普段言わない分、すごい困ったことになってるとか」

「文面からは微塵も感じ取れないけどな。まあ、一応電話してみるか」

しかし通じないのが、俺の弟。なんだかんだのらくらとやりすごしてそうだから、心配するのはヤメにした。とりあえず、大丈夫か、

とだけ返信しておく。

変な男ってなあ。大雑把すぎ。意味不明すぎ。

着替えを済ませて朝食に向かうときに、話題はあの男に移行してた。

「一瞬、そーじのことかと思った」

「言ってる。最近の変な男ランクぶっちぎり一番上だしな。ま、さすがに他校にまで男目当てで行ったりしないだろ」

「だなー」

俺ら、簡単に笑い話にしてるけど、実際笑えるところなのかどうなのか。

田中宗二、少し前に転校してきたおかしな男。アイツ、自分も男のくせにイケメンが好きだとか豪語してる。そのせいで俺や特に一馬がその変態行為の餌食になっているっていうのに。

「でも、そーじって悪いやつじゃないよな」

その一馬の言葉に、俺は頷くのをためらった。

もちろん悪いやつだと思ってるわけじゃない。でも、簡単に認めてしまうのははつきりいってシャクだった。

確かに、非常識なことを口にするやつではあるけれど、俺たちが本気で嫌がることはしない。他の、欲望むき出しのやつらとは違う。

仲良くしたい、と。

田中はなんだかんだ良いながらも、純粹に俺たちを見ている。特に一馬は、その顔のせいで今までいろいろなことがあったから、田中に懐くのもおかしくないんだろう。

「ミツカ？」

「あ？ ……ああ、悪い」

ぼうつとして、つい歩みを止めていた。少し前の一馬が不思議そうに首を傾げている。俺は知らぬ間に見つめていた両手を下ろし、その隣に並んだ。

……時折、変なコトを考える。

見つめてくる視線とか、ふとこぼす微笑とか。人に言いながら、自分だって顔が整っていることに気付いているのだろうか？

気付いていてわざとだったら、ものすごく胸くそ悪い。背中から寄りかかって見上げてくる視線の、あの――

「そーじってさ、見た目じゃなくて雰囲気、たまに女の子みたいだよな」

「え、あ、ああっ!？」

「うわっ、びっくりした! なんだよ!」

「なわけないだろ、アイツはどう見たって、男。変態すぎる男だろ!」

変なことを思い出しかけた頭を振り払って、大声で自分に言い聞かせた。一馬に怪訝に見られた。死ぬほど恥だ。

ちよつと他校まで・前編(前書き)

前話前日

ちょっと他校まで・前編

——遅い。

組んでいた足を下ろしたら、思った以上に強く音が鳴って衆目を集めてしまった。

「……あの、つまらない？」

ついでに勘違いまでさせてしまったみたいで、舞台上からゴテゴテに着飾ったマント姿の男が降りてきた。大いに不安そうな顔。もとより自信なさげに笑う人だと思っていたけれど、今は特に眉尻が頼りない。まるであたしがいじめているかのような構図になっている。

あたしは安心させるように笑い返して、マント男とその背後、ヨーロッパの町並みを再現した舞台を見やった。

そう、ここは体育館。そして、あたしは演劇部の見学に来ているのだった。

「いえ、すみません。あまりにも夢中になってしまって、つい。どうぞ、続けてください」

「ほんと？ 良かった」

咄嗟のごまかしに、マント男はふわりと笑う。

……なにそれ反則。

さっきまでの頼りなさはそれこそ今の笑顔を引き立てるための演出だったんじゃないかと思うくらい、今の表情は本物だった。かわいいうす、花も恥じらう王子っす。

無意識に鼻を抑えて王子が世界に戻っていくのを見つめていると、ふと振り返って首を傾げた。

お、おねだりポーズ。

「田中くん、演劇部に入る気になった？」

「――」

はあい！と、大声で手を挙げそうになったところ、ポケットに入っていた携帯が振動したことで我にかえった。

……うおう、危ない、またその手にひっかかるところでした。ついさっきもそのおねだり攻撃を免れず、こうして見学に誘われたのでした。

「すみません、電話みたいなので……出てきます」

顔の前で手を合わせて颯爽と体育館から出る。背後では、部長ふられちゃいましたねーとかなんとか、マント男を慰める声が聞こえていたけれど構うまい。……構うまい、構……いたいけど激しく構いたいけど、構うまい！

むしろどしてあたしが演劇なのっつー話だ。廊下でいきなり声を

掛けられたときはナンパかと思って心躍らせたものののに、演技一つしたことのないあたしの何を見初めたというのか。

舞台上にいたくさんのイケメンさんたちは正直名残惜しいが。あたしだって分をわきまえることもあるのである。

そうして、携帯のディスプレイに映った文字にあたしは憤怒した。

「——コタロー！ 遅い！」

『す、すみません、宗二せんぱあい！ ああの、部活の先輩が……』

「言い訳聞かないよ！ 先に映画誘ってきたのコタローのくせに待たせるとはどういう見だ、ああおい？」

『すみませんごめんなさい！』

電話口の向こうでペコペコと頭を下げるコタローが容易に想像できる。学校が終わったらすぐに迎えに来ますから、と朝に別れたときのウキウキとはまるで逆だ。

放課後になっても連絡一つないんだもの。これくらい、怒る権利はあるだろう。おかげでイケメンに誘われるわ、演劇部に誘われるわ、イケメンに微笑まれるわ……あれ、ちょっといい思いしてんなあ。

「まあ、いいよ。とにかく今からなら大丈夫なんでしょう？ 待ってるから」

あっさり機嫌をなおしたあたしがそう言ってやったのに、

『す、みません、それが今日はもう無理そうで……！ あ、明日は……ダメっすか？』

あっさりコタローが覆した。

「……」

『せ、先輩？』

「ここまで待たせといてそれかよ……用事あったら早めに言つてよ」

『ち、違うんす、オレも電話できない目に合ってて！ その、待たせたことは謝ります！ でも、連絡だけはずっとしようとか——あ、せんぱ、ギャー！？』

「え、コタロー？」

壮絶な叫び声と共に、ぶちんと電話が切れた。

……なんだいまの。

通話を終えた電話をしばし眺めてみたけど、もう言葉を紡ぐこともなく。首をひねりつつも、その携帯をポケットにしまって歩き出す。

コタローってバスケット部だったよね。そういや、先輩によくいじめられるって言ってたっけ。もしかして今も愛ある指導を受けて……。指導……おしおき？

……見たい。

「いや断じてそんな趣味はないがね」

誰へともつかぬ言い訳をこぼしながら、ニヤニヤと歩みを進めるのは家とは反対方向の駅の方。

いじめたいとか、いじめられたいとか、そういうアレじゃなくて、いじめられてるコタローに興味があるわけでもなくて。

……いじめてるその人に興味が。

あのコタローの断末魔の叫び声からするに、結構なるドSだとエスパー。顔というよりもその鬼気迫るドSテクに興味しんしん。

言ってもあたしだって、映画楽しみにしてた分コタローへの恨みはあるからね。一緒になっていじめるのもアリだと思うの。

あれ、つーかこれあたし、大丈夫かな。

ちょっと他校まで・中編

駅を二つ乗り継いで、到着。あたしは懐かしい校舎を見上げた。

「いやあ、変わってないね」

変わってたらどうかと思うけど。だってここに来なくなってから二ヶ月とちょっとしか経ってないわけで。

そう、ここ、コタローの通う高校は以前あたしが通っていたところでもある。

あたしと兄ちゃんは同じ高校に通っていた。だから本当だったら、あたしがあたしであろうと兄ちゃんであろうと転校する必要はなかったのだ。けれど、それでもわざわざ転校したのは、ここに兄ちゃんを良く知る人たちがたくさんいるから。

いくら見た目が兄ちゃんだからって、あたしは本当に「宗二」じゃないんだから、ここにはいられないと思って両親に転校をお願いした。

まあ、兄ちゃんの知り合いも多かったけど、あたしの知り合いだったたくさんいた。今じゃ向こうは誰一人としてあたしのことは知らないんだけどね。

「つと」

感傷に浸ってついつい足を止めていた。足を踏み出して、校門を抜ける。放課後ずいぶん時間が経っているからか下校生の姿はない。残っているのは部活生だけみたいだ。

よしよし、これなら兄ちゃんの知り合いにも会わずに済むだろう。今日の狙いは、あくまでもコタロー！むしろコタローをいじめるドS先輩を拝みに！

……ドS先輩？

今更ながら、そんな素敵物件がこの高校にいたらあたし知らないわけないんじゃないかなあと思うんだけど。

つつても、バスケ部の知り合いにそんな人なんていないし。コタローが入部してからはますます知らないし（応援に行こうものなら面倒くさいことに）。

とりあえず百聞は一見にしかず、か。

グラウンドを通り過ぎ、バスケ部の活動拠点である体育館を目指す。他校の制服も怪しいもんだけど、物陰を選べば誰にも気付かれなかった。なにしろあたしはこの高校の元生徒、こうして抜け道を通って近道することも可能なんだぜ！

調子に乗って中庭の草陰を駆け抜けたことが間違いだった。

「……ぶわあ！」

人にぶつかりました。

……え、え、つーかぶつかってる？　ぶつかってるというか、も

つと言葉を選ぶなら一方的にタックルしてるというか、勢いに乗じて抱きついてるというか。

なんか嗅いだことのある、いい匂い。

「けほっ」

「あ、スミマセン」

名残惜しく感じながらも、さっと手を離す。どうやらあたし、その人に中腰の体勢でぶつかっていったらしく、ダイレクトに内臓にダメージを与えてしまったみたいだ。まあその分その細腰を堪能できましたけどね……とか邪なことはあとから考えることにして。

あたしは、自分よりも背の高いその少年を見上げた。

「……あれ」

いくらなんでも怒ってるかなど思ってたんだけど、そういう場合じゃなかった。無表情なその顔はよく見たことのあるもので、そしてここで見られるわけがないもの。

あたしはポカンと口を開けずにはいられなかった。

「かず——って、うおおお!？」

途端、彼の足下にたくさんの教科書が降り注いだ。びっくりして見ると、彼の肩に掛かっているシヨルダーバックの底が抜けていて、そこから遠慮なく中身がぶちまけられたらしかった。

ポカンと口が開く。しかし、目をぱちくりさせるその人を見ていたら、ふと抑えきれない笑いがこみ上げてきた。

「あは……あははははっ！　びっくりしました、なんでこのタイミングなんですか！」

しかもバックが破けるってどれだけだよ！　滅多なことじゃそんなことにはならない！

まるでコントばりのワンシーン、ついツボに入ってしまった。立ちつくすその人に悪いとは思いながらも笑いを止められず、お腹を抱えて座り込む。

「ふふ、もしかして自分がぶつかったからかも。笑ってる場合じゃないですね」

なんつーことをほざきながら笑う失礼なあたし。せめて、とぶちまけられた教科書を拾いにかかっていると、その少年もゆっくりとしゃがみこんだ。

顔が近くにくる。無表情に戻ってるのはなんだか残念だけど、やっぱり綺麗な顔。和磨にそっくりで、でもメガネをかけている分、ずっと知的だ。つーかメガネ和磨も素敵だなおい！

「はい、どうぞ」

手当たり次第拾い集めた教科書類を揃えて渡す。大口開けて笑ってしまわないように気をつけたつもりだけど、変な半笑いになったかも。

しかし、なぜかその人は本を受け取らない。手を伸ばしたままどうしようかと本に視線を落とした。

「……これ、全部授業で使う物ですか？ 難しそうな本も混じってましたけど、読んだりするんですか？」

「変な人、ですね」

「え、あ？」

初対面、やっと喋ってくれたかと思ったらいきなりけなされた。さっきからじいじと見られていたのも、このあたしというものを観察していたからか。

反応に困っていると、なぜかキョトンと首を傾げられた。

「僕の本に興味を持つ暇があったら、最初の目的を果たしたらどうですか？」

「え、最初の目的って？」

「急いでいたでしょう。どこかに行くつもりだったのでは？ 僕に構う暇、ないと思うんですが」

あー、そういうこと。ついうっかり美少年とぶつかったせいで、自分も忘れてたわ。しかしそれを不思議そうにあたしに進言してくるこの人もどうかと思うのだけれど。

「そんなの、ここを放って行けるわけないよ」

あたしは手を伸ばさない少年に、本を無理矢理押しつけると立ち上がって自分のカバンをあさった。目当ての物を探しながら、言葉が続ける。

「ぶつかつといてじゃあねはないですよ。そんなに薄情じゃありません。それに……よっと」

取り出しますは、いつも持ち歩いているエコバック。ビニール素材でできていて、使わないときは小さくまとめられるタイプのもの。広げたらかわいいハート模様だったのには目を瞶るとして。

「あなたに出会えたのですからね……」

最大級のムードをまき散らして、極めつけの一言。ついでに妖しげに笑ってみたのだけど、彼は驚きでも喜びでもない、ぐむむと眉間にしわを寄せた顔でこちらを見返してきた。

……なにその、胡散臭いものを見るような目は。

あ、ダメか。今のダメだったか！

「僕に出会えて何の生産性があるの？」
「……」

むしろ真面目に切り替えされたよ。どーすんのこれ。

「さあ？ 生産性とか難しい言葉は分からないので却下。未来のことも分からないので、今のところどうなるとも言えません。そもそもメリットが欲しいんじゃないって、ただ仲良くしたいなーっていう願望？」

「……仲良く？」

「だって、せっかく会えたんだもんね。あなたが嫌ならもちろん、無理は言わないですが」

こっそり物陰から見るだけに留めておきます、と内心。

「それより、ほら。この袋にその本入れてください。持ち歩けなくて困ってたんでしょ？」

空気を入れて、エコバックを彼の前に広げる。最初は何故かあたしの顔を見つめてじっと動かなかったけど、どうぞと言うとゆっくりと本を詰め始めた。

「変な人……」

しかし相も変わらずそういう評価。不思議そうにあたしを見上げたり、首を傾げたり、本を詰める合間にいちいちそういう仕草を挟むものだから、あたしって胸がきゅーんとやられてた。

あたしより背が高く、知的な印象のくせに、なんてかわいい人だ。物事をなにかも理屈付けで判断するから、あたしのノーテンキな下心が理解できないんだろう。

やっと本を詰め終わったところ、あたしは座ったままのその人に手を伸ばした。

「はい、つかまってください」

「……」

素直に彼は手を取って立ち上がった。そこまでは良かった。しかし、それからのことは、あたし自身思ってもみない展開だった。

何故か、手を離さないその人。かと思いきや、ぐっと体を寄せてあたしに影をかぶせるように近づいてくる。

これは、もしやまさか……迫られている!?

「ちょっと待って、いきなりでそういうのは……!」

困るけど、困るけど、オイシすぎて困るんだけど!

無表情な彼は、こうしてみるととても妖艶だ。何も語らない唇が逆に意味深で、気になって。こんな風にされたら、普通の女なんか一発でコロリだ。

「おれい」

「……おおうっ？」

「僕を好きな人は、キスしたいっていうから」

「……」

……どこから一体つつこめばいいですか……！

え、ちょっと、あれ？ 好きと言われれば好きだけど、果たして本当にそれでいいのか。むしろそんな軽々しい理由でキスなんぞ頂いてもいいものか。言わせてもらうと、あたしのエコバックとこの美少年のキスとじゃ計算が合わないんです。

……そもそもあなたは好意を寄せられれば捧げまくっているんですかと。

「間違ってますか？」

言葉を紡がないあたしに、少年が聞いてきた。

「うん……まあ？」

「……」

「そういうの、好きな人でもしちゃってください」

そういつて、彼から離れようとしたとき。

「――拓磨、おまえなにやってんだよ！」

がぼつと体が引き剥がされて、別の体温を感じる。またも目をぱちくりとさせる、美少年をはっきり真正面に捉えて。

あたしを後ろから抱くのは、誰？

聞いたことのある声から割り出そうとして、でもぎゅうと抱きしめられて息が詰まった。

「宗二先輩……何もされてないっすよね？」

あれ、コタロー？

ちょっと他校まで・後編

「何もされてないっすよね？」

焦ったように、でも切なそうに聞かれて、あたしは答えることができなかった。

「……」

「せんぱい……？」

俯くあたしの顔を心配そうに後ろからのぞき込んでるのは、コタロー。コタローは、未だ抱きしめる手を緩めないで、ただ大事なものを取られまいとするような強引さと優しさであたしを拘束している。

どうしてここに？

なぜ急にこの体勢？

聞きたいことはたくさんあれど、やっぱり言葉が出ない。……なんでかって、そりゃ。

——苦しすぎて息ができないからだよ！

コタローの馬鹿力！ あたしよりも上背があるだけに上から覆い被されてちゃ抜け出せるものも抜け出せない。耳元にかかる吐息を

どうかかしようと思っても、振り払うはずの両手が胸の前でしつかり折り畳まれてしまっている。

苦しくて、顔が熱い。酸素を求めようと口が開く。

……ちよつとまじ誰か助けて。

「こた……！」

「そ、宗二先輩！？ い、一体何をされたんすか！」

「んっ」

「そんな顔っ……！」

なんだおまえいいから早く手を離さんかい！

あたしが苦しがっていることもお構いなしで、青くなったり赤くなったりコタローは一人勝手に忙しい。ついでに拘束する力が強くなったとなれば本当にもう身の危険を感じるしかなかった。ほね、骨もミシミシ言っただけど！

懇願してコタローを見上げたら、泣きそうな表情で顔を逸らされた。

「た、拓磨！ おまえが先輩をこんなにしたのか！」

こんなにしてんのはおまえだよ。

「みだらに乱れていやらしく……。見損なったぞ、拓磨！」

だからおまえだよ。

「こう見えて宗二先輩は、男なんだぞ！　いくら可愛いからって男に手を出すやつがあるか！？　おまえ、変なやつだとは思ってたけど、まさかそんな趣味があるだなんて……」

「——おっ……まえのことだってんだろばかあ！」
「んぐがっ!？」

ありったけの力を振り絞ってあたしは背後のコタローに頭突きをかました。ちょうどその顎にヒットしたらしい、コタローが後ろに飛び退く隙を狙ってその拘束から逃れる。

やっとのことで自由になったあたしは、ぜはあぜはあと荒く息を繰り返し、驚愕に目をぱちくりとさせるコタローを中腰のまま見返した。

「こ、たるおお……」

「せ、先輩！？　どうしたっすか、さっきとはうって変わって目が据わってるっす」

「死ぬかと思った！　どうしてそう、きみは手加減を知らないの！」

「手加減！？　オレは先輩が心配で……！」

「あやうく窒息死させられるところだったわ！　何勘違いしてるんだか知らないけど、別に何も……って、あれ？　さっきの人は？」

ぴしっとその人を指さして、無実を証明しようとしたのだけれど、

その指の先にはもはや何の姿もなかった。もう一度コタローに視線を戻す。手をホールドアップさせて、首を傾げていた。

「もう行っちゃった……っすね」

「ああもう、コタローが絡むから。悪いことしてしまったな……また会えたらいいけれど」

いなくなった方を見てそう呟いたら、後ろでコタローがムツと声を上げた。どうやらあたしがその人と一緒にいるのが面白くないらしい。

まあそりゃ、あの人がキスしてこようとしたのは事実だけど、でもそれって別に深い意味はなかったし。というよりも、本人は意味をはき違えてただあたしにお礼したかっただけみたいだし。
変な人だったけど、かなりの美形だったしなー！

「拓磨の野郎、何考えて……」

「あの人、タクマっていうの？」

「しーりーまーせーん！ だいたいあいつ、友達もいないようなやつなんですよ？ 勉強ばっかして、言ってること意味わかんなくて、そのくせ何でもすぐ要領よくこなして……むかつくっす」

「詳しいね、友達？」

「まさか！ ただ同じクラスなだけっす！」

同じクラス……ってことは、一個下だったのか。落ち着いてるし、背も高いからつい年上かと。顔が似てる和磨と比べても、どうみて

も拓磨くんの方が上っぽい。

……かずま？ たくま？

「ねえ、コタロー？ 拓磨くんって、名字……」

「……」

「こた？」

「え、あ、すみません」

コタローがぼーっとしてるなんて珍しい。普段から駆け回るのが好きで止まってる暇なんてないような子が、こんな風に何かを考え込んでいるなんて。

見てたのは、拓磨くんが消えた向こう？
どうしたんだろう。

「ふたり、仲、わるい？」

「そ、そんなんじゃ。ただ、あいつにしては、本当変だったというか。あいつ、いくら女子に言い寄られても、相手になんかしなかったのに」

「どういう意味？」

「あのとき、確かに先輩には――」

コタローは一人でブツブツと呟いているが、何を言っているのかはサッパリだ。

そんなに、あたしと拓磨くんが一緒にいることがショックだったのかな？ 昔からそうだ、盲目にあたしに懐いていて、あたしと仲

良くしているのが男子であろうが女子であろうが嫉妬してたりなんかして。

ほんの小さい頃から、きょうだいのいないコタローは忙しい両親にも構ってもらえず、あたしと兄ちゃんとずっと一緒に過ごしてきた。きっと、それが今でも依存という形で残っているのだろう。

「コタロー！」

「おわっ!？」

あたしは、俯いているコタローの背中を強く叩きつけた。呆然とあたしを見返してくるコタローにっこりと笑ってやる。

「帰ろう？」

「あ、はいっす……って、先輩！今日はスミマセンでした！しかも、まさかここまで来てるなんて思いもしなかったっす」

「今日のことはいいよ。それより自分がここに来たのは……」

あれ？　なんであたし、この学校にまで来たんだっけ。

「って、ああああ！先輩！先輩は？コタロー、ドS先輩！」

「どえすせんぱい？誰のことっすか？中村部長なら満足してもう帰宅しちゃいましたけど」

「んのおおうっ！それが目的で来たのに、なんてこった……」

「なんだ宗二先輩、中村部長に会いにきたんすかー？ちえーっ。二人仲良いですもんね。……というより異常。部長の宗二先輩に対

する執着が異常。オレとしては出会って欲しくないっすね」

コタローは、おそろくきょんとしているあたしの顔を苦々しうに見つめた後、拾うようにあたしの手を取り上げて、さっさと歩き始めてしまった。

その手を引っ張られながらあたしは首を傾げる。

あたしとドS先輩、仲良いの？

中村……聞いたことあるような気もするけど、友達にいた記憶は一切無い。執着されてたって意味わかんないけど、けど知らない人なはずはないだろう。

どういうことだろ、あたしが忘れてしまっているだけ？

「そういえば中村部長、今日やたらイキイキしてたっすね……宗二先輩、近々気をつけてくださいよ。……宗二先輩？」

「はい？」

「……」

「……はい？」

「先輩ってなんでそんなに無防備なんすか……」

はい？ いきなり何を言うかと思ったら、どうしてそうコタローガツクリうなだれちゃうかね。

無防備って、いつでもあたしは良い男を察知するためのアンテナは張り巡らせていますから。コタローが言わんとしていることは分からないけれど。

「ちゃんと、オレの側、ついててくださいよ」

見上げたコタローは、夕陽を背負っているからか、その口元に乗る笑みが優しいからか、どこか大人びて見えた。

まあそうだね、と他校生である自分のための台詞だと頷いてはみるものの。

……手を引っ張られながら、男同士だったことを思い出した。

ちょっと他校まで・後編（後書き）

入らなかったネタ。

「そういえば宗二先輩、少し痩せました？」

「え？ どうして」

「なんというか、ゴツツリしているというか、骨張っているという
か……抱きしめると固いです」

「……」

「先輩ってふわつとしてるイメージなんすけど」

「……」

「もうちょっと肉つけたらどうですか？ そしたら、オレ、うれし
ーです！」

「……コタローくん、それはね」

「はい？」

「男、ですから」

「はい」

「あのね、男同士そんなにほいほい抱き合うものじゃないよ」

「え、宗二先輩に抱きついちゃダメっすか？」

「……キューン言わない、萌ゆる」

小太郎青春事件簿

——一ヶ月ぶりにオレの前に姿を現した先輩は、どうしてかいつもと違って見えた。

その綺麗な顔も、優しくて明るい性格も、何も変わらないはずなのに、どこか、違う。時折ふと見せる先輩の無表情がそう思わせるのかもしれない。思い詰めたような、どこか諦めたような……そんな先輩、いつかどこかに行ってしまうそう。

いつも、笑っていて欲しい。

いつも、側にいたい。

間違っているのは、オレの心なのかもしれない。

今日もいつも通り、先輩を迎えに行ってから学校まで来た。一緒にいる間はそれが嬉しくてそれどころじゃないんだけど、たまにこうして、一人になった後でじわじわと不安に襲われるときがある。あーやだなあ。前みたいに同じ学校だったらもう少し一緒にいられたのに。

そう思って、昨日誘った映画も結局オレがドタキャンしちゃった。

「もいっかい先輩に会いたいなー」

もらしつつ、辿り着いた教室、自分の椅子に乱暴に座る。クラスメイトたちが何だ何だと騒がしく群れるのを適当にあしらって机に突っ伏した。

「恋煩いじゃねーの？ 小太郎にもとうとう春が来たか？」

「お、やっと幼馴染みのお兄さんから卒業したか。おまえだって普通にしてればモテるんだからさ」

「昨日その彼女と映画に行ったんだろ？ もしかしてフラれたか」
「どうなんだ、小太郎」

……映画行っていない。

ってか、彼女でも、フラれても、女の子でもないし。

心の中で反論してたけど、クラスメイトたちには伝わらない。むしろ言葉にできないほど落ち込んでいると思われたのか、しばらくしていそいそと散っていった。

幼馴染みのお兄さんから卒業……か。宗二先輩も、彼女作れって言うし、どうしてそういうこと言うんだろ。

一緒にいちゃ、ダメなのかな。

ちらりと目だけを上げて、目の前の席のヤツを見る。そいつにだけは珍しく、携帯なんて眺めている。

「……拓磨」

そいつは三秒ほどして振り返ると、おはようと挨拶を寄越してきた。一応オレも返す。

「おまえが携帯使ってるの初めて見た。持ってたんだ」

「兄貴にメール送ってみたんだけど、心配された」

「なんて送ったんだよ」

「おもしろいことがあったって」

それで心配されるとかどういことだよ。脳内回路自分の好きなようにできてそうなのだから、きっと伝わりづらい変な文面で送ったりしたんだろ。

こいつは、クラスメイトの三ツ瀬拓磨。

顔が整っていて勉強もできて、と女子からは人気だけど、いかにせんこの無表情。何考えてるんだか分からなくて近寄りた印象もある。だから一見して仲の良い女子はいないけど、影で慕われたりやたら突撃告白が多かったり、果てはストーカーされてたりと結構苦労してそう。

それでも本人は勉強してれば後は別にどうでもいいって感じだから、そうは見えないんだけど。

「ていうか、拓磨、兄ちゃんとかいたんだ」

「一個上の」

「ふーん……なあ、おもしろいことって？」

「……」

こっちの質問には答えないのか。

黙って前に向き直ってしまったので、オレはそれを追うように自分の席から離れ拓磨の机に手を置いた。

「宗二先輩のこと？」

「……」

「本当に昨日、何も無かったんだよな？」

「七海が僕を問いつめる意味が理解できない」

しらばっくれるように言って、拓磨は机に広げたノートに向き合った。それ以上オレと話すことはもうないといったげにあしらわれて、ムツとする。

たぶん、おそらく、先輩が言うように、拓磨は先輩に何もしてない。

もう分かっている、けれど。

昨日、中村部長から解放されて帰る途中、オレが二人を見かけたのは偶然だった。先輩の手首を掴んだ拓磨が、覆い被さるように先輩に迫って……。

心臓が止まるかと思った。

どう見ても、キスしようとしているようにしか、見えなかった。

「好きになったの？」

無意識に聞いてから、しまった、と思った。今までノートしかとらえてなかった拓磨の目が、オレを見たから。

その唇が、小さく音を立てるために開く。

「キスは、僕の好きな人とするんだって、昨日の人が言っていた」
「……拓磨？」

「じゃあ、相手が僕のことを好きじゃなくてもするもの？　僕のことを好きだという人はみんな、本当は僕のこと好きじゃない？」

「た、拓磨」

「昨日のキスは、どういう意味でしたら良かったんだろう」

「ちよっと待って、拓磨！　昨日、おまえ先輩にキスしようとしたことは、事実か？」

「おれい……でも、しなかった。でも、しなくて良かったのか？」
「……たくま」

拓磨がこうして饒舌なものも珍しいけど、眉根をひそめているのも珍しい。基本なんでもすぐに解決するし、分からないことがあってもこんな風に思い詰めた表情をしたりなんかしない。

ほんの少ししかまだ同じクラスになっていないけど、今まで見たことがない顔。

「そもそも、唇を合わせることになんの意味が？」

キスの意味をそんなにじっくり考えるやつも珍しいけど……。だいたいそんな風に目の前で悩まされると、こっちが反応に困る。こいつ、こんな顔しといて恋愛下手……。いや、恋愛のれの字も知ら

ないんだろ。

オレだって得意な方とは思えないけどさ。でもいきなり、意味もなく先輩に迫ってただなんて、こいつ、本当に変だとか――

「うわっ!?!」

考えこんでいると、いきなり首襟ひっぱられた。立っていたから急に腰が折れ曲がって痛い、がそんなことを考えている暇は無かった。

もっと痛かったのは、唇の方だった。

「……むにむにしてて気持ち悪い」

オレから離れた拓磨が、嫌そうに吐き捨てた。それでもって、服の袖で唇を拭う。その一連の動作を呆然と見つめてしまったオレ。

……は周囲のどよめきの声でようやく我を取り戻した。

「おええええ！ オレの台詞だよ、おま、おまえ、一体何してくれてんだ！」

「なになって、キ」

「言うな！」

そんなもん自分の唇で体験してんだから嫌でも分かる！ そうじ

やなくて、そうじゃなくて、どうしていきなりオレが奪われたんだという話だろ！

オレも負けじと自分の唇を服の袖で拭うも、一瞬のあの悪夢の感触は簡単には消えなかった。

ああ、オレが大事にとっておいたファーストが……。

「やっぱり、分らない」

「もしかして、キスの意味を知るためにオレを……！」

「ああ、了承を取れば良かった？」

「取っても嫌だ！」

最悪だ。こんな最悪なことって、他にない。こんなのだったら、本当にファーストキスは先輩とが良かった。

先輩の、柔らかそうな唇が、良かった。

「小太郎……おまえ、そっちの春が訪れてたのか……」

「まさか、三ツ瀬とだったとは……」

「どっちにしろおまえって変な方向に行くんだな」

ううう、と崩れ落ちているとクラスメイトが異質なものを見るような目でオレを見てきた。違うんだと弁解しても、届くことはなく……。

おまえのせいだろ！と拓磨を見るも、今やあいつは目の前のノートにつきっきりで、しでかした最低なミスのことなんか微塵も気にしちやいなかった。

「幼馴染みの兄さんに報告してやれば？ 恋人ができましたってな」
「違うってば！ 違います、違うんです、宗二先輩ー！」

授業が始まって先生に怒られるまで、オレはずっと窓の外に向かって叫び続けていたのであった。

保健室は女の子の友

下腹部を襲うのは、あの、懐かしい痛みだった。

——あ、やばい。

瞬時に思うのは、女の子だったときの名残だろうか。今や男の姿、一生縁がないはずなのに、気持ちちは正直だった。

あたしはきゅっと下腹部をおさえて周囲を見回した。

今は歴史の授業中。黒板の前に初老の先生が立って教科書を朗読している。その声だけが響く教室内で、隣の席の柳井くんと目があった。

きょとんと首を傾げられる。あたしの様子がおかしいのが分かったのか、いつもだったらニツコリと笑われるところだけど、今日はしない。代わりにあたしから笑いかけて顔を逸らした。

さて、どうしようかな。

この痛みには慣れている、我慢することはたやすい。けれど、慣れているからこそこのままじっとしておくのも頂けない。

——生理のときと一緒だ。

「先生」

あたしは思い切って手を挙げた。お腹が痛いので保健室に行って

きます、と正直に告げ、教室を抜け出すことにした。

……痛い。

立ち上がると、じくりと刺すような痛みが増した。女の時もそんなに酷い方じゃなかったから、こんなの初めてだ。

一步を踏み出した途端に目眩がした。

「ったなか！」

「……あ、悪い」

前のめりに倒れ込んだところ、椅子から身を乗り出した和磨に支えられた。あたしの両手を持ったまま、険しく顔をのぞき込んでいる。

「おまえ、顔真っ青だぞ。大丈夫なのかよ」

「うん、ちょっと、たぶん、ごめん」

「田中」

自分でも言っていることが分からなかったけど、訂正する余裕もない。ひとまず大丈夫だと言い直してからあたしは教室から抜け出した。

チャイムの音で、あたしは目を覚ました。一瞬ここがどこか分らなかったけど、白いカーテンを見てすぐに保健室だと気付いた。

そうだ、あたし。

トイレに駆け込んだ後、こうして保健室で寝かせてもらったんだ。

……結論から言うと。

生理では、なかった。

そりゃそうだ。男の体のどこにそんな機能を果たすものがある。

それ以前に必要な。よく考えれば分かることなのに、元が女なだけに、痛みが同じだっただけについてしまった。

そもそも男の体になってるって時点でぶっ飛んでるんだけどもね。

今は痛みはひいている。ホッと落ち着いて、もう一度ベッドに横になった。

生理じゃなかったとして。一体あの痛みはなんだったんだろう。もしかしてただの腹痛？　どこか内臓に支障をきたして大変な病気になっているとか。

……死んだらやだな。

せつかく兄ちゃんの体になってんだから楽しむべきところは楽しみたいよな。

そんなことを思いながら、ベッドから立ち上がる。元のあたしより幾分か背の高いこの体も、もう使い勝手を覚えている。ベッドから地面までの距離も、立ち上がったときの視線も。

このまま、いつまで……いつになったら？

不毛だなあ。

「田中？」

と、そのとき、ベッドを覆う白いカーテンがぺらりとめくられた。

「……ひやあ！　み、見ないで、今あたし……！」
「は？」

顔を押さえて後ろに後退る。のも相当にマヌケだったと思うんだけれど、もっとマヌケな声を出したのは、姿を現した和磨の方だった。

あたしも一瞬何が起こったのか分からなくて、ピタリと止まる。指の隙間から、和磨のポカン顔を見つめてようやく思い当たった。

「うおおおう、今は気にしないでくれたまえ、ゴホンゴホン」
「ああ？　ああ……」

ごまかせたのか、和磨は曖昧に頷いた。

あ、つぶない……今、あたしすごく素だった。ここ最近はずっと男として振る舞えていたと思うのに、突然だったからか女の子な反応をしてしまった。

うわあ、フツツに考えて気持ち悪いことしちゃったな。

和磨も眉間にしわ寄せてあたしを見てんじゃない。それで口を開いたかと思えば、こんなことを言い出した。

「おまえ、泣いてたのか？」

「……泣いてねえ」

「んじゃ泣きそうな顔してる」

「見んな」

「そんな辛かったんならまだ少し休んでおけよ。昼休みだから様子見に来たけど、俺も戻るし」

「……うん」

なんかよく分からないけど、和磨が優しい。そこで満開の笑みを披露されようものなら、それこそ素で愛を叫びそうだけれど、相変わらずの仏頂面なので助かった。

「自分も、行くよ」

そう言っ、顔を見られないように和磨の脇を抜けた。保健室には誰もいなかったから特に挨拶もせずに入出口へと向かう。

あれ、和磨？

後ろを振り返ると、立ち止まってあたしを見つめるその姿があった。

「どうしたの」

「……おまえってさ」

「え？」

「——なんでもない」

なんだよ、言いかけておいてそんなの、やめろよ。

和磨が頭を振って、あたしに歩み寄った。煮え切らないままその顔を見つめていたら頭をぐしゃりと撫でつけられて視界が落ちる。

「言えよ、なんかあったら、いろいろ」

変だな、おかしいな。ぶっきらぼうなその言葉なのに、何故か素敵な笑顔の何倍も嬉しく感じる。

暖かくて、ホッとする。

「……うん、その」

「なんだ？」

「和磨……」

「うん」

「下着、何派？」

「……」

「……」

「今聞くことじゃねえだろ、バカ！ 教えるか！」

殴られた。

うん、ちよっと、言ってみただけなんだけどね！

破壊王、襲来

腹痛にさいなまれていたあたしも、すっかり調子を取り戻して今や和磨にほかすかと殴られ、廊下を通行中。

結局下着何か教えてくれなかった……。

違うの違うの。変な意味じゃなくてね？ ほら、あたしってば、男になってから分からないこといろいろとあるしさ、自分的にブリーフとかどうよと思うのにダンスにはボクサーしか入ってなかったりしてね？

なんのはなしだっけ。

「あ？」

一人下着談義が白熱しそうなところで、あやしい人だかりを発見した。中心は教室の中らしいけれど、人が溢れすぎて廊下にまで広がっているらしい。

何だろうとまず和磨を見上げたら、すでになんかキレてました。

……あーしつこく下着聞いたの怒った？

「またアイツら……」

「って、あいつら？ 何か知ってんの？」

「写真だ、あの！」

「あー、柳井が撮られてたやつね」

ぼん、と手を打って納得。そういえば、隠し取られていたっけね、
と思い出した。

どうやらその写真の販売があ教室で行われているらしい。

「やめさせてやる」

「ちょ、待って和磨。せっかくだし、自分も見たい」

「うるせえ」

「いった！」

また殴った！ 最近和磨ってすぐ暴力に訴えない？ すぐあたしの
体に手を出すんだから！

……あたしの体に出す、って響きなんかやらしいな。やあだ
もう、このあたしの変態！

むしろ調子良すぎて困るね、あたし。

ひとまず駆け出そうとする和磨の腕を取って引き留める。ちよっ
と見てからでも、とお願いするとしぶしぶ了承してくれた。

和磨を廊下に残し、あたしはその人混みに挑んだ。

教室の中は、たくさん生徒はいたけど歩けないという程ではなかつた。
もともと使われない教室なのか、机や椅子がひとつも見あたらない。
するりと人の合間を縫って奥まで進むとようやく机の群を見つけた。

「すみませーん」

肩をぶつけた人に謝りながら、机の上に目を落とす。

「わー」

本当だ、和磨が言うようにたくさんの写真が置かれてある。柳井くんのはもちろんのこと、見たことのあるイケメンの姿もちらほら……。あ、これは演劇部部长でしょ？ 和服来てるの、すごく似合う。あ、こっちは和磨……って何この色気ある水浸しショット！こっちは雰囲気違うけど椿本先輩？

カメラマンの腕か、被写体の素質か、すっごくキラキラしてる。確かにこれは欲しくもなる。一応側には段ボールの看板で「お気持ち頂戴」とかいてあった。

いくらか払えってことね。

大々的に肖像権のある物売り買いできないからだろう、そんなあやふやな言い回しだ。

「そのきみ、誰の？」

鼻を押さえつつ写真を見回していたら、正面に座っていた細身の男に声をかけられた。頬がこけていて、明らかに不健康そう。

誰の？って聞かれたのは、誰のファンなの？ってところだろうか。

「柳井くんです」

ごまかそうと思ったけど、つい口からついて出た。これじゃ周りに群がる一方的なストーカー紛いな人と一緒じゃあんと思ったけれども、いっても変わらない気がするのでまあ良し。

「一馬きゅんなら……」

きゅ、きゅん……！

「あれ？ きみ、見たことあると思ったけど、もしかして」

「はい？」

「ほら、これ、この人です？」

さっと写真が目の前に出される。そこにうつっていたのは、視線を外して愛らしい一馬きゅんと、そのほっぺたにすり寄ってご満悦なあたし。

あのときのツーショ。

「これください」

思わず。

「あ、やっぱりきみ！　これ意外と売れてるんだよ、普通だったら嫉妬の対象になって祭り上げられたりするんだけどね」

確かにこのすりよりっぷり、あたしがあたしに嫉妬してもおかしくはないわ。

「良かったらまたさ、二人一緒に撮らせてよ。あ、撮るのは別の専門のヤツなんだけどさ、言っとくから。きみにもマージンあるし」

「売るってこと？　えーそれはどうかなあ」

「よく見るときみも結構いい線いってるし、そうだ一枚撮らせて――」

ガッシャアン！

と、そのとき売り子の声に覆い被せるように轟音が鳴り響いた。恐ろしくシーンとなる教室内、驚きで声が出なくてただぼかんと正面を見つめてしまった。

まるで、ガラスが割れる音……。

もしかして、耐えかねた和磨が強行突破に！？

そこで初めて振り返って、あたしは更なる驚きに目を瞠ることになった。

「探したぜえ……宗二！」

いつの間にか、モーゼの割った海のように開けた道のさきにしたのは、一人の男だった。こめかみから流れた血を気にもせず、ただひたすらあたしだけを見据えている。

……こ、これは。

この人、は。

「ぶ、つとばーす！」

「お、ああ、あああ！」

破壊王、ナカムラ！

そして彼女も襲来

伸びすぎた髪の毛を耳にかけたりピンで止めたりするところは、意外と律儀な人だと思わないでもないのだけれど、それを全てぶち壊すのがそのつり上がった目と、八重歯をむき出しにした口だ。

完全に人を食うための顔面装備だ、野性すぎる。

言葉にならない言葉をもらしながら後退るあたし。教室にいた人たちも距離をとってあたしたちを見ているし、あたしもとうとう壁際に追い込まれた。

「宗二……二ヶ月もの間、よくもおれを放っておいたな」

あたしにはもう後がないっていうのに、じりじりとその人物はあたしとの距離を詰めてくる。

ひ、ひいい。

「まさか転校しているとはな、思いもしなかったぜ」

そう言って、あたしに向かって何かを放られる。薄い紙切れかと思いきや、手に取ってみるとそれは先ほどまで自分も手にしていた写真だ。柳井とツーショットしている、ニヤニヤなあたし。

どうしてこれを、ナカムラが？

コタローと同じ制服のナカムラが手にするわけではない……と思うけど、こうして写真を売りさばいていればどのルートからでもこの人の手に渡ることはたやすかっただろう。
こうして、探していてくれたみたいだし？

……こえええ。

「おい、どうにか言ったらどうなんだ？ あ？」
「いや、あの、はい」

何を言えばいいやら、検討もつきません。
ごめん、本音。

ナカムラ、その名前は破壊王として聞いたことあれど、こうして面と向かってお話するのは初めてでございます。

ななななんで、ナカムラさん、あたしのこと知ってんですか？

「おうっ？」

気がつけばもう、彼は目と鼻の先。コタローなんて目じゃないってほど高くそびえる彼はいとも簡単にあたしを覆い囲む。

「やっと見つけたんだ、逃さねえ」
「えっ……」

思わず心臓ドキッて鳴った！

上から見つめてくるその視線も真剣そのもので、これは乙女としては、まさかと疑わずにはいられない。

もしかしてナカムラはあたしのこと……！

「殺してやる」

「ぎゃひーっ！」

飛んできた拳をすんでのところで避けた……あたしの反射神経を誰か誉めて。そして夢妄想ラブマジックに巻き込まれたあたしを誰か叱って。

拳がめりこんだ背後の壁は、ぱらぱらと音を立てて碎け、見るも無惨な姿だ。一步間違えればあたしもこうなっていたかと思うと……あ、気が遠くなってきた。

「相変わらずすばしっこいやつだな。ああ？ 今日のかかってこねえのかよ」

「めめめ滅相もない」

魂をしっかりと握りしめて必死で小物アピール。まさしく破壊王であるこの人とやりあう気はあたしにはない。

いくらあたしだって男なら誰でもオツケーそらほいほいとケツ追いかけるわけじゃないっての！

なんなのこの人、あたしが狙われる理由が全く分からね。

「おい、宗二！」

「ヒッ！」

怯えながら見上げると、ナカムラが苛立たしげに舌打ちをした。
うええと震え上がるあたしの腕を、乱暴に掴んで引き寄せる。

「おれが見ねえ間にとんだ腰抜けになったもんだな。ちょっと前までムカツク面しておれのことを見てただろう？」

「痛っ！」

握る力強いんですけど、腕もげそうなんですけど！

何の話をしているのかもサッパリなのに、初対面でこんな仕打ちってないと思う。見た目こんなんでもね、あたしってばただの、普通の、ちよつと変態な女の子なのに！

……だからってそんなこと口に出せようはずもなく、役に立たないひ弱な抵抗をするのみだ。

「離せよ」

そのときだ。パアン、と乾いた音が間に割り込んだ。

解放された自分の腕を不思議に思いながら目を開けると、そこには先ほどまであたしが対峙していたナカムラの姿はなかった。

「か、和磨あ！」

その代わり、あたしの前に立ちはだかっていたのは、なんとたの
もしい、友達兼イケメンの和磨くんだった。

異変に気付いたのか、こうして助けに入ってくれたらしい。今な
らその背中を狙って飛びついてもオッケーなのと思ったけど、これ
でも空気を読んでぐっと思いとどまる。

「ああん？ てめえは何だ」

「こっちの台詞だ。いきなり他校生が窓ぶち破って飛び込んでくる
んじゃないよ」

ほんと何してんすかナカムラ。それで傷はこめかみに一つつてど
うなんすかナカムラ。

「田中、こいつおまえの知り合いかよ？」

「いやいやいや、ぜんぜん全く！」

「宗二！ てめえ、忘れたとは言わせねえ！ てめえはおれが認め
た唯一の敵、おれの獲物だろうが！」

いや知らん！

何をあんたそんな力一杯——いや待てよ。

何かひっかかる。ナカムラが言っている「てめえ」って本当にあ
たしのこと……？

もちろん「あたし」はナカムラの知り合いなんかじゃない。でも、あたしが、「あたし」じゃなかったとしたら……。今ナカムラが言っている宗二ってのが、本当の宗二だったとしたら？

「……」

ううん、いや、その可能性の方が高い。
だって、この人は二ヶ月前の宗二を知っている人……。

そして、兄ちゃんがたまに血だらけで帰ってきたことを思い出してよ。それもこれもすべてが返り血だったことを、思い出、し……たくもねえ！

「和磨、逃げよう！」

あたしは咄嗟に思いついて、和磨の手首を引っ張った。いきなり
のことで驚いた和磨だったけど、それが最善だと気付いたのかすぐ
にあたしの前を走った。

ナカムラがいる方とは逆の出入り口から廊下を目指す。

「宗二、逃がすか！」

追ってくる、ひい、追ってくる！
走るスピードを上げて廊下を疾走するも、ナカムラも一直線に追

いかけてくる。

「一旦隠れるぞ、人気のないところだ！」

「うん！」

今度は逆に和磨に手を引っ張られながら人気のないところを探す。昼休みで、生徒たちが自由に歩き回っているのが幸いだった。ナカムラに薙払われるのは忍びないけど、その影に隠れて逃げ切ることができる。

そして飛び込んだのは角を階段を上がってすぐのトイレだった。折り重なるように個室に体を押し込んで鍵を掛ける。

破壊王にしてはたやすい壁かもしれないけど、ひとまずここに隠れていると思われなければ……。

「はあ……」

安堵しかけたとき、うなじにかかった吐息で今の状況を思い出した。

何も考えずに飛び込んだせいで、あたしはいつの間にか和磨に抱きつく形になって個室に押し込まれていたのだ。

和磨はまだ気付いていないのか、苦しそうに息を整えながら、そして無意識だろうけどあたしの腰、というかケツに近いところに手を回している。

役得！と喜ぶところなのか一瞬本気で考えた。

いや、ダメだろう……これはダメだろう……我を取り戻した和磨に「しね」と殴られるのがオチだろう。

冷静なあたしが言う。

そうだな、名残おいしいけれども、ここは一旦離れるべきだ。

「ん、待て、まだ動くな……」

苦しい声で耳元囁かれて腰が砕けるかと思った。

じゃなくて……！　ここはあんた、あたしをはじき飛ばすところでしょう！　いつもの短気な和磨はどうした！

「はあ、んだよアイツ、何者だ」

「……」

「いきなり現れて、しかもお前を狙ってんのか？　わけわかんねえ」

「……」

「お前本当に……って、さっきから黙り込んでどうした」

「なんでもない……」

堪能してますとは言えない。

なんだろう、感触といい匂いといい、ものすんごく落ち着く。乙女心より先に萌え心かもしれん。

この際だ、とその背中に手を回そうとしたところ、ある異変に気付いた。

「うあっ」

背中に回すはずだった自身の両腕を、和磨の胸元に突き立てる。しかし、忘れていたけどここはトイレの個室だ、そんなに広くはない。距離は十分に取られることはなく、それどころか足りない分を、あたしの頭が背後のドアにぶつかる犠牲で支払った。

「お前、だから静かにしろと……」

聞いてられなくて、急いで胸元をかき集める。和磨の表情が怪訝なものに変わっていくのを見つけ、慌てて背を向ける。

「ごめん、なんでもな——」

「田中？ その声……」
「っ！」

口元を両手で強く覆う。何でもないとも言えなくなって、代わりに頭を振って伝えようとする。

「おい、田中……？」

……やうゝあい。

肩に手が乗った瞬間、弾かれるようにドアの鍵を開けて外に出た。

やばい。

さっきとは真逆に通行人をけちらしながら廊下を走って、階段を駆け下りた。

やっばい。

ナカムラに出会わなかったことは幸いだ。でも今やそんなこと関係ない。もっとやっかいな問題に直面してる。

ようやく外に出て茂みに隠れたときには、驚きよりも焦りよりも困惑の方が先に立った。

「……お、女に戻ってる……！」

乳、帰る。

何故か襲来する男の中の男

まさかこんな展開が待っているとは、誰が想像できただろうか。眼下に広がる小高い丘を二つ見下ろしながら、あたしは荒い息をもらした。

「お、おおお」

声を震わせながら、恐る恐る手を伸ばしてみる。黒い学ランに押しつけられて窮屈そうなそれだが、触ってみるとむにゅりとあり得ない柔らかさ。

「お、おかえり、マイ乳……！」

しばし揉んだ後で、こりゃねーよと我に返る。懐かしさのあまり、つい堪能してしまったが、ハタから見てもかなり恥ずかしい絵である。そう、柔らかいこの素材は、女特有の脂肪だ。今まで足りなかった何かが埋まったかのような、しっとり感がする。

あたしは、「あたし」に戻っているのだ。

鏡が無いのがもどかしいけれど、背中まで伸びた髪の毛や、丸みを帯びた自分の体を見るに間違った感はない。

あたし、ようやく女に……！

「女になれたのね！」

とにかく誰かに伝えたくて、立ち上がった。口から飛び出した言葉はかなりの誤解を招きかねなかったが、気にする余裕などない。両手を広げて駆け出そうとするあたしを、しかし遮るものがあった。

「うわあっ、ビックリした！」

いつからいたのか、そこには驚きの表情でこちらを見ている金髪の男子。

お互い立ちつくして見つめ合ったまま数秒が経った。ようやくこの状況を掴めたあたしがすぐに身を翻すも、相手も同じタイミングで我に返ったらしく、逃がさないとばかりに手首を取られた。

「きみ、女の子、だよな？」

イ、エース！ ちょっと前まで男してましたけど、たった今晴れて女に戻れたんですう！

……って、言っているのこれ？

心境的にはそのまんまだけれど、そんな夢みたいな話は誰も信じてくれないに違いない。かといって、女となった今、男子校にいるのだっておかしいことだ。

「ね？」

何も言わないあたしの顔をのぞきこもうと、その人が近づくのが分かった。金色に輝く前髪が音もなくサラリと落ちる。その隙間からのぞく純粹無垢な目と目があって、ハッとする。

ぶわあ、うおお、イケてるメンズ。

反則だ、ここでこんなときにこれを持ってくるなんて、反則だ！

「……」

純粹な乙女心もカムバックなのか、素で照れてしまった。目線を外したところ、前髪をそっとかきわけられた。うわごとのように眩れる。

「やべ、かわいい」

信じられない！ ……という顔をしているに違いない、今のあたし。顔のこと以前に性格ゆえにか雰囲気ゆえにか、あたしにはかわいいというよりも変態という言葉が似合ってしまう。

もしかして、「あたし」に戻ったんじゃないか？ 今度は「清楚な乙女」の体に乗っ取っていたりしないでしょうね？

「あ、ごめん……そういうこと、言うつもりじゃなかった」

あたしが嫌がったと思ったのか、素直に謝られる。彼の思わぬ行動に、ぱちくりと見つめてしまった。

じんわりピンクに染まりだす頬。その人は手の甲で口元を隠すと、顔を背けてしまった。……なんて乙女な反応だ。

「えと、そ、そんな格好して、何しに来たの？」

あからさまに話題を変えるのがおかしかったけど、あたしは表情を変えなかった。というか、何も答えなかった。

それが自分でもよく分からないという意味を込めて首を傾げてはじめて、その人はあたしにちらりと視線を戻した。

「彼氏？」

「え、いるのかってことですか？　なら、いないけど……って、あれ、違った？」

「あ、や、会いに来たのかなって思って……いないなら、いいや」

なるほど。

……女子が男子の格好までして男子校に行くのって、そういう可能性もあるんだ。じゃなきゃ、隠し撮り目的の侵入としか……って、あたししてないよ、してないからね！

彼氏は、まあないな。付き合いたいっていうより、戯れたいってほうが合ってるかも、こうね、ウフフアハハね。

「……あ、そうだ。田中宗二って知ってますか？」

そういえば、兄ちゃんはどうなったの！

花畑に行ってる場合じゃない。状況を思い出して咄嗟に聞くと、その人は名前を呟きながら首を傾げた。聞いたことあるけど、とは言うけれど、詳しく知っているわけじゃないらしい。

「そうですか」

聞き出すのは早々に諦めて頷く。

あたしがあたしに戻ったことで、兄ちゃんの世界も戻ったのか確かめたかったけど、どうやらここじゃ無理そうだ。せめて兄ちゃんを知っている人に聞こう。

……もし、本当に。

本当に、兄ちゃんが戻ったとしたら、今度こそ「死人」になっってしまうのだろうか。

頷いたまま落としていた視線をそっと上げる。

「あの、ありがとうございます……」

「大事な人なの？」

「はい？」

「だって、寂しそうな顔するから。会いに来たんでしょ？ 彼氏じゃなくて、片思いとか？」

「……まさか」

兄ちゃんのことは嫌いじゃないけどね。内面ファンシーで、外面は真面目優等生。何でもないって顔していつも要領よくものごとをこなしていたっけ。きつと他にも、ナカムラとの因縁みたいに、あたしの知らない顔もたくさんあるんだろう。すぐ近くにいるのが、当たり前だったのに。

「そういうのも、好きっていうのかな？」
「好き、か」

うーん、家族愛ってやつだね。

思い出せば、たったの数十日なのにやけに懐かしい。双子っていうほどシンパシーがあったわけでも、いろいろなところが似ていたわけでもない。ただ、友達みたいなサラッとした仲の良さだった。

うん、そういうのだ。そう思ってその人を再度見ると、眉尻を下げて頼りなく笑った。

「あれ、どうかしました？ お腹、いたい？」

「……あのさ、」

「はい？」

トイレでも保健室でもどこまでもお供しますという気持ちを込めて、真剣に頷くと、さっきのがウソみたいはその人は優しく微笑んだ。

「さっき、ソウジって叫びながら走っていく人なら見かけたよ」

「……あ、ナカムラ！ どっちに行きました？」

「あっち」

指さす方を見ると、最初にいた教室とは別、違う棟の廊下の窓が盛大に割れていた。ナカムラ……あんたの入り口は全部窓なのか。

追いかけてみようかな。今はあたし、宗二じゃないし、それに宗二がどうなったのかも分かるかもしれない。

あたしは体を向けた。

「あ、待って、一人で行くの？ 危険だってば！ きみみたいな女の子が、男だらけの中に入っていくなんて」

「危険？」

「ほら、男子校って結構、飢えているヤツ多いし、な？」

「ほー」

そういうアレね、襲われる的ニュアンスね。その人も立場的に言いつらいのか、小声で口ごもる。そんなあなたになら襲われても本望だわ、とか言ってもいいかな、言わないけどね！

本当に、優しいひとだ。

一見してチャラそうな金髪タレ目泣きぼくろなんだけれど、かもしだす雰囲気のせいかすごく純朴。かっこいい顔立ちなのに、かわいって言葉が似合いそうな、そんな。

あたしはくすつと笑い混じりに口にする。

「大丈夫だよ」

「ほ……ほら、そういうの、分かってない！ 俺も付いていく」

「ちょっと前まで自分、あっち側だったんです」

「え？」

「だから男の気持ちって分かるし、男の扱いも得意だと思います」

そのほらさ、いろんな意味でね。

「でも……」

「四の五の言ってる」と

引き下がらないその人の目元を強く片手で覆う。突然のことに驚いてか、言葉を失うのは読み通り。

背伸びして、その耳元に唇を寄せる。

「塞ぎますよ」

「なっ……！？」

そして、手を離して元の位置に戻る。顔を真っ赤に染めて固まるその人を見ながら、あたしはニツコリと笑った。

そうそう、カッコイイ男ってのはこういうもんよね！ 健気に心配してくれる乙女を冷たく突き放すようでいて、甘く落とし込む……これぞ、秘技・男の中の男。

ってこれじゃあ、男の扱いというより男の振るまいじゃあ……。

「……な、何で俺が照れてんの！」

その人は耐えきれないとばかりに両手で顔を覆った。

……うん、ポジション間違えちゃった。あたし、女に戻ったってのに、いつまでたっても男が抜けない。

なんだか大変なことになってしまった。

ふかあいため息をつきつつ、一人悶えているその人を置き去りにしてあたしは校舎へと走ったのだった。

襲来されてる場合でない

渡り廊下から、ナカムラが行ったと思われる特別棟へと潜入する。いくら学ランを着ているからといって、あたしが女だということは金髪のあの人にも分かったようにすぐにバレることだろう。

あの人だけならまだしも、その他大勢の生徒、まして先生なんかに見つかった日にはあたしは現行犯逮捕？ それはもう、場違い乳陳列罪とかで。……なにそれ嫌すぎる。

絶対に捕まってはいけないと固く誓い、中の様子をうかがっている。壁にかかっている時計を見れば、もう昼休みは終わりの時間を迎えていた。

けれど、なんだか騒がしい。身を乗り出すと、大人しく授業を受けていないのか、廊下に人が集まっていた。

「おい、そっち、いるか!？」

うお、危な!

前ばかり気にしていたけど、渡り廊下を渡って別の生徒が走ってきた。慌てて階段の裏へと身を隠す。

「今屋上へ向かってる!」

「無事だったか？」

「まだ誰も危害は加えられてねえけど、危なすぎるぞアイツ! い

きなりドアぶち破って教室に飛び込んできやがった」

「俺たちもそうだ。捕まえられんのかよ」

「先生が今みんなで捕獲しには行ってるけど、あまり期待は出来なさそうだ」

「つたく、何だって破壊王がこの学校に……！」

やっぱりナカムラかよ！ 余所の授業めちゃくちゃにして、一体どういうつもりなの。

「それが、ソウジがどうか、殺すが何とか」

そうだった……！ そもそもあたしを狙ってここまで来たんだっ
た！

じゃあなにそれ、宗二が出てこない限り破壊王ナカムラの暴走は
止められないってこと？

でも、宗二はあたし、あたしはあたし！？

「よし、俺たちも加勢するぞ！」

「おう！」

気付けば、集まった男たちは階段を駆け上がっていくところだった。
あたしは体の力を抜いて、一度大きく息を吐く。

決意を新たになると、体を起きあがらせそれに続いた。

屋上には、犯罪者相手に使うような刺又を手に手に、先生が集まっていた。そこでも見つからないように階段の影に身を隠す。あれで、ナカムラの首を押さえ込むつもりなんだろうか。

ナカムラが暴れているのを放っておきたくはないけれど、今捕まるのはあたしとしては避けたいことだ。

今一番、宗二に近いのはナカムラな気がする。たとえ少しの情報でも、ナカムラには聞きたいことがある。

「いたぞ、アイツを捕まえろ！」

そうこうしているうちに、先生のナカムラ捕獲計画が始動してしまった！

屋上の扉を開け放ち、数人掛かりで飛び込む先生たち。まさかと思ひ、身を乗り出すあたしだが、予想だにしない出来事がすぐに起こった。

ドガアン、とはおよそ人体が奏でるものではない音が反響する。と同時に、先生らが後方にぶっ飛ぶのをあたしはこの目で確認した。

「――邪魔だ」

その中心にそびえ立つ人物を、あたしは階段の途中から呆然と見上げる。首が折れそうなくらい、顎が外れそうなくらい呆然としすぎて、次に出す手が止まったままだった。

ナカムラ。

屋上からの光を背負い、仁王立ちするその姿は、静かだいてそれ

で闘志に燃えているような、不気味な恐ろしさがあった。

言葉が出ない。

すぐにナカムラはむき出しの齒を打ちならすと、あたしに背を向けて走り去った。

「あっ」

我に返るも時すでに遅し。そのどでかい図体は、どこにも見あたらない。

……つかまじ迫力ばねえなおい。宗二の見た目だったら一発KOされていたに違いない。どころかそのまま天に召されてる。

あんなの、誰かに止められるわけがない。だって背後には累々と先生のプチ死体が転がっているんだろう――

「こんなところに、女子がいるぞ」

「まじで？ あ、ほんとだ」

「ナカムラが連れてきたのか？」

「でも今は一人だし、ちょうどいいんじゃない？」

「だな」

……おい、ケツ撫でんじゃねえ。

振り返ろうと思った矢先、目に飛び込んできたのは死体ではなく、先ほど群を成していた男子のうちの二人だった。

てめーらどんな状況だか分かってんのかおい？

あたしが階段に手を置いて体勢を低くしていたのが、彼らにはちように良かったらしい。遠慮なくあたしの尻から腰まで手を伸ばすも、目が合うと、獣を隠した紳士的な顔で笑われる。

「なあ、黙っててやるからさ、俺たちと遊ばない？」

「そうそう、まわりは男だらけでおれら退屈してたんだよなー」

「きみだってもしかして、男と遊ぶためにここまで来たんじゃない？」

「へー、悪い子だね」

からかうように笑われる。それでも動かず二人の言葉を最後まで聞いていると、すぐにあたしの体を絡め取ろうと四つの手が伸びてきた。

へー、こりゃまたおいしいシチュエーションで。

「……そうかもね」

あたしは体をぐりつと反転させ、階段に沿って仰向けに寝そべる格好になる。それから伸びてきた手の内の一つ、それを強引に引っ張り込んで、あたしの胸に触れるか触れないかのところで留める。

「あたし、悪い子なの」

「いいじゃん」

男子はあたしが受け入れたと思ったのか、嬉々として体を寄せてきた。

——これが、違う誰かだったらと、思わずにはいられない。なにゆえこんな、なにゆえこうも……。

ぎりり、と腕を掴む手に力が入る。

今日はいろいろな意味で興奮していてね。本当だったらその甘い誘いに乗ってやっても良かったんだけど。

「——ただ、」

「んぐっ……おああ!？」

ちょうど良い位置にある下っ腹に右足をお見舞いして、その男、天高くぶつとばしてあげました。

「なっ……!」

これぞ、か弱い女の子の気合いのなせる技。宙を舞う男と、呆然と見上げる男を後目にあたしは言い放った。

「あたしが遊ぶのは、いい男、限定なので」

てめえらお呼びじゃねえんだよ、と。

襲来されてる場合でない（後書き）

けっこう痛い主人公。

話がぜんぜんすすまねえ……襲来編早く終わらせたいのに……

安心と不安の襲来で終結

男らに絡まれた分、ロスを埋めようとあたしは必死で校内を駆け回っていた。一度はナカムラと直面したってのに、すぐに見失ってしまうなんてあたしとしたことが。

またすぐに見つけなきゃ、ナカムラに外に出られてしまっっては到底追いつけない。

——どころか、あたしが捕縛される。

「な、んで、あたしが捕縛ー!?!」

と、自分に自分でツツコミたくなるのも無理はない。だって、こうなるとは予想だになかったのだ。

後ろから聞こえてくる足音から逃れようと、何度耳を塞ごうと思ったことか。これは対ナカムラ用の走りではない。これはナカムラではなく、何故かあたしを追いかけてくる生徒によるものなのである。

「女がいるぞ!」

「ナカムラの女だってよ、そこそこいける!」

「女、女、酒池肉林!」

「男の娘ハアハア!」

いろいろと勘弁して頂きたい。

男に死ぬほど追いかけられるってなにそれいい女ゆえの激ウマシチュ？　けど、ときめかないのは何故だろう。この間違ったテンション、まったくもってときめかない。

……今度落ち着いたときに、もっと香り立つような男メンツでよろしくお願いしたい。

とか、余裕かましてる暇だって、ないんだけども！

あたしだって今、目標を追いかけてるんだから、何であれここで捕まっただけじゃない。けれど願い虚しく、逃げ道の向こう、正面の角からまた別の男共が突如として姿を現した。

このままじゃ挟み打ちだ。

もう駄目だ……と、絶望を覚悟した瞬間。

「うわああ!？」

「ナカムラが出たぞ!」

「逃げろ、ヒーッ!」

目があったはずの男たちが次々に蜘蛛の子を散らすように逃げていく。あたしを追いかけてきていたと思われる足音も一度にピタリと止んだ。

「なかむ——」

やっと見つけた目標に、声を掛けようとしたとき。

「お前、いい加減観念しろ！」

「かっ……！」

また別の声が、ナカムラの後ろから飛んできた。あたしは咄嗟に口元を押さえ、目を瞠る。

息を乱してほんのり汗ばむその色気の集大成のような、つまりその、和磨がそこに……あ、動悸息切れが。

「田中をどこへやった？ あいつをどうする気だよ」

「しつこい！ ガタガタうっせえんだよ、殺すぞ！」

「ああ？ やれるもんならやってみろよ」

「チッ、弱えくせにいきがってんじゃねえよクソが」

や……やり合ってる場合じゃないよ、二人とも、ねえええ！

和磨もなんでそんなにキレてんの？ 二人がケンカする必要はどこにもないはずでしょう？

この一触即発の空気をどうにかしようと、あたしはなんとか口を開いた。

「待って！ 宗二のことなら、あたしが……」

二人の視線がこちらを向く。

「あたしが……」

しかし、二の句が継げない。

それは、口にするべき言葉が見つからなかったからじゃない。その、目が、あたしの口を閉ざさせた。

「なんだよ、おまえ。関係のない女はすっこんでろ！」

邪魔なものを見るような、和磨の冷たい視線があたしを突き刺す。思わぬ一言に、口をマヌケに開いたまま固まる。

——関係のない、女だって。

「ちよ、待って！ あたしは、本当は」

「田中宗二です」？ ……駄目だ、そんなこと言えないの、気付いてしまった。

だって、あたしは、田中宗二じゃない。あたしは、田中宗二の双子の妹で、本当ならここに通っていない生徒で。

それは分かっていたのに、和磨には関係ないとどこかで思っていたのかも。

でも、和磨にとって、やっぱりあたしは赤の他人だ。

「おまえ——」

うお、だめだ、心が折れる！

あたしは、和磨の目も言葉も振り切って、じっとこちらをみていたナカムラの手を取った。そのまま、引っ張り、振り返らないように全力疾走でその場から逃げた。

辿り着いた先、体育館倉庫は、人目に付かないようにという必死ながらも配慮した場所を選んだ。

ナカムラの手を持ったまま、荒く息を吐く。全力疾走に付き合わせたナカムラは、一つも息を乱しておらず、ただそこに突っ立っていた。

う、まさか怒ってる？

今更しでかしたことを思い出して、顔が上げられない。息を整えるフリをして、俯いたまま視線を彷徨わせるあたし。

「てめえ……宗二の妹か？」

空気を切るほど素早く上げた顔は、ばっちりナカムラと鉢合わせしていた。なんで知っているの、と聞くより前に、顎を取られガツと上げられる。

「宗二に似てる。話には聞いていたが、本当にいたのか」

「あ、あたしのこと？」

「ふーん、宗二の方がかわいいな」

失礼な！ 女であるあたしより、男の兄ちゃんの方がかわいいですって！

……そういうもんかなあ、そういうもんか？ ナカムラに言われるとは思いつかなかったけどもね！

じゃなくて。

「宗二がどこにいるのか知ってんのか？」

あんたも何でもないように進めないで！

あたしは、ナカムラから手を離すと、一歩二歩と後退って、息を付いた。まずは落ち着いて、と。

……あたし、ちゃんと宗二の妹に見える？

「ねえ、宗二ってここにいるの？」

「おれがてめえに聞いてんだよ。はつきりしなきゃ、時間の無駄だ」

ナカムラは、宗二も、宗二の妹もちゃんと認識してる。死んでいる事実も知らないみたいだ。

あたしがあたしに戻っているんだから、宗二の存在もなくなって「死体」という認識に戻っていてもいいはずなのに、ナカムラは単純に知らないだけ？ それとも、死体ではなく、さっきまで「あた

しだった宗二」が動いていたことを記憶している？

どちらにしても、宗二の行方が分からない。

らちがあかないと思ったのか、振り返り出ていこうとするナカムラを見つけてあたしはその腕を取った。

「ナカムラさん、宗二を見つけて」

「てめえも居場所をしらねえんじゃ用はない」

「宗二が、兄ちゃんが、どうなってんだか分からない！」

「さっきまでここにいただろうが、そんなに遠くには行っていないはずだろ」

「本当に？ いなくなったりしてないよね……誰も知らないところに、あたしのせいで……！ あれ、だってあたし、どうして兄ちゃんに？ あたしのせいで、兄ちゃんがなくなったのかもしれない！」

「おい、落ち着け！ てめえ、アイツの妹なんだろうがよ？ アイツがただけ生意気で、ただけしぶといくらい、知ってんだろうが」

取り乱しかけるあたしの両手を、今度はナカムラが力一杯掴んだ。その力はおよそ女子に向けるものとは思えないほどに強く、あたしは顔を歪ませる。

でも、その口調は、どこか信じられるもので。ただの、ケンカ相手とは思えないような、ナカムラの兄ちゃんに対する信頼のようなものが伺えた。

「アイツは、このおれを一度は倒した男だぜ。ひょろいくせに身の

こなしは人間とは思えないほどに素早く、隙がない。その強さをおれは認めているんだ。いつかあの余裕ごとぶちのめしてやる」

「……ナカムラさん、よっぽど兄ちゃんが好きなんですね」

言っていることはぶっそうだけれど、その挑戦的な目つきと晴れ晴れしい口元からそう見てとれた。

なんだ、あまり怖い人じゃないじゃん……。

呆けた状態でじっとナカムラを見つめていると、ふと視線が合つて無感動に言い放たれた。

「十夜だ」

「とおや？」

「宗二はおれをそう呼ぶ」

そう言つて頭を強くなでつけられた。痛い痛い。

でも、十夜って……そう呼べることかな。怖い人っていうか、完全に優しい人みたいだ。表情はやっぱりずっと変わらないし、一見怒ってるみたいだけど、あたしを慰めてくれようとしているのが分かった。

「てめえも、宗二みたいに生意気に笑つとけ。あんまりむかつくとぶっ飛ばすかもしれないねーけど」

「お、お手柔らかに」

はははっつって、苦笑いになってしまったけど、ナカムラ……も

とい十夜さんは拳を振り上げることなく体育館倉庫から出ていってしまった。

しばらくその背中を見つめ続ける。

本当に、宗二を見つけてくれるだろうか。あの十夜さんだったら、兄ちゃんのことを任せられそうで、少しだけ安心した。

不安なのは、曖昧で、不確定な、あたしの体。

あたしは、本当にどうなっているの？　せつかく、柳井くんにも、和磨にも、いろんな人と出会えたのに、それはすべて無くなってしまふの？

「だれも、あたしを知らないから……」

和磨の、あの冷たい目が、心臓を痛くさせる。

うめきながらしゃがみこんで、そのうち瞼を閉じた。

——あたしじゃなくてもいいから、もう一度……。

願ったか願わなかったか、分からないうちに、あたしは意識を失った。

こぼれ落ちたひとひらの記憶

今思うと、あの頃の兄ちゃんの言葉は、まるで遺言だった。

「僕がいなくなっても、きみは自分を大切にしてくれる男の子を見つくるんだよ」

とある時に、兄ちゃんはあたしにそう言った。物心つくかつかないくらいだったから、本当に幼い頃の話だ。

あたしは意味が分からなかったけど、大きく頷いた。小さいときは、それはそれは兄ちゃんのことを大好きだったらしい。

「全く、遅いなあ。今何時だと思ってんの」

高校生になって、よく夜遊びをして帰ったあたしは、こうやって兄ちゃんに出迎えられた。男の友達とちょっとゲーセンに、なんて言ったところで、怒るでもなくフーンって言うだけなんだけど。

心配しているというより、呆れているとったところ。

「少しは控えなよ？ 将来お嫁にいけなくなっちゃうから」

「でもでも聞いてよ！ 今日ね、初めて会った男の子がね、すごく格好良いんだよ、ハーフでね、目とかすっごくきれいで」

「はいはい、マイケルによろしくね」

「いやマイケルじゃないんだだけでもね」

ひらひらと手を振って自室に戻っていく兄ちゃんを見ながら、退屈してんのかななんて余計なことを思った。

妹の目からだ、兄ちゃんの見た目の評価が良く分からない。あたしと似たような顔を「ヒャーカッコイイ！」なんて称賛できるものじゃないし、見慣れてる分新鮮味も何もなくてただ「兄ちゃん」としてしか認識できない。

浮いた話の一つや二つも聞かないし……たまに名前を聞いただけで顔をひきつらせる人もいたけど、当時のあたしはその意味も分からなかった。

案外、兄ちゃんのこと知らないんだなあ。

兄ちゃんの知っていることといえば、まわりにこっそりファンシーなものが好きなこと。お部屋はかわいいカーテンが飾られていて、ぎっしりとデイベアが並べてある。たまに用事があって部屋に入ると、あたしなんかウエーと思うほどのかわいさが漂っているのである。

「兄ちゃん、相変わらず似合わないね」

「入ってくるなり失礼なことを言うな」

よほどお気に入りらしい。一番大きなクマさんをぎゅーっと抱きしめた格好のまま、怒られてしまった。

「どうしてそんな好きなの」

「君が兄ちゃんに構ってくれないからだろ」

「……ほんとうは？」

「妹よりかわいいから、好きなの」

「ひどいなー！」

冗談だか本気だか分からないのは、兄ちゃんのいつも。それに合わせてユルイ会話をするのが、そういえばずっと当たり前のようが続いていた。

今思うと、上辺だけの会話だったのかも。今思うと、詳しく兄ちゃんのことをしらなかったのはそのせいかも。

今思うと、クマに囲まれる兄ちゃんって意外とかわいかったかも

……！

「それより兄ちゃん、辞書貸して？」

「また学校に忘れたの？ ほら、机の上」

「うん、ありがとう」

感謝を告げたら、んー、と適当な返事が返ってきた。クマに夢中。当たり前前の、何気ない日常だった。

ある日、うちに電話がかかってきた。

兄ちゃんがとったから、内容はよく分からない。ただ、兄ちゃんが珍しく険しい顔をして何か話していたことが強く印象に残っていた。

出掛けてくると告げたのは、夜も11時にさしかかったとき。遅く帰ってくるときはあったけど、こんな夜に外に出ることはほとんどなかった。電話だって兄ちゃんの携帯になら良くなかったけど、それも全部適当にあしらってたみたいだし。

「あたし、付いていこうか？」

「いいよ。俺、一人で行ってくる」

頭撫でられた。

結構久しぶりのことで、何故か唐突に笑顔を向けられたことや、兄ちゃんが自分のことを「俺」と言ったこと、それらを気にすることを忘れていた。

離れていく手を見つめていると、ますます不安がつのった。

絶対に、おかしい。絶対に、何かがある。

兄ちゃんを追いかけて外に出たのは、割と衝動的行動だったかもしれない。

急いでいるのか、走っている兄ちゃんのもとまで辿り着くのは大変なものだった。なに、意外と兄ちゃん足早い。前は、あたしの方が早かったのに。

そうだ、背だっけいつの間にか抜かれていた。いつもずっと一緒にいたはずがそれもなくって、そしたら頭を撫でられることも減っていった。

兄ちゃん、どこ？

見つけたのは、踏切で電車の通過待ちをしているところだった。
駆け寄って声を掛けようとしたとき――

兄ちゃんが、踏切を越えた。

ちようどまさに今から電車が来るところだ、無事に通り抜けられるはずがない。

「兄ちゃ……！」

闇夜の中、目が痛いくらいの眩しいライトに照らされる。鉄が奏でる不快な音が追いかけるように迫ってきて、もう逃げられないと脳が悟る。

――轢かれる。

スローモーションの中、兄ちゃんと、目があった。
目を見開いて驚愕に満ちた表情で、こっちを見てた。

「――！」

時の流れがいつも通りに戻った瞬間、何かが潰れるような嫌な音が耳の奥に響いた。

痛みを感じる暇もなく、知らない間に終わっていたのだ。

沈んでいく、消えていく。

もう何も聞こえなかった。誰のことももう、目には入らない。

ああ、悲しいな、お別れだ……。。

——あれ、これは、誰の記憶？

一番の収穫は、デレと添い寝でした

パチリと、目が覚めた。

「あ、そーじ！ 起きた！」

考えようとして、でも何も考えられない。今ここにあるのが現実だか夢だかなんだか分からなくて、ただばちばちと瞬きを繰り返すけれど、やっぱり分からない。

にこにこ頬を染めて、嬉しそうなそんな笑顔はそれはすごく、癒されるんだが。

——起きあがれない。肩にものすごい負荷がかかっている。おまけに、その笑顔が天井の光を遮っている。

……いや、なんで、あたし、柳井くんに押し倒されてんの？

「良かったー！ ずっと目が覚めないのかと思った」

このまま覚めなかったら、あたし、どうなったのか激しく気になる。このままいいようにされてたんでないの……！ 柳井くん、かわいい顔してなんて大胆だ！

よし、今から狸寝入りモードオンなん……！

「一馬」

「んあ」

気合い入れて目をつむる前に、柳井くんの顔がさっとフェードアウトした。代わりに、見たことのある天井が目に入って、一瞬混乱する。

少しだけ顔を上げると、かわいいテディベアたちと目があった。

……兄ちゃんの部屋？

「何だよ、ミツカ」

「危ないからこいつには近づいちゃ駄目だろ」

そっと視線を移動させると、柳井くんの首根っこを掴んだ和磨がいた。あたしが見たことに気付いたのか、同じように視線を返してくれる。ただ、柳井くんみたいな笑顔ではなく、あくまで険しい表情で、だ。

「まだ本調子じゃねえんだろ、寝てろ」

反対の手でぐいっと頭を押さえ込まれて、あたしはあっけなく枕に沈んだ。あ、ベッドの上。

……あたし、どうしちゃったんだっけ？

どうして、和磨と柳井くんが、兄ちゃんの部屋にいるの？ 兄ちゃん、家族以外は誰にもこの部屋に入れないのに、兄ちゃんの秘密がばれてしまったな。

ごめん、兄ちゃん――

「んん！？」

あたしは再度ベッドから起きあがると、すぐに自分の服に手をかけた。いつの間に着替えたのかは分からないけど、着ていたパジャマのボタンを上から一つ一つ外していく。

「バッ、何やって……！」

驚いた和磨が止めようと手を伸ばしてくる。構わず上半身全てを脱いで、そこで目にしたのは白い肌だった。

真っ平らな。女としての象徴がきれいさっぱり削り取られた、胸板。

に、兄ちゃん……。

「んなんてこったいー！」

「それはこっちのセリフだバカ！ いきなり脱ぐやつがあるか！」

錯乱しかけるあたしに、和磨が勝手に服を着せようとする。

「ちょっと待って、十夜さんはどうなったの！　せっかく探してくれるって言ったのに！」

「おい暴れんな！　一馬も、手伝え！」

「あ、うん！」

「あれ、このままじゃ駄目じゃん！　これじゃあずつと兄ちゃんが、兄ちゃんが帰ってこれられない！」

「おい、宗二！」

「――違う！　あたしは、宗二じゃない！」

大きく声を張り上げた時だった。

「先輩！」

部屋のドアが開いて、コタローが飛び込んできた。しかし、言葉は続かず、みるみるうちに顔から血の気が引いていく。

「なにを、やってるんですか……」

呆然としているコタローの見つめる先では、和磨があたしの両腕を拘束していた。しかもあたしは半裸ときている、何をどう考えても導き出されるシチュエーションは一つしかない。

「つて、違う、これはだな！」
「聞きません」

和磨の弁解もむなしく、コタローは冷ややかにその両腕を剥ぎ取ると、あたしの服のボタンを一つ一つ丁寧に止め直していく。あたしはしばらくされるがままになりながら、ボーっと俯くコタローを見つめていた。

どうしてだろ、なんだかすごく安心する。

「先輩、大丈夫っすか。やっぱりオレ、先輩を一人にするべきじゃなかったっす！　あまりに弱々しくて、襲ってしまいたくなるのも、オレ分かったたのに……！」

「か、勘違いだ！　別に俺が無理矢理脱がしたわけじゃない！　一馬も見えてただろ！」

「お、おう」

「先輩、怖かったでしょう」

「いや、聞け！」

優しく心配するように、あたしの顔をのぞき込むコタロー。あたしは今、宗二だけれど、コタローだけがあたしを、あたしとして見ていてくれる気がして、ひどく嬉しい。

コタローだけが、本当のあたしを、知っているからかな。

どうしてもぬくもりを感じたくて、すぐ側にあるその体に抱きついた。

「せ、先輩……!」

「おまつ……!」

「ミツカ、なんだあれ!」

コタローが動揺するのが分かった。ついでに、その後ろにいる和磨と柳井くんも。それでも構わず、ぎゅっと腕に力を込めると、コタローも同じようにあたしの背中に手を回してきた。

「もう大丈夫っすよ。怖いことはもうないっすから。先輩は今一人じゃないっすからね」

「うん……」

コタローが大人だなあ、おい。

ずびびつと鼻を鳴らして、あたしを立ったまま抱きしめるコタローの顔を見上げる。安心させるように微笑みを向けてくれた。

「お、おまえら何勝手に勘違いして盛り上がってんだよ。いいから離れろ!」

「先輩は今オレのものなんです!」

「はあ!?! だれがおまえのもんだよ! こいつはなあっ……!」

「ミツカ? そーじのこと好きなの?」

「すっ……!?!」

はあ、ちょっと落ち着いたわ。変な夢を見てしまって、あたし、すごく不安定になっていたのかもしれない。

……あの夢は、どういう意味だったのかな。
まるで、兄ちゃんの死の体験をしたみたいだった。

もう思い出しくなくて、ふるっと一回頭を振る。

なんにせよ、もう一度、兄ちゃんの格好で和磨たちと再会する
ことになった。他人じゃなくて、きちんとあたしのことを知ってく
れていて……。

ちょっとだけ、嬉しい。

あたし、兄ちゃんの体で過ごすこの生活を、すっかり気に入っ
てしまっているんだな。

「ふざけんなよ、バカ！」

「痛ッ!？」

急に殴られてあたしの切な思考がぶったぎられた。なんだよもう、
と目上げるとそこにはあり得ないほど顔を真っ赤にさせた和磨が
いて。

ええ？ 何そのギャップ萌え。

あたしからふいと顔をそらすと、部屋を出て行ってしまった。

「何が、あったの？」

「先輩になんてことするんですかあの人は！ あたま、痛くないで
すか？」

「いや、不思議とどこことなく愛を感じたわ」

「そーじって相変わらず変だよなー」

「あー！ 愛なら、オレが今ここで！ 添い寝とかしたいっす！」

「あの、コタロー、最近あからさますぎない？ だいたいそういう

のはさあ……」

「じゃ、おれ、反対側ね！」

「愛という名のぬくもり頂戴……！」

「ちよっと先輩！　だめっす、三人は駄目っすー！」

ひとまず素敵な夢を見ようと思います。

一番の収穫は、デレと添い寝でした（後書き）

シリアスっぽい続いたせいか、普段のテンションがわからんぬ
……！

ってなって、最後にぶっとびました。

次からもっとぶっちゃけたギャグのような勢いだけのとにかくあの
日々に戻れたらいいなと思います！

みなさんたくさん読んで下さってありがとうございます！

収拾つかなくなった

再び目を覚ましたあたしは、ベッドに一人横たわっていた。ボーっとしたままあたりを見回してみるも、デディベアたちと目が合うばかりで特に変わった様子は無い。

いつもの、朝？

……なんか、幸せなイベント（特に柳井くんと添い寝とか）があった気がするけど……。

夢だったのか？

そう思いつつ、ベッドから抜け出す。頭をがしとかきながらリビングに向かうと、まさかの事態に出くわした。

「あ、そーじ、寝坊だよ」

「先輩！ ちょうど良かったです。今夜ご飯できましたから、一緒に食べましょう」

なんで、いんの？

にゃごにゃごと駆け寄る柳井くんと、わふわふと手を振るコタロ。しかもでかい態度でソファを陣取る和磨と、こじんまり机に向かう拓磨くんの姿まであるとなると。

……ちょ、まじ、これなんていう楽園！？

「宗二先輩？」

「おお、思わず自分でもキモイ発言が」

「夜ご飯、食べますよね？」

「うん、あるなら頂く……って、今何時！？ あれ、母さんたちは？」

何が何だか分からぬまま、柳井くんに腕を引っ張られながら、ダイニングテーブルにつく。そのまま隣に柳井くん、反対隣にコタロイ、そして見計らったように動いた和磨が、拓磨くんを連れて向かいに座った。

テーブルの上には、おいしそうな食事がたくさん並んでいる。母さんが作る料理はいつも同じで見飽きていたから、なんとも新鮮だ。いい匂い。

「ハルカさんなら、アキユキさんとお出かけしたっす」

「……父さん」

「オレたち、学校で倒れてた先輩を家まで運んできたんです。それからアキユキさんが帰ってくるまで様子見させてもらってたんですけど、アキユキさん、帰るなりせっかくだからって、オレたちにここを任せて出掛けちゃいました」

「父さん!？」

いやもう、父さんどうした自重しろ。

ハルカさんラブにも程がある……。子ども放っておいて自分たちだけ楽しもうなんて、自分勝手な親父だな。

ってことは、今この家にはあたしたちしかいないってこと？

ハーレムか！

と、キモイボケ第二弾が出たところで、あたしは冷静になって、四人を回し見た。

「あーえーと、ごめん。あた、自分をここまで運んでくれたんだよね？ やっぱり、学校で倒れちゃったんだ」

「詳しいことは知らないっす。それが……」

「おまえ、体育館倉庫にずっといたのか？」

コタローにかぶせて和磨が口を開く。コタローを気にしつつも、あたしはウンと頷いた。和磨のじつと見つめてくる視線が、やけに真剣だ。

「寝てんのかと思ったけど、一向に目え覚まさねえし」

もしかして、心配してくれてた？

「あ、おれが第一発見者！」

と、隣の柳井くんがひよこつとあたしの顔をのぞき込んでくる。

「そうなんだ、ありがとう」

「つかさ、ミツカが保健室に様子見に行ってから二人とも戻って来ないし、いつの間にか他校生が乱入してるし、やっとミツカに会ったと思ったらそーじがおかしい、あぶない、って必死だし」

「一馬！」

「そんな怒んなよ」

「怒ってねーだろ！ ほら、食うぞ！」

そう言ってさっさと和磨は箸に手を付けた。怒ってないっていうか、あからさまにプンスカなんだが……いつもみたいに理不尽な気持ちにはならない。

「和磨」

「んだよ」

「いろいろと迷惑かけてごめん。和磨も、ありがとう」

「……つかさ、おまえ、言っただろ。何かあれば俺に……」

「ハイハイハイ！ 先輩、オレも誉めてほしいっす！」

「コタロー、和磨？」

「なんでもねえバカ！」

何かあれば俺に……？

和磨が言いかけた言葉に、あたしはふと思いついて目を泳がせた。いや、あのね、そーでなくてね、これね。

なんとなく脳内で言い訳をしつつ、無然とした表情で肉を頬張る和磨を歩き過ぎ、ひらひらと手を掲げるコタローに視線が泳ぎ着く。

「先輩、オレが二人をここまで案内したんすよ？ ちょうど拓磨と

寄り道してるときに先輩運んでる二人が見えて。なんか寮に連れて行こうとしているみたいだったからオレが断固反対したんっす!」

「え、寮!」

「ですよ、あり得ないっすよね、野獣の巣窟っすよね!」

なにそれ、ちょっとオイシイじゃん……!　なんてこのタイミングで言いませんけれどもね、ええ、ええ。

「そうなんだ。ありがとう……」

コタローに告げ、ちらりと視線を動かす。あたしの向かいに座つて、もぐもぐと咀嚼しているその人物……。

いやね、いつつつこもうかとじれじれしてたわけなんです。

「拓磨、くん?」

「僕は何もしていません」

「……そうですか」

すげなくされた……。

拓磨くんとは、本当に、あのとき以来だ。コタローのドS先輩を揉みに行こうと学校に乗り込んだときに偶然出会った不思議系イケメン。

よくよく考えるとこのメンツってほんと変な感じ。

「あのさ、薄々感じていたんだけど、もしかして和磨と拓磨くんって、兄弟？」

恐る恐る聞いてみると、和磨の手が止まった。相変わらず拓磨くんは一人ぱくぱくしている。

この反応、どっちなんだ。

答えを待っていると、つーかさ、と和磨が言葉を発した。

「なんでおまえら、知り合いなんだよ」

「おれも思った！ 小太郎が声かけてきたとき、拓磨もいたからびびった」

「あれ、柳井、コタローのこと知ってたの？」

「ううん、今日初めて会った」

「あ、そう」

初めて会ったにしては、もう名前呼び。そういえば、あたしに對するときもそうだったなということ思い出した。基本的に柳井くんって誰にでもすぐ懐くよね。

「拓磨くんとは、コタロー通じて、っていうのかな？ 偶然知り合っただけど……」

「おい、タク。もしかして、おまえが言ってた変な男ってのは」「これ」

つんとあたしを指さす拓磨くん。

へ、変な男って？　これ、ってどういう意味よ。失礼しちゃうわ、とその指先を避けてみたけど、それは追うようにあたしをとらえてきた。

「マジかよ……」

「だから、どういう意味？　自分はただあのとき拓磨くんと運命的な出会いを……あ」

「おまえ、俺の弟にまで手だしてんじゃねえよバカ！」

だからそれちょっと誤解のある言い方じゃ。そら、ぶつかっただとに乗じてギューしちゃったけど……。って、弟？　弟って、やっぱり二人、兄弟だったんだ！

こうして隣に座っているのを改めて見ると、本当によく似ている。片やメガネで雰囲気も違うといえ、整った顔が二つ並んでいるのはなんとも壮観だ。

それにしても性格はほんと正反対だよな。

「あ、そうだ。お兄ちゃんなら、拓磨くんに言ってよ。キスは誰とでもするもんじゃないって」

ガタン！　とテーブルが揺れた。

「き、キス……？　もしかしておまえら、したのか？」

「したのかって」

「ぎゃああああ！　いやああああ！」

あたしが否定する前に、絹を引き裂くような悲鳴が上がった。
え、何ですかい！

振り向くと、何故かコタローが頭を抱えて机に突っ伏していた。
おかげでおかずがごろごろと転がっているけど、構っている余裕はないらしい。ううだのああだのうめきつつ、何やら悶え苦しんでいる。

何か辛いことでもあったのかな……？

「キスはもうしないよ。やっぱり興味ないものだったから」

「言うなー！」

「おまえ……」

拓磨くんは一人ひょうひょうとしているし、コタローはびっくりするぐらい取り乱しているし、和磨は何故かあたしを見たまま呆然としている。

意味がワカラン。

唯一いつもどおりの柳井くんが、あたしのお皿にせっせとおかずをよそってくれていた。

「そーじ、何食べる？ おれ、こういうの好き」

「あ、うん。きみごと頂くよ……」

星形のにんじんを目の前にかざしてニコニコ顔の柳井くん、まじで癒されんなあ。

……誰かこのカオスをなんとかして。

これが鼻血を出さずにいられるか

夜ご飯は、文句のつけようがないくらいにおいしかった。

コタローは、両親の忙しさのせいもあって、あたしたち兄妹と過ごす以外はほぼ一人で生活しているようなものだったから、家事全般はお手のものなのだ。とはいえ、あり合わせの食材でこのクオリティの料理を作るんだから、経験だけでなく才能もものをいっていると思う。

……まあ、あまり言う調子乗らせるんでね。どころか自分を嫁にと売り込んでくるのは分かり切っているので何も言わない。

あたしは料理全くダメだから、養ってくれるっていう意味なら遠慮なくお願いする。

「本当におまえ、あいつのこと知らねえのかよ？」

食器を片づけ、みんなでリビングに腰を据えた途端、和磨が切り出した。

あたしは、食後のデザートであるイチゴのシャーベットを口に運びながら、首を傾げる。

「今日暴れに暴れてたあいつだよ」

「ああ、十夜さんのこと？」

「とおや！？ やっぱり知ってんじゃないか、おまえ！」

低い机を挟んだ向こうから身を乗り出す和磨に驚いて、あたしはむせかけた。ソファの隣に座るコタローが大丈夫ですかとティッシュを差し出してくれるのを有り難く頂く。

ちなみに反対隣には何故か拓磨くん、そして向かいの地面に和磨、柳井くんである。自然にこうなった。

「知ってるっていうか、知り合ってたっていうか……知り合いだったっていうか」

「なんだよ。話したりしたのかよ？ おまえが倒れてたのに関係あるのか」

「確かに話したけど、倒れたのとは関係ないよ」

「じゃあどういふことだよ。あいつは変な女に連れ去られるし……意味がわかんねえ」

和磨がため息をつきながら元の位置に戻っていく。

変な女、ってのは多分、本来の姿のあたしのこと。和磨に気付かれなくて、逃げるように十夜さんを連れ去っちゃったんだ。

そりゃあ意味わかんないだろうよ。

苛立つように舌打ちされてムツとする。心配してくれてるんだってのは柳井くんの話からも分かってるけどさ。

「つーか、十夜って、中村部長っすか？」

スプーンを口にくわえてなんて言い返してやろうかと考えていたところ、横から別の声が割り込んだ。

コタローが、あたしを伺うように見ている。

「中村……部長？」

「中村十夜。オレの学校の先輩で、宗二先輩のお友達っすよ。……不本意だけど」

「ってもしかして、コタローが言ってたバスケ部のドS先輩？」

前にコタローの学校に突撃訪問をしたときに……というか、そのドS先輩に会うためにコタローの学校に行ったことがある。結局会えずじまいだったけど、確かそのとき、コタローは言ってた。

宗二と中村部長が仲良いつて。

……って、その中村部長が破壊王ナカムラ！？

破壊王ナカムラの名前は聞いたことあったけど、まさか同一人物だったとは……。破壊王のくせにバスケ部背負ってんのか？

「……先輩？ 知らなかったってことはないですよね？」

「あ、うん！ 知ってた知ってた！ 十夜さ……十夜バスケ上手いもんね！」

「いえ、非道の限りを尽くして勝手に部長を乗っ取っただけっすけど。試合なんか少したりとも出ないっすもん」

宗二を装おうとした途端にこれだよ。

そういう部長がいていいもんだろうかと思ったけど、真面目にバスケやってる姿こそやっぱり想像できなかった。

「それより、中村部長がどうしたんですか？ 暴れてたとか言っていましたけど……」

「あー、いや、十夜がね、ちょっと会いに来たの。自分に」

「会いに来たっつーか、あれは明らかに殴り込みだろ」

和磨が機嫌悪そうにぼそりと呟く。なだめるように柳井くんが差し出したシャーベットを素直に口にした。

ちよ、それ、アーンじゃないか羨ましい！

「……先輩、大丈夫っすか！」

「あ、うん、ゴメン！」

「中村部長に何かされませんでした!？」

って、なんだ、そっちか……。

「何かって、別に何も。ただ、ちょっと落ち込んだりしたのを慰めてもらっただけ。少しだけ、お願いもしちゃったけど」

「中村部長にそんなことできるの、ほんと先輩だけっすからね！」

何もなかったならいいですけど……そうやって甘やかされてまた無駄に部長のテンション上げないでくださいよ？ 先輩の言動一つ一つに左右されると言っても過言じゃないんですから」

「……そんなに？」

そりゃ、十夜さん、宗二のこと好きだろうなあとはいったけどさ。それほどまでの恋する乙女のような慕いっぷりではないだろう。

聞くに、あるときコタローがいじめられていたのも、宗二に会いに行くという喜びからきてたんじゃないかと……どんだけバイオレンスな喜び方だ。攻撃的になる方向が激しく間違っている。

「まさか、ねえ？」

って、思わず和磨に同意を求めてみたけど、柳井くんのアーンでもぐもぐするだけで何も答えてくれなかった。

……なんか更に不機嫌なんすけど。

いぶかしみつつ見つめていると、さわさわと頭が撫でられた。

「拓磨くん？」

コタローと反対側から伸びてきた手だ。あたしより背が高い……というか足が長いのか、同じソファに座ると頭半分くらい上の位置に顔が来るので見上げる形になる。

いつも突拍子もないことをする人だな、と冷静に思いながら言葉を待ってみる。けれども、いつになっても言葉はなく、代わりに目の前にスプーンが差し出された。

イチゴシャーベットが乗ったやつ。

「あーん？」

こてんと首を傾げ、目をのぞき込まれながら言われる。

……いいんですかおい！ そんな無邪気にアーン頂いていいんですかおい！

やばい、かわいい。

もちろん頂きますとも！

「あーん！」

がつつくあたしを不思議そうに見つめて、それから口から離れたスプーンを見つめる拓磨くん。

「おいしい？」

「うん、おいしいよ」

「ふーん」

言うなり、もう一度イチゴシャーベットをすくった。もしかしてもう一口頂けるのかとドキワクしていたら、そのスプーンの向かう先はあたしの口元を通り過ぎて。

「……ん」

拓磨くんの口の中に入っていた。

「甘いね」

「――こ」

これは俗に言う間接キッスというやつではないのか……！
ままままさがあたしの使用済みスプーンがそのような素敵シチュ
エーションを引き起こすなどと！ 誰が！ 予想したことか！

……と、表面上クールに熱く悶絶し始めるあたしを、脳天に直撃
した大きな衝撃が止めた。むしろゴンって音が鳴るほど背後から殴
られた。

「ったあー！」

「人が黙って見てればやりたい放題だなおまえ……」

「拓磨はさりげなく先輩を誘惑すんなよ！」

後ろから殴ったのは和磨。あたしの正面まで体を乗り出して、拓
磨くんの体を押しやったのはコタロー。二人の謎の連係プレーによ
り、あたしたちは見事に引き剥がされていた。

つか、今あたしが殴られる要素あった！？

もしかして気持ち悪いくらい喜んでいたのが放送上不適切だった
のかね……。

ほんとに、コタローの言うとおりだわ。

このままじゃ、いろいろな意味で危ないと判断されたのか、四人
は帰ることになった。気付けばもう外は真っ暗、夜の10時を過ぎ

ていたから当然といえば当然なんだけど、何故だか今夜はずっと一緒にいる気でいたから少し寂しい。

泊まっていけばいいのに、なんて本音をポロリしたら、柳井くんは本気で乗っかってくれたのに、和磨に一言で黙らされた。寮には帰宅時間の延期しかしてないからって。

残念だけど、柳井くんのムツツリ顔が見られて満足した。

みんなが玄関から外に出ていくのを、手をひらひらさせながら見送る。最後に出ていこうとする和磨が、背中を向けた。

「また明日ね」

なんてことないように挨拶したのに、和磨はふと立ち止まると、くるりと振り返った。

「和磨？ 忘れ物？」

「ああ、ちよつとな」

「……どうかした？」

一歩二歩と戻ってきて、あたしとの距離を詰める和磨。いつもとなんだか様子が違った。

玄関の段差があって背の高さが変わらなくなった分、視線が近いからかもしれない。

顔にそっと手が伸ばされる。

「おまえってなんでそう、フラフラしてんだよ」
「え? ……あだっ」

和磨の小さな呟きに気を取られていると、おでこに鈍い痛みが走ってでこぴんされたのだと気付いた。
フラフラって、しっかりしゃっきり生きてる人間になんて言い分だよ。おでこをさすりながら唇をとんがらせてみたけど、和磨は分かっちゃいない。

「俺じゃなくて、なんであの暴走男に頼ったりした? 俺には何も言えないのかよ」

「……何の話っすか」

「バカ」

まっすぐ目を見つめられて、何を言われるかと思ったら、そんな言葉?

……はぐらかして悪かったですね。

本当は、和磨の言葉も理解している。何かあったら言えよと保健室で言われたことだ。何かあったら、つてのが今日まさに起こったのだと和磨は思っているらしい。

間違っちゃ、いないけど。

あたしは覚悟を決めて口を開いた。

「本当に言うことが、自分のためになるなら、言うよ」
「んだよそれ! 結局俺には言っても意味がないと思ってるってことだろ。俺だっておまえの様子がおかしいことくらい分かってる」

「例え、言ったとして、救われるとして、でも別の大切なものを失うことになるもの」

「それは何だよ」

「言えない」

ハッキリ告げると、和磨はチツと舌打ちして、踵を返そうとした。怒らせるようなことを言ったのは分かっている。

ぎゅっと拳を握る。

もどかしいな……。

こうしてまた和磨と普通に話ができて、気付いてもらえて、一緒にいられることが本当に嬉しかった。伝えたいのに、なのに、あたしには言えないことばかり。

「和磨、待って」

後ろ手を取る。苛立たしそうに振り返った和磨は、あたしの顔を見るなり驚いたように目を見開いた。

あたしは、そんなに酷い顔をしているのかな。あまり見られないように顔を伏せて、言葉を続ける。

「失いたくないのは、みんなの、和磨の信用だから。知ってしまえば、きつとみんななくなっちゃう。誰も――」

言葉が途切れたのは、突然胸が苦しくなったから。想いが溢れたわけでも、つかえたわけでもなくて、外から押さ

え込まれるように圧迫されていた。

……抱きしめられていた。

一瞬だけ触れたぬくもりは、けれど、すぐに乱暴に離れた。

「なん……」

和磨は自分がしたことが信じられないといった様子で驚きの表情を顔に浮かべると、恐ろしげに一步二歩と後退った。

強く押し飛ばされてよろめいていたあたしも、そんな和磨をあり得ないという思いで見る。

数秒の沈黙。

「かず……」

「近寄るな、変態！」

「待って！　今のどういう意味んごふああ！」

家から飛び出していった和磨を追いかけようとしたら、閉められた扉に顔面からぶつかった。

痛い……！

ずるずると座り込みながら鼻を押さえると、手のひらが真っ赤に染まった。

……ねえよ。

和磨くんは、雰囲気どころかフラグもあたしの乙女心もクラッシ

ユ
していきやがりました。

彼は一人葛藤する

俺は、自分のやることには一切文句は付けない。それは、自分が考えて、選んで、責任を持ってやろうと決めたことだからだ。

それが男だと、小さな頃から信じてきたんだ。

——なのに、どうしたことか。

「うあああ……！」

俺は、みっともなく頭を抱えて地面に座り込んでいた。今までに感じたことのない後悔と背徳の感情がふつふつと沸き上がってくる。それをかき消そうと頭をがしがしとかきむしるが、そうすればそうするほどさっきのことを思い出してしまう。

……本気で自分が信じられない。いっそ、自分で自分を殺してしまいたい。

まさか、この俺が、男を抱きしめるだなんて。

「ああああ」

無いだろ！ それは無い！ そんな趣味は断じて無い！
しかも相手はあの田中だぞ！？ あの変態だぞ！？

俺は一体どうしてしまったんだ……！

うめきながら小さくなると、頭にコツリと何かが当たった。

「ミツカどした？ 走って出てくるなり座り込んで。そーじと話してたんだろ？」

一馬が俺を上からのぞき込んでいた。外はすでに暗くなっていたが、街頭のおかげで不思議そうに俺を見ているのが分かる。

どうやら、俺がアイツの家から出てくるのを待っていたらしい。すぐ近くにはこっちを見つめる拓磨と、アイツの幼馴染みという七海もいた。

「何でもねえよ……」

極めて平静を装って答えるも、誰とも目は合わせられない。

「つか、言えるか！ 信じられないとはいえ、あれは夢でも幻でもない、本当に俺が勢いに任せてしかしてしまったこと。」

骨張っていたとか、男物のシャンプーの匂いがしたとか、疑いようもなく誰にも言えねえ実体験の感想だろ！

「なんか、怪しくないっすか？」

未だに立ち上がれないでいる俺の側に、足音を立てて七海が近づ

いてくる。嫌な予感がする、のは、初めて会った今日でもうコイツのことがそれなりに分かっているからだ。

態度を見ていれば分らない方がおかしい。コイツは、田中のことをそれはそれは慕っている。

やっかいだな……。

「怪しいって何がだよ。何でもないって言ってるだろ」

「……宗二先輩の匂いにする」

「はあ！？　ばっ、近寄んな！」

「は、はーん」

鼻を近づけられて、つい距離を置くように立ち上がってしまった。

……のが、悪かったらしい。はめられたと気付いたのは、目を細めて何かを確信したように見下されたときだった。

「拓磨といい、三ツ瀬兄弟って本当に油断ならないっす！　今日だって寝ている先輩を襲ってたし！」

「だから違うって！　誰があんな変態男相手にするかよ！」

「あー！　聞き捨てならないっす、先輩は可愛くて優しくて強いんですから！」

「どれ一つ当てはまんねえよ！」

そのとき、俺のポケットから着信音が響いた。ムキになって言い合っていた俺たちは一度無言で睨み合い、俺はポケットに手を突っ込んだ。

何でこんな言い合いしてんだか。

少し冷静になろうと、視線を引き剥がして取り出した携帯電話に目を向ける。

「……タク？」

メールの差出人を見て、つい口に出してしまった。その本人を目だけで見れば、確かに携帯を手にして、なおかつ俺を見ている。いぶかしみつつもそのメールを開いてみる。

——瞬間、俺は携帯電話を破壊する勢いで握りつぶした。

「どうかしたっすか？」

「ミツカ？　なんだったの？」

「……んでもねえ」

自分でも分かるくらい冷たく吐き捨てると、俺はポケットに携帯を突っ込んだ。それぞれが意味が分からないといった表情で俺を見ってくる。

「なんで俺に送ってくんだよ」

二人の視線を無視してタクに言いつける。タクは昔から一般的な常識や人間感覚が抜けているせいで、よくこうして俺の理解しがたい突飛な行動をしてきた。それはたまたま俺を困らせるし、心配させ

るし、イラつかせる。

今だってそうだ。

どうして、このタイミングで……！

俺は、もてあそぶように「さあ？」と首を傾げるタクから視線を引き剥がすと、ようやく二人に目を合わせた。

タクが送ってきたのは、一枚の写メだった。

「おまえら……」

——なんで一緒に寝てんだ！？

口から飛び出しかけた言葉をなんとか飲み込む。

写メに映っていたのは、一馬と七海に挟まれて幸せそうに眠る田中の姿。おそらく田中が一度目を覚ましてからの、俺が席を外したときのものだろう。

いつの間にこんなもん。

何度も脳内をよぎるその画は、怒りとは違う、やるせなさと呼び覚ました。問題なのは田中だ。なんでそんなに簡単に気を許してんだよ、どいつにもこいつにも！　しまりのねえ顔しやがって！

そこまで考えて、俺は再度うなだれた。

……それで、なんで俺はそう嫉妬紛いなことまでやってんだ。

「田中は、男だ」

言い聞かせるように言葉にする。

それは、分かっている。いくら良い男に愛想振りまいていようが、ヘラヘラしてようが、ニヤニヤしてようが、男なものには変わらない。

でも、思い出す。

目を覚ましてから取り乱したときもそうだが、ついさっきの田中も、いつもでは考えられないくらいに脆く、消えてしまいそうなくらいに儚かった。俺の心を突き刺すほどの目で物を語ることもするくせに、どうしてあのときは泣きそうな顔をしていたんだ。

一瞬、女に見えた。

気が付けば、勝手に体は動いて、すぐ側に繋ぎとめようと抱きしめていた。

「ミツカ？　おい。……固まっちゃった」

「なんかすぐく思い詰めた顔してますけど。この人、いつもこんな感じなんですか？」

「ううん。いつもはもっとちゃんとしてるよ。あまり悩むこともしないキツパリしたヤツだから、今日はなんか男らしくねーな」

「へえ……」

——最近は、ずっとそうだ。

自分のやることは何もかも理解して、全てに責任を持たなければならぬのに、アイツのことになるとどうにも思い通りにいかなくなる。

意味もなくイライラして、しなきゃいけないことも、しなくていいことも、全部裏腹だった。

俺は男だ。しっかりしろ。
ただ、アイツも男だ。

……だから、意味がわかんねえ！ この気持ちは、一体何だよ！？

「三ツ瀬先輩」

「ああ！？」

「だいたい事情は分かりました。受けて立ちましょう」

「……俺こそ事情が掴めねえんだが」

七海は、覚悟してるっす！ と言い捨てると、すぐ近くの家で颯爽と帰っていった。一馬は一馬で俺を心配そうに見ては、額に手を伸ばしてくる。腕を引っ張られるがまま、かがませられ、やりたいようにやらせ。

……ああ、これは本当に正体不明の危険な病気かもしれないねえ。これが今すぐにでも治るんだったら、苦い薬だって飲むし、面倒な注射だってなんだってするのに。

泣きそうな田中の顔を思い返して、むかむかするこのやり場のない熱を持て余した。

元通り斜め上をゆく日常

白い雲に青い空。照りつける、真っ赤な太陽。
そして、きらきら輝くサンビーチ。

……を颯爽に駆け抜ける、半裸のイケメン！

あたしの心臓を揺るがす一大事、そう、季節は萌える夏になりました！

「熱っ苦しいんだよ、近づくなバカ」

相も変わらず和磨が冷たくとも！

「だってー、いいじゃん。夏って大好き！一枚一枚減っていく衣服、露わになる素肌、鎖骨に流れる汗……暑さには誰も勝てないんだぜ！」

机に乗り上げて弁舌を振るいたいくらい白熱するあたし。を、同じ輪を作る和磨と柳井くんがそれぞれ奇妙な生き物を見るような目で見てきた。

柳井くんは興味に満ちたものだからまだいいとしてさ、和磨、それももう少しであたし焼け切れそうだから。目で殺されそうだから。

「夏になると変態が増えるって本当だな。つーかおまえの場合、気持ち悪さが増えてる」

そうよ、夏はあたしの欲望を解放させるのよ。

昼休み、あたしはさっさと弁当を済ませ、机の上に広げた女性用雑誌の夏特集をじっくりと堪能していた。

その一ページ、青い海でポーズを取る男性をうっとり見つめる。

「ねー！ 海行こうよ。泳ごうよ。水着になろうよ」

「せめて本音丸出しにすんのやめろよ。絶対行かねえ、一馬もだ」

「あーっ！」

目の前の雑誌を取り上げられる。追いかけて手を伸ばすと、まだ食事中の和磨に顔を押しさえ込まれてあえなく撃沈させられた。

「ミツカー。楽しそうじゃん。おれ、海行きたい」

「ねー、柳井！ ほら和磨、柳井もこう言ってるんだし、行こうよ！」

「おまえ無しで純粹に遊びに行くならな」

「和磨のけちい……」

いいじゃんいいじゃん。水着鑑賞するくらい。勢いに任せて襲ってしまいかもしれないけどそこはそこ、別問題じゃん。

二人の水着姿はそれはそれぞれに麗しいに違いないのに……。

「じゃあさ、海じゃなくて……えーと、ほら、こっちは？」

いじけるあたしを察したのか、すぐ隣の柳井くんが雑誌をめくって違うページを指し示した。見出しには「夏の風物詩を食べつくせ！」……浴衣姿の少年少女たちがオレンジ色の明かりに照らされながらおいしそうにわたがしやらリンゴ飴を頬張っている。

あ、これ、おまつり！

「夏休みになったらさ、その照木神社で祭りあるだろ？ 夏休みだからまだちょっと先だけど、海じゃなくても夏を味わえるよ」

「本当？」

「うん」

柳井くんが満面の笑みで頷く。

まだ7月も始まったばかりだから、今すぐにとってわけではないけれど、そんなイベントがあると分かっただけでも楽しい。

海は海でほら、水着は好きだけど。夏祭りは浴衣という素敵アイテムもあるし、それ以上に雰囲気が好きだ。あの、熱い夜のにぎわいがワクワクする。

「んな人が多いところ……」

「柳井、ありがとう！ すきだ！」

あまりの興奮につい柳井くんを抱きしめてしまった。しかも勢いでラブコールまで。

イカン、これぞ夏の解放感か。

常日頃、男同士で抱きつくものではないよとコタローに諭しているというのに、これじゃあ言えなくなってしまう。

「そ、そおじ」

耳元でか細く震える柳井くんの声がして、すぐに離れる。おっと、顔が真っ赤だ……かわいいなあ。

と、思ってたたら、手首が引っ張られて体が柳井くんとは逆横に傾く。

「何してんだ」

「和磨、ごめんごめん。嬉しさのあまり柳井に飛びついちゃった」

引っ張った張本人、和磨が不機嫌そうにあたしを睨み付けている。前から柳井くんに近づくところだったけど、最近それが顕著な気がする。口を開けば、男同士がどうのこうの、変態がどうのこうの……そっちだって、一ヶ月前あたしを抱きしめてきたじゃん。

というのはもう、一ミリでも話題に出すと本気で殺されかねないので口にしない。あれは結局なんだったのか、なんだかんだ優しい和磨の気遣いだったんだろうとあたしも納得することになっている。

あるときから、あたしの体に変化は起こっていない。このままの

関係が続けることを心苦しく思うこともあるけど、それはそれで利用してやろうという気持ちが多い。

兄ちゃんの体でも。秘密でも。

まあ、この立ち位置が心地よいわけで。

「……和磨は、祭り、いや？」

改めて向き直って聞いてみると、和磨はあたしの手首を握る力をそっとこめた。けれどそれは一瞬で、すぐに離れた。

あたしの目をどこか静かに見つめて、和磨は首を振った。

「バカ、んなこと言ってねえだろ。当然行く」

「うん！」

やっぱり浴衣でだよね！ と一瞬のうちに妄想を繰り広げ、おそらくだらない笑みを振りまいたであろうあたしの顔を、和磨がバチンと叩いた。

いてえ！

「つか、おまえが一馬に変なことしねえか見張るだけだ！」

このままじゃ、いつか本気で鼻がもげる。

めくるめくメガネの向こう側

夏祭りの約束をしたその日の、放課後。

ウキウキドキドキワクワクニヤニヤが止まらないまま、一人靴箱へと向かう。下校ラッシュは過ぎているので、このだらしない顔はもう誰にも見られる心配は無い。見られたところで気にしちゃいねえがな。

つか、一人で帰るのって久しぶり。

いつもは柳井くんと和磨、もしくは誘われたときにコタローと帰るようにしている。最近はコタローの誘いが頻繁だから、比重としては後者が高い。そういう今日も誘われたけど、直前に演劇部部长に声を掛けられて、ついその笑顔に釣られて……もとい、良心に負けて丁重にお断りしてしまった。

というわけで、また今日も演劇部の見学をしてきたもんだけどもね。

「一体あの人はあたしに何を望むのか」

靴箱からペコンと引っ張り落とした靴を、だらだらと履く。今日はシンデレラだかなんだか乙女チックな演劇をやってたんだけど、一人役が足りなかったのは偶然だよな？ 練習だからだよな？ シンデレラのいないシンデレラなんて、表題を裏切ってとんでもなく破綻しているものね？

冷や汗をかくあたしに、どうかなあ？ と首を傾げる王子様……
もとい、演劇部部长。

いや、どうしようかしらね、このムラムラと沸き上がる熱情を。何が焦るってほんと、その頼りなさげな笑顔にいつか落とされてしまいそうなことよ！

勢いでドレス着せられたらどうする……演技できないどころか、酷いえづらだろう！ なぜ兄ちゃんの姿で女装せねばならぬ！

フオオ、想像するだけでうすら寒い。あたしはついっかかり危機を思い出してしまったことを悔やみつっ、脳内を夏祭りへとシフトさせた。

目下話題にすべき事項はこっちだよね！

「浴衣ー楽しみ！ せっかくだから、コタローも拓磨くんも誘いたいよね。あとあと」

カバンを振り回しながら、ようやく校舎から出る。浴衣って普段より色気8割増しだからね、せっかくのイベントは余すところなく楽しむのが乙女ってもんよ。

簡単に切り替わるあたし、プライスレス。

校舎からグラウンドを横目に校門に向かう。部活に勤しむ生徒の姿がキラキラと輝いて、これまた眼福。そのまま第二校舎と体育館を繋ぐ渡り廊下を横切り、校門を目指す。ここには二つほど体育館があって、こっちはそのうちの小さい方だ。

バスケットボールの跳ねる音がする。暑い中ご苦労様。って、コタローはちゃんと部活に参加してんのかな……。

第二校舎を横目に見つつ、校門を出よう……としたところで。

「ん？」

あたしは、とあることに気付いた。

「椿本先輩……？」

そこはたしか、被服室。ちょうど教室の内部が見え、そこに久しぶりの姿があったのだ。裏庭で会って以来だけど、あたしが一度インプットした殿方の後ろ姿を見間違えるわけがない。

ふふ、あたしは忘れませんぜ。一緒にいると安心できるような不思議な雰囲気を持っていて、きっとあのメガネの内には奇跡の様な萌が詰まっているに違いないその人だ。

んーと、一人かな？ 電気もつけずに何やってんだろ。

「せんぱーい、こんにちはー」

せっかくだし声を掛けない手はないと思い、窓を叩く。気付いたのか振り返るその人物に、あたしは手を振る。

あ、やっぱり椿本せんぱ……いい？

「お、邪魔しました」

……椿本先輩じゃなかった！　つーか一人じゃなかった。

つーか、男同士の甘い逢瀬でした。

うわああ、すいません！　いくらなんでも他人のラブシーンを覗き見るような趣味はないんです、ほんとほんと！

ていうかあれだね、常日頃自分だったらこうしたいと他人が引くような妄想をするあたしといっても、リアルに目の前にこんなことがあってみろ！

普通に恥ずかしいです！

「……田中くん」

片手を挙げたまま固まるあたしの目の前で、ガラリと窓が開いた。飛んできた声はガチで聞き覚えのあるもので、的確に呼ばれた名前に、さきほど消去した可能性を呼び戻した。

「椿本先輩デスカ？」

「ふふ、そうだよ」

窓のさんに肘をかけ、その上に顎を乗せる。しやなりと雅な音がしそうなほど、流れる動作にドキツとする。

「分からなかった？　メガネ、してないからかな」

そして吐息が無駄に淫靡である。

め、メガネしてないから、ってそりゃ、そうだけど。メガネの内には萌が詰まってるとか乙女妄想したけど。

だからって、これは……！

「健吾、知り合いか？」

「うん、悪い。ちょっと、ね」

「また、新しいヤツに目つけてんのかよ。いいけど、たまには俺の相手もしろよ？」

「分かってるって」

変わりすぎだろ！

恋人（と呼ぶのも間違ってる気がするけど）と相對するときの椿本先輩は、あのときの穏やかな先輩じゃなかった。物腰とかしゃべり方はそうなんだけど、オーラっていうの？　にじみ出すその人の空気がまるで違った。

なるほどメガネは、枷だ。先輩のそんな空気を緩和するためにかけているのだと変に納得する。

んじゃまた、と軽い調子で出ていく恋人を、あたしは内心焦って見つめた。いやいやいやここで引っちゃっていいの！　あたしが去りますから、まず待って！

「田中くん、おいでよ」

去ります！ と、言う前に手首を引っ張られた。

「先輩、ちょっと待って下さい」

「どうしたの。きみ、こういうの好きなんでしょ」

「こういうのって？」

「ああいうの」

恋人の後ろ姿を見つめながら、ぺろりと舌なめずり。こういうの、ああいうの、どういうの！？

お口とお口が磁石のように仲良しだったあの光景をしゃらんらと思ひ出して、ごくりと生唾。嫌な予感しかしねええ！

「僕を見る目がやけに熱っぽかったし、結構遊んでるんだと思ったけど」

「遊んでるって……」

どういう意味でかはともかく。ハッキリ否定できないところが恐ろしい。

しかしあたしは乙女であって。あれこれ妄想するのが好きなかただであって。ほいほい体を差し出すのは趣味じゃない。だが顔がいいだけに強く否定できない自分が憎い。

手首をつかむ先輩の力が強くなる。窓越しに引き寄せられて、耳元で、ねえと甘く囁かれる。死ぬ。

「せ、先輩。いつもこんなことしてんですか？ 男ですけど、自分」

身をよじりつつ、ひ弱な抵抗をしてみる。ふふとかすかに笑う声
が頬をくすぐる。あたしって、実際のところ、こういうの免疫ない
わけでした。女の姿でもいざとなれば逃げると思うのに、男の姿で
これってどうよ。喜ぶとこなの？ どうなの？ めくるめくラブシ
チュエーションを男として体感するってそれ激しく不安だし。

「そうだね、いつも、はしてないかな。……僕の、気に入った子だ
けどよ」

「一方的に言われても、こ、困ります！」

「心配しないで。僕が大好きだって囁いてあげるよ、そうしたらき
つときみだって好きになってくれると思うな」

「先輩……」

ななな流される！ 駄目よあたしには「大好きだ」には「あたし
もよ」と返す反射機能が搭載されてるんだから！

顎をくいと指先で挙げられて、その唇と対面する。メガネの無い
先輩は、やっぱり麗しかった。

「田中くん」

誰か、ウツカリ流されてしまいそうなあたしを、救って……！

「――宗二。てめえ、一体どこで油売ってやがる」

ぐいいと首根っこを引かれて、麗しき唇が遠ざかった。ついでに地面も遠ざかってる。ハッとして、ようやく理性と欲望の狭間から抜け出した。

でも、一体誰が？

ぶらあんと宙に浮きながら、ゆっくりと視線を向けると。

「ああん!？」

十夜さんに射殺されるかと思った。

初恋ラビリンスしょっぱめ(前書き)

別視点。長めです。

初恋ラビリンスしょっぱめ

——俺の前に、一人の女の子が背を向けて立っている。

何故か、学ランだ。

それでも女の子だと分かるのは、背中まで伸びる長い黒髪と、柔らかな体の曲線のおかげだ。そうでなくても、俺は分かっていたに違いない。

声を掛けたい。

でも、言葉が出ない。

代わりに手を伸ばすと、彼女は髪の毛を翻しようやく振り返った。目が合うと、頬をピンク色に染めて照れたように瞼を伏せてしまった。可憐な仕草に思わず俺も息が止まる。

かわいい。

率直にそう思った。

声が聞きたい。

触れようとしたその瞬間——彼女の瞼が開き、俺の双眸を射抜いた。さっきまでの姿が嘘のように凜とした表情で俺を見つめ、一歩と距離を詰めてくる。

唇が小さく息を吸う。

俺の肩に手を伸ばし、耳元へと、寄せた。

——塞ぎますよ？

「うっわああああ!？」

どたんがたんごごん。

自分でもあり得ないと思うほどの衝撃音が耳に飛び込んできたのは、ちょうど全身が痛みで悲鳴をあげたときだった。

呆然としたまま、ぱちくりと見渡す。逆さまになった自分の部屋。

……寝ぼけていたらしい。

朝だ。

「どうかしてる……」

小さく呟きながら、上半身を起こした。地面に転がった小物を拾い上げて、ベッドの上に戻す、立ち上がる、ため息が出る。

なんだってあんな夢を。

彼女のあの微笑みを思い出してまた頬が熱くなった。

モヤモヤする胸をおさえつつ、リビングに向かうと、そこには家族が勢揃いしていた。

「おはよう、光」

「今日は珍しく遅いわね。学校は大丈夫なの？」

「浮かない顔してるけど、もしかして嫌な夢でもみたのか」

……一斉に喋るな。姉どもめ。

上から、あかり、ひなた、かがり。三人とも名前に似合うほどのまばゆい容姿をしている。会社員だろうが大学生だろうが高校生だろうが、常にきれいなのは血筋ゆえか当然のことだった。

「おはよう、ねーちゃんたち」

一応挨拶だけして、他の質問には適当に答えておく。

両親は揃って海外なので、この家の居住者は俺含めこの四人。朝は揃ってご飯を食べるのはこの家の決まり事だ。

「はい、光の」

「ありがとう、あかりねーちゃん」

焼けたパンに、ベーコンエッグ。感謝を込めて笑いかけると、ものすごい勢いで抱きしめられた。ってうおお、豊満な胸が当たって窒息死しそうだ。

「あー、あかり姉ずるいわ。私も！」

「わたしも……！」

引き続き、ひなたねーちゃんとかがりねーちゃんにもぎゅーぎゅー

う潰される。朝っぱらからこの元気さは一体どうなんだろう。いつもながらパワフルなこの姉たちにはついていけない。

「光ったらほんとかわいいなー！」

「ね、さすが私たちの弟だわ。絶対お嫁にはやらないわよ」
「ずっとこの家にいるんだぞ」

きやあきやあと俺を差し置いて楽しそうな姉たち。

言わずもがなだけど、この人たちは末っ子のためか俺のことを溺愛している。俺に向けられる言葉一つ一つみても、その愛の重さっ
たらないとつくづく思う。

「愛」ってこんなものなのかな……。

途端、俺の心中は、モヤモヤ。

こんな風に胸焼けするんじゃないくて、もっと暖かくてふわっとしてて柔らかい、そんな気持ちになったことが、つい最近あったんだ。

「はあ……」

無意識についたため息にまた姉たちがぎやあぎやあと騒ぎ出す。
様子がおかしい、まさか違うわよね、今まで断固阻止してきたアレが来たわけじゃないよね、と何やら大変そうだ。

モヤモヤ。

どうかしてる。

……どうにかしたい。

もう一度、会いたい。

学ランを着た不思議なあの子のことを思い出しては、またため息をついた。

「好きです」

何度聞いても慣れないその言葉に、俺はゴメンと謝った。外でちよつと喋ったことがあるだけの、その女の子は悲しそうにしゅんと肩を落としてこの場から去っていった。

これで、何回目だ。

好きでもない女の子。でも、だからといって傷つけるのは本意じゃない。好意を向けてくれるのはありがたいけど、それだけじゃないならいらなくとも思う。

中庭を通って校舎へと戻る。

教室に入ると、他校の女子から呼び出しをくらった俺を茶化してかクラスメイトがニヤニヤと見てきた。

「モテるよな、光！」

「そういうんじゃないよ、たぶん……」

よくよく考えると、俺がこうして好きだと言われるようになった

のって、髪の毛を金色に染めてからかもしれない。高校生になって
も代わり映えのしない自分がなんだか嫌で、ねーちゃんらに相談し
たらそうしろって言うてきた。名前にピッタリだって。

別に何か思惑があるような変な言い方だったけど、言われるがま
まに染めてみたら、こういう反応。

校則破ってまで他のたくさんいる男子とは違うわけだから、多分
女子にはそれが物珍しいんだろうと思う。

「悪いよな、女の子、見た目で騙してるみたいで」

「見た目っつーより、そのギャップな」

「……どういう意味だよ」

「おまえ、見た目に似合わずピュアすぎ。印象が軽すぎるから、誠
実にされると女子ってころっといっちゃうわけ」

言ってる意味が分からない。

誠実にされるとって、ただ普通に校門の外で他愛のないおしゃべ
りするだけだし。

そんなんで気持ちが変わるんだったら女子って大変だね。ころこ
ろ転がって面倒だったりしないのか……。

「ていうかさ、断ってるけど、誰かいいなとか思ったりしねーの？
試しに付き合ってみればいいじゃん」

「そんなほいほい付き合うもんじゃないだろ」

「ほら出た。普通そこは手当たり次第いっところだろ、おれたち
出会いすらないのにもったいねーの！」

こいつは金髪に染めてもモテないに違いない。そこだけはなんとなく分かった。

付き合うとか、そういうことは絶対に考えられなかった。

……少し、前までは。

今日、女子の告白を断ったのは、少しだけ違う理由がある。好きだと言われて真っ先に思い浮かべた顔が、あったから。

名前も知らない、女の子。

「ま、どうせおまえだったらきつと、どんな女子とでも付き合えるんだろうな」

……名前も、居場所も、知らないどころか。

その女の子には、他に好きな奴がいる。

好きだと自覚する前に、もうフラれていた。俺。

頬が熱くて、目頭まで熱くなってきて、俺は机に顔をうつぶせた。どうしようもないと分かっているのに、今日の夢から、朝から、ずっと消えない笑顔を見つめ続けていた。

放課後、意を決して、あるクラスへと足を向けた。

扉から教室の中を覗き、一周見回してからすぐその席にいた生徒に声を掛けてみる。

「ええと、ソウジってやつ、ここにいる？」

聞くと、そいつはカバンに教科書をしまう手を止めて教室をぐるりと見回した。

俺もこっそりドキドキする心臓を抱えて、その視線の先を見つめる。

会って、どうするつもりだ。彼女の好きな奴だからって俺が何かを言うのか。でも、彼女の居場所も分からない今、すぐ行動に移せるのは彼と話すことだけだった。

『そういうのも、好きっていうことなのかな？』

そう言った彼女の顔は、懐かしいものを思い出すような、優しく慈愛に満ちたものだった。そんな顔をさせる彼が、羨ましい。正直に思ったその瞬間、俺は切なくなった。

「いないね」

彼を待ちわびていると、話しかけた生徒はあっけらかんと言いつた。

いないって……彼、いないのか。

なんだ、そうか。残念なような、ホッとしたような。どっちにしろ最初になんて声を掛けるか準備していなかったし、また日を改めて……。

と、踵を返そうとしたところ、別の誰かが声を掛けてきた。

「田中に用か？」

やたらめったら男前のヤツ……確か、三ツ瀬。

話したことは無いけど、廊下を通るたびに一部の男子がひそひそと盛り上がっているのを聞いたことがある。

クールで硬派で、カッコイイって噂の。

俺は知らないヤツからすると軟派に思われるらしいから、少しだけ羨ましくもあったんだよな。

「あーえと、田中クンに、ちょっと聞きたいことがあって」

無難にそう答えると、三ツ瀬の背中にもう一人男子生徒が走ってきた。

「そーじなら、知らない人についてったぞ！」

あ、こいつは三ツ瀬といつも一緒にいる、柳井。柳井は真っ当なクラスの男子からも危ない視線を送られていた。

言われてみれば、女の子顔負けのきれいな顔をしている。

「ああ？ そうだったのかよ」

「うん。ダメだ負けるな、とか呪文を唱えながらも嬉々として去っていったよ」

「男か？」

「うん」

「またあいつ……！」

俺を差し置いて二人で話し込んでいる。三ツ瀬、クールと聞く割に、今は不機嫌を隠そうともしていなかった。

「どういう仲なんだ？」

「んで、おまえは何しに来てんだよ。あの変態のエジキになりきったのか？」

「変態？ エジキ？ だから、話を聞くだけで……」

「知らぬ間に着実に変態の輪を広げてるなアイツ。節操無えんだよ、ったく」

「何？」

「どうやら、三ツ瀬、ソウジの何かが気に入らないらしい。冷たいっていうより、執着しすぎて熱くなってるって感じがする。」

「一体ソウジはどんなやつなんだ。」

「三ツ瀬を熱くさせるようなやつで、彼女が、好きな男。」

「なあ、田中クンって、好きな女の子がいたりとか、知らない？」

聞いてみると、二人はそろって口をつぐんだ。そしてお互い顔を見合わせると、ぷっと吹き出して、おかしそうに笑った。

「無い！」

「いたら、あんな風になってねーよな。ていうか、似合わない！」

予想とは大きく外れた答えが返ってきた。柳井は豪快に笑っているし、三ツ瀬でさえ口の端を上げて心底楽しそうだ。

似合わないって、どういうことだろう。

好きな人ができるとは思えないほど、何か別のことに熱中しているとか？ 特定の誰か、ではなく、女子を好きになることがないなんて。

だったら、彼女の想いはどうなってしまうんだ。

話したこともないソウジのことを考えて、俺は腹が立ってしょうがなかった。

結局良いか悪いか分からない情報だけを得て、俺は帰宅することにした。去り際、三ツ瀬が「あいつにあまり近寄るなよ。変態だからな」と言われたのが理解不能だったけど、こっちとしても意気揚々と会いたいと思わない。

会ってもいきなりイラついて失礼なことを言ってしまうそうだ。

俺、怒鳴るのは苦手なのにな。

「こ、困ります！」

昇降口を出たところ、遠くから戸惑うような男の声が聞こえてきた。

何だ？

……しかし、視線を向けた先、見て良かったのか非常に迷うところである光景が広がっていて、思わず目が泳いだ。

男が、窓から顔を出した男に迫られてる。

男子校であれば、こういう光景も珍しくはないはずんだけど、いくら珍しくないからってまじまじと見る勇氣はない。

せめてもっと人気がないところとか選べなかったのか。うわ、顎に手かけてる……！

こっちが恥ずかしくなりながらも、何も無かったことにして通り過ぎようとしたら。

「田中くん」

……え？

窓から身乗り出した男が呼んだ名前に、耳が反応する。田中って……や、でも、ありきたりな名前だし、まさかそんなわけ……。無意識に止めてた足を、もう一步踏み出す。

今度は、俺の後ろから何かが通り過ぎた。

「宗二」

低く呼ばれる、その名前。

……ソウジ。

立ち止まる俺の目の前で、そいつは遥かに背の高い男から首根っこを掴まれ持ち上げられた。
そいつこそ、俺の探し人。

「てめえ、一体どこで油売ってやがる」

恐る恐る見上げるその顔を、俺も見た。

……なんてことはない、どこにでもいそうな男、だ。

初めは驚愕に満ちた目をしていたが、その野蠻そうな男に強く威嚇されてソウジは借りてきたネコのように身をすくめた。情けなく

「とおやさん」と呟く声が聞こえる。

目立った特徴も無く、強いて言えば、弱そうだ。

「この間はよくも姿をくらませてくれたな」

「あの、ええと、それにはワケが……って、ぎゃああ」

「てめえのめんどくせえ話なんざ興味ねえんだよ」

俵のように肩に担がれ、強制的に連れ去られていくのを、呆然と見つめる。ふと窓から身を乗り出していた男を見ると、顎に手を掛けて何やら興味深そうだった。

驚愕の事実を、知ってしまった気分だ。

好きな女の子の、好きな人は、男から好かれていて、男に拉致された。

いや、うう、待って、言葉にしてみても全く納得できない……！

そのとき、遠ざかるソウジと一瞬目が合った気がした。気が付いたように笑顔を向けられたのも、気のせいだっただろうか。

不思議と……いや、確実に、変な感じだ。

「あの子は、知ってるのかな。……知っていても、知らなくても、俺、何かできるのかな」

どうしようもなく、胸が鳴る。

良くも悪くも、胸が鳴る。

これからのことを考えると、いろんな意味で俺って生きていられるのか、本当に心配になった。

初恋ラビリンスしょっぱめ（後書き）

弟を溺愛しすぎて間違った一つの例。

「ねーちゃん、高校生になっても何も変わらないんだね」

「そうよ、男子校だもんね（彼女でもできようものなら……!）」

「あ、ほら、髪の毛染めてみない？ 金色なんて目立つわよ（不良みたいだね!）」

「うん、いいと思う（近寄りがたい男を演出するんだ）」

逆効果だったらしい。

彼と彼の妹の事情

ぽいっと放り投げられて、あたしは顔からずささーっと地面に舞い降りることになった。

舞い降りるっていうかもうね、火が起きなかったのが不思議なくらいド派手な着地方法でしたとも。

外面は兄ちゃんだからどう傷付こうが構わないけど、内面あたし乙女だからね、ずさんな扱いは精神的にダメージを負うからやめて。次はぜひ丁寧に頼む。

とかなんとか、そんなことを思いながら、あたしを放ってくれたその人物をぬらりと見上げる。

あたしの言いたいことなど微塵も伝わっていない様子で、それどころか、地面に頬をすりつけお尻だけを浮かせる尺取り虫のような格好のあたしを呆れたように見ている。

「……てめえに笑いは期待していないと言わなかったか」

べべべつに笑わせたいわけじゃないんだけど！　つか、兄ちゃんの笑いが過去にどれだけ過小評価されてるか考えただけで逆に泣ける！

その呆れた男は、もともと厳しくつり上がる目元を更にキッと上げてハッと小さく息を吐き捨てた。

十夜さん。

言うこと意外とおちゃめだけれど、その顔面装備はいつまで経っても慣れない。怖い。

そして今、あたしはどこにいるのかというと。
それはもう、あたしが聞きたいくらい、あたしでさえ見当も付かない廃墟である。

……ええ、なにこれ、ガチで拉致？

遡ること数十分前、椿本先輩と対峙し、かつ誘惑に負けそうになっていたあたしは、突然現れたマオトコ……ゴホン、破壊王たる十夜さんによって理性を取り戻した。

そこまでは良かった。しかしそこから彼の独断場だ。

いきなりぱいっとあたしを肩に担いだかと思うと、椿本先輩に何の説明もなくのたすたと歩き始めてしまったのである。

強引！

あの金髪のデステイニーさんも見てるなんて偶然！ ポカン顔！
あたしのこと覚えてないというか、知らないだろうからさぞや変な男と思われただろうよ！ 残念！

「残念なお姿っすね……」

うとうとうなり声を上げるあたしの耳に、同じ感情を抱いたであろう誰かの声がふらりと降ってきた。

え、誰？

十夜さんにしては高めのその声を辿って顔を上げると、そこには一人どころか数十人のそれぞれ個性的な顔面装備者たちがいました。

「宗二さん、見ない間にすっかり威厳を無くされて……！」

「優雅な佇まいで、高潔に振る舞う様はオウオウ……！」
「おれらに有無を言わさない上品な冷笑はどこにーっ！」

ウオオとか、ウエエンとか、ギャアアとか、悲鳴と雄叫びの大会
唱がほの暗い廃墟無いにこだましている。

その不協和音たるや……いえ、そうでなくても、あたしは耳を塞
ぎたかったに違いない。

威厳だの、優雅だの、高潔だの、上品だの？

およそあたしには似つかわしくないワードが並んでいた。いくら
譲って兄ちゃんに対するイメージだとしても180度違うと断言
できる。

「あ、あの……」

人違いです、というあたしの言葉は、必死で拾おうとする強面た
ちにビビって喉の奥に帰っていった。

ぎゃあああ。叫びたいのはあたしで間違いない！

この平凡なあたしが人生をどう間違っても知り合うはずのない非
凡に凶悪な人たちが、なぜに、こうして、ここに集結、なおかつ困
んで泣きわめく必要が。

……新手のイジメ？ 生贄の儀式とか。

「てめえの消息を知りてえってうるせーんだよ」

「て、てめえって、誰が、誰の？」

「ああ？ 聞いてんのか？ こいつら宗二のモンだろうが、てめえ
が管理しとけ！」

「ひいひいっ」

ようやく尻を落とすに至ったあたしだが、地面から引き剥がした顔は今や何も見まいと両手に遮られている。正座して視界を遮断しつつ、微かに理解できそうな状況を把握してみる。

てめえⅡ宗二Ⅱこの場合あたしでなく兄ちゃん。

宗二のモンⅡ兄ちゃんのモン。

「違います！」

解けちゃった方程式を思わず否定しようとしたあたしに代わり、別の男の声が高らかに宣言してくれた。

あ、なんだ、やっぱり違うんだ。

良かったあ、この怖い人たちがみんな兄ちゃんのシモベとかだったらほんと、どうしようかと思った。

「おれたちが勝手に宗二さんを慕っているだけです！ 宗二さんは孤高の美しき狼です、おれたちはさしずめそのおフンに群がるハエのようなもの……！」

ほんと、どうして、くれようか。

クレイジーな思想もさることながら、その乏しい言語能力。おフンって。排泄物に尊称をつける人、初めて見た。

……っ！かそれ、より悪い関係性だよ、うわああ！

「そうですね、宗二さん！ 宗二さんは、おれたちを惹きつけてやまない。その強さ賢さ美しさ何をとってもおれらの憧れだ！」

「姿をくらませても、こうしておれらの前に現れた！ 今に凜としたその輝けるお姿を見せてくれるはずですよ！」

「そうですね、宗二さん！」

「どんだけまつりあげられてんの！ あたしは至って普通の変態の乙女なだけだって言ってるでしょうよ！」

両手の下からそろりと目を覗かせてみる。きらきら、ではなくぎらぎらと獲物を追いつめるような血眼で凝視してくるそれと目が合う。耳と鼻には遠慮なく穴が開いていて、べろべろとうごめく舌には釘まで刺さっちゃってて。

なんだこれこえええ。

男たちに囲まれながら、神のように慕われるというシチュエーションは、この場合乙女の萌えを発動させることは無かった。

無かった。

っ！か、無かったことにしてほしいんですけど。

「妹の目は、節穴だったよ……」

こっそりと独り言を呟いて、あたしはのそりと立ち上がる。このままじゃイカン。

わけもわからずまつりあげられあがめられ、何だこいつ全然駄目

じゃねえかよ、何でおれらはこんなヤツを慕ってたんだよ的逆ギレをされ。

行く果ては、あたしの亡骸である。

泣き声の大合唱から、獲物を狙います息づかいへと変わり始め、あたしは冷や汗をかきながら決意した。

ちらりと十夜さんに視線をぶん投げて、我関せずスタイルには何の期待もできそうにない。

ここは、あたしが、あたしこそが。

宗二の妹として……宗二として！

一見獣の群に投げ込まれた子ウサギ。気分は、群がるハエたちにごちそうを一発お見舞いしてやるつもりで。

「――悪いけど、俺、お前らのことなんて知らないよ」

ニヒル、違う、冷笑だったか！

「知る気もないから、今後一切、近寄るな」

ほんと、お願いですから関わらないでくださいすみません。

蝶ではなく蛾、花ではなく草あたり

暗くて生ゴミの匂いがする細い路地。

正面にはこちらを睨み付けてくる多数の目。

真ん中のモヒカン男を筆頭にして、周囲を取り巻いているのは舌なめずりしそうなほど気味の悪いは虫類系の男たちだ。

これは絶対ヤバイ状況だろ、と本能が告げる。

しかし、逃げ出したいはずの足は思い通りに動くことはなく、男たちが一斉に襲いかかってくるのを見つめ続けるばかりだった。

他にも、ほの暗い橋の下だったり、薄汚い下水道だったり、寂れた学校の校舎内だったり。

コロコロと切り替わる景色と状況は、何をどう考えてもこの花の乙女には似つかわしくないものばかり。

しかし、決して、夢ではない。

そう感じるのは、やたらリアルな我が身の存在感と、それについていけない困惑しきりの意識があるから。

最後の瞬間には決まって、倒れ伏す男たちが残る。その中でただ一人立ちつくすのは、この体だけだった。
何の痛みも無かった。

……これは、誰かの、記憶だ。

頬に固い感触がして、起きようとした体は、しかし思わぬセリフによって止まった。

「宗二さん、寝ちゃってんのか、これ？」

「まさか、あの人がこんな簡単に隙を見せるハズがねえだろ」

「じゃあ、フリなだけで、本当は起きてる？」

「……どっちにしても」

目を瞑っていても、ここが十夜さんに拉致られた廃墟であるということは、男たちの声の反響具合から良く分かった。それに、聞くにあたしは寝た格好をとっているらしい……というか、寝てたつづーのは今日が覚めたことにより理解しているわけなんだけれども。それは、体が冷たいコンクリに横たえられているということからもよく分かる。

でも、なんだ、いつ寝たのかサッパリ覚えていない。

宗二になりきって本音隠した命令下してから、確か……。

「どっちにしても、なんて気品のある寝姿だ。そりゃ、こんなの誰も手が出せないに決まってる」

「あの俺たちを冷たく突き放す態度も、思い出しても鳥肌もんだぜ」
「前は一つもブレないような堅い男らしさがあったけど、今日の宗二さんはどこか色気があるよな」

「言ってる。俺たち、宗二さんの男気に惚れてるけど、さらに今はなんだかムラムラするぜ」

……そうだった、あのとき何故か余計に場が盛り上がったんだっ
た。

おおお、なんてこったい。

宗二として宗二らしく振る舞いかつ宗二からのお願いとあれば、
強面のみなさん、大人しく引き下がってくれると思っていたのに。
宗二の築き上げたイメージと若干異なっていた上に、さらなる好
感度アップを果たしてしまった模様である。

いやもう、兄ちゃん、なんなのこの人たち。

起きあがる勇気も無い、としばらく狸寝入りを決め込むつもりで
いると、頬にさわりと何かが触れた。

「フン、弱えんだよ。見ねえ間にすっかり腰が抜けてやがる」

頭上から降り注ぐ乱雑な言葉。でも静かに紡がれているおかげか、
乱暴には聞こえない。言葉ほどの意図は読みとれない、けど。

いや待て、十夜さん？

ぶつくさと文句のような言葉がポツポツと降り注ぐ中、同じよう
に頬がさらさらとくすぐられている。

どうなってんの？

そう言えば体は冷たいコンクリだけど、顔といい両手といい、ほ
んわか暖かなこの体勢は……。

「……ひい」

考えて喉の奥で悲鳴が漏れた。

あたしのヨダレの犠牲になったのか、あたしのではない誰かのスラックスがじんわりと濡れている。大慌てで両手をついたのは、そのスラックスの持ち主、あぐらをかいている足の上だった。

「起きたのか。人の体を枕代わりに使うとは良い度胸してんじゃねーかよ」

「ひいいいっ」

今度は確かな悲鳴になって、あたしは硬直した。見上げたすぐそこに十夜さんの不機嫌な顔があって、今の瞬間確かに密着していたという事実が、あたしの嫌な予感を裏付けた。

あ、あたし十夜さんの膝枕をー！

「え、ごめんなさい」

素敵シチュエーションとはいえ、今この状況では！

とりあえず謝ってみるものの、すうっと目を細められ、どうしていいやら何やら。そんな風に怒るくらいなら最初から起こしてくださいませんか！と正論を言いたくなる。

一応、今対峙しているのは前に優しくしてもらった宗二の妹じゃない。なくて、宗二自身なわけだし、男ってことで叩かれてもおかしくない。

誰か助けて、と寝る前の状況とは逆に強面の男たちに目をやると、

ザツと音を立てて後退ってしまった。

「すみません、宗二さん、近寄りませんから！」

「遠くから拝見してます！」

いや、中途半端にお願い守られてるし！

そうじゃなくて、根本的に存在的に近寄るなって意味で、どうせすぐそこにいるなら今は近くにいてくれた方が助かるっていうか！

……あれ？

そういえば、この人たち、見たことがあるような。

「十夜だけ、ずりいなあ」

「いくらいきなり事切れた宗二さんを介抱するためだってなあ」

「おい、宗二さんに懐くな」

中でも髪を派手な赤に染めた男と、浅黒いスキンヘッドの男。

先ほど目にしたばかりの、ぎらぎらに睨み付けるあの目たちと重なる。

……もし今見た記憶が兄ちゃんのものだったなら、この人たちは兄ちゃんとケンカして負けた人たちなんじゃ。

「って、宗二さん？　じっと見つめてどうしたんですか、何か気に入らないことも……！」

どうしてもあのときの印象とは違うけどなあ。

「ケンカ、もうしない？」

つい聞いてしまった。

だって今襲われたら確実に負けると思う。兄ちゃんだってどんな奥の手を使ってこの人たちに勝ったのかも普通に謎なんだし。

「は？ え？」

言われた意味が分からないらしく、赤髪の方は目をぱちくりと瞬かせている。今はそう見えないとはいえ、実は凶暴な獣だ。反旗を翻さないとも限らない。

……釘を刺しておくにこしたことはないよね。

十夜さんの膝の上に置いていた手をグッと握りしめる。

「だめ、禁止、もう危ないことはするな」

あたしにとって！

心の中で付け加えてそう言うと、二人はビクツとしたように体を直立させ、熱に浮かされたように真っ赤な顔で何度も頷いた。

……あ、冷笑忘れてた、つい思い詰めたように言ってしまった。

まあ、これで当分の身の安全は確保できたに違いない。

そう思っていると、無意識のうちにだろう、十夜さんの服を握りしめていた手が離された。そのまま十夜さんの手が腰にかかり、立ち上がらされる。

「十夜さ……?」

「行くぞ」

え、ちょっと待って、どこに。

「あ、宗二さんを連れていくなよ！ 俺たちだって積もる話があるんだよ！」

「うるせえ、今のうちに生きた姿を見せてやっただけ感謝しろ。それが終わればこんなとこに用はねーんだよ」

ずっと目線を合わせられ、あたしはギャアと叫びだしたい気持ちになった。今のうちに生きた姿を見せてやっただけ、って今から生きてない姿になっちゃうってことだろうか。

最初に学校に乱入してきたときといい、さっき拉致したときといい、十夜さんは兄ちゃんである宗二には強引かつ容赦ない。

これから連れて行かれるのは、半ば地獄なの？ ねえそうなの？

「宗二さん、俺、もうケンカで負けませんから！ だから、たまには顔出してくださいね！」

すでに引きずられているあたしに赤髮さんが無邪気に手を振る。
いやあの危ないことするなってそういう意味で言ったんじゃないんだけど。

「コラバカッ、気安くお願いすんな！」

その赤髮さんをスキンヘッドがたしなめ、かつあたしにペコペコと頭を下げている。

なんだかんだ二人ともいい人そうだよおい。

心配はいらないらしい、それくらい兄ちゃんって慕われてるんだな。

でも、どうしてだろう。ケンカして、負けて、そんなの復讐した
いって思う方が当然な気がするのに。

十夜さんは？

どうして、兄ちゃんに執着してるんだっけ……。

「おい、妹には顔見せたのか」

地獄への道程なのか何なのか、もう暗くなってしまった道を十夜さんと二人で歩いていると、唐突にそんなことを聞かれた。

妹、という単語に驚いて、一瞬答えに詰まる。そういえば、自分の姿に戻ったときに取り乱して十夜さんにすがりついたんだっけ。

「なんで、ですか？」

「ああ？ てめえがいなくなったって煩かったんだよ。だいたいてめえ、妹のこと、大事にしてんだろ」

「そうなのかな」

「てめえがおれに言ったんだろうがよ」

何を？

聞く前に、おら、と何かを胸の前に押しつけられる。歩きながらだったから、後ろに転びかけながら、手のひらに落ちてきたものを握りしめる。

手の中には、赤いヘアピンが三つ乗っていた。

「これ、十夜さんの……」

「それ、渡せ」

言い放つ十夜さんの背中とは、何も語らなかった。一体どういう意味なのか図りかねるけど、渡せてのは、宗二の妹にとってことだろう。

いきなり？ いいの？

返事はない。まあ、ここで突っ返すのも何だし、せっかくのプレゼントなら素直にもらっておくことにする。ありがとうございます。

「元気にしてんのか？」

立ち止まったままポケットにしまっている手を止めて、あたしは声にするでもなく頷いた。前を歩く十夜さんには見えなかったはずなのに、十夜さんは分かったように振り返った。

髪を留めていたピンが外されて、前髪が遠慮なくおりている。その隙間からのぞく瞳はどことなく優しく。

「良かったな」

フンツと鼻をならして、微笑んだ。

微笑んだ、という割にはまだ獰猛な色が覗いていたけれど、それは確かに気を許している笑顔には違いなく、つい呆然と見つめてしまった。

「今日はさっさと休め。明日からに備えろ」

また元に戻ってあたしに背を向けた十夜さんは、ぶっきらぼうに言い放つ。その歩く先にあたしの家があるのだとそこでようやく気付いて、送ってもらっていたんだと理解した。

地獄への道って。

宗二の妹にしろ、宗二にしろ……結局、やっぱり、ちゃんと、十夜さんは優しい。

きっと、寝ているときに膝枕をしてくれたのも、起きてからこうして送ってくれたのも、ぜんぶ……。

「明日から、てめえが逃げねえように見張ってやるからな」

……うん、はい？

「てめえの体調が万全なときにぶちのめさねえとな。そうでなきゃ、つまらない」

ククツと喉の奥で楽しそうに笑う十夜さんの声が、盛り上がったあたしの期待を一瞬にして崩した。

優しいって、アンタ。

乙女的にぐらつといきかけたよほんとどうしてくれる。

やっぱり今のあたしは、地獄の未来へと続く険しい道のりを辿っているのかもしれない。

変化しました1～5編（前書き）

長くなって切ったんですがまだ長い。

途中危険に恥ずかしいシーンありますので、苦手な方は回避してくださいませんか。

変化しました1～5編

最近、身の回りが、やけに大変におかしくおいしく、変わりつつある。

その一つ。

「宗二先輩」

「おはよう。コタロー、今日は早いね」

朝、家を出てすぐの門柱にコタローがいる。ひらりひらりと手を振ると、コタローはそれは尻尾じゃないかと言いたくなるくらい嬉しそうに両手をぶんぶん振り回した。

これはまだ以前とは変わらない。

「早く行きましょう、先輩。もたもたしてるとまた中村部長が来ちゃいます」

「ねえ。十夜さんもわざわざ来ることないのにね」

「もー、先輩だけですよ、部長から狙われててそんなお気楽なセリフ出るの！ オレはやですよ、こないだみたいに三人で登校なんて。いろんな意味で気が気じゃないっす」

実は、拉致されて以来、何故かたまに十夜さんがふらっと我が家に現れるようになったのだ。むしろふらっとしすぎて、あたしが家を出る一時間前だったり、逆に後だったりとちっとも予想がつかない。

そのため、問題なのが、相変わらずあたしを家まで迎えに来るコタローとどのタイミングで鉢合わせしてしまうのかということだ。言わずもがな、コタローにとって十夜さんは部活の部長であり、ドS先輩である。顔をつきあわせれば当然、修羅場。こないだなんてあたしを間に挟んでなつかないネコとそれをおちよくる飼い主のような攻防が始まってしまった。

まあ、そりゃ三人になると面倒くさいっちゃそうだな。もはや両手に男ウフフアハハみたいなそういう次元ではないし。一緒に登校しながら眼中にない自分に、なんだかんだ一番仲良しはきみらじゃないのかと疑いたくもなるし。

「ね、行きましょう」

今日はドッキリウツカリ遭遇なんてことがないようで安心。

なんてことないようにさりげなく、コタローがあたしの手を引っ張ってきた。つられて足が前に出ながら、うん、と返事。

……これが、変化その二。

コタローはコタローで、あたしが倒れてしまったあの日からより過保護になってしまったようである。いろいろと心配させてしまったせいなんだろうけど、方向性が若干間違っている、気がする。

例えば、こんな風に手を繋いで歩いたり、見上げると大人びた微

笑みを向けられたり、首を傾げると頬を染めてはにかまれたり。

前までの盲目に慕われているときとは違って、ちょっとだけ、ドツキドキしてしまう。まるで弟みたいだと思っていた子が、大人らしく男らしく接してきてみるよおい。

いいのかなー？なんて思いつつ、犯罪行為を働いているような後ろめたさもある。

「宗二先輩。今度、うちに遊びに来て下さい。先輩の好きなお菓子作るっす」

「自分の？」

「ベイクドチーズケーキ。好きでしょ？　おいしいクリームチーズがあるんです、どうせなら焼きたて食べてもらいたいし」

「あ、好き！　食べる！」

パツと振り仰ぐと、コタローがびっくりしたように目を見開いて、それからゴールデンレトリバーのようにわふんと笑った。

いつものコタロー、ホツとする。

それから、あたしの通う高校の校門まで着いたけど、コタローはギリギリまで手を離さなかった。

「帰り、また迎えに来るっすね。あ、メールするまでちゃんと教室いてくださいよ？　こないだ先輩、外で不良に絡まれてるんすもん」

「いや、あれは絡まれるっつーか」

「あのときは無事だったけど、いつ誘拐されるか分からないっすよ？　どんな人にでも優しくする先輩が今は嫌です」

優しくしてるように見えたなら、それこそコタローの目がおかしいと思う。あのときにあんな余裕があったわけがない。

というわけで、変化その三。

強面装備の不良に絡まれ……いや、慕われだしました。

ひいい、一体それってどれ程の驚愕展開だ？

校舎から外に出たら、同じような数人の不良とケンカしていた赤髪とスキンヘッドが返り血を顔に付けたまま駆け寄ってきたのだ。

いや、怖え。

かつての兄ちゃんの裏の顔のせいで、力も何もないただのあたしが利害関係もなく不良に慕われるなんて、恐怖以外の何者でもない。

ケンカしていてすみませんと、ペコペコ謝られ、周囲の目が痛いことに……。見るからにあたしの方が弱者なんだが。

いたたまれなくなって「簡単に頭を下げちゃダメ、俺に悪いと思うな（自分たちの立場を考えて下さいほんとお願いします）」と本音をオブラートに包んで伝えたのに、その瞬間より一層慕われ度が増した。

……どうしよう、意味が分からない。

ということもあって、せめて今後学校には来ないようにとどうにか伝えてある。心配そうなコタローに大丈夫だからと笑って手を振った。

「無意識に無防備に男をたぶらかす……」

コタローがぼそりと呟いた。
え、何、そのウマ萌え属性。そんな上級テクあるなら教えて欲しいところだ。

続いて、変化その四というのが、その人との関係である。

昼休み、トイレを済ませて教室に戻っている途中で、遭遇したのが教科書を両手に抱いた椿本先輩。

この間迫られたこともあり、ウツカリときめきかけたあたしだけが、椿本先輩は何も無かったかのように、にこやかに爽やかに話しかけてきた。

「田中くん、一人ですか？」

「あ、はい。先輩も一人で行くんですか？」

「ちょっと図書室まで。ほら、花のこと調べたくて」

「ああ、花壇、の……」

「ふふ、そうです」

探り探り口にしてみるも、先輩は至って普通。平凡というか、無害というか、敬語だからっていうのもあるけど、この間のフェロモン大放出の人とはどうしても思えない。

やっぱりあれはあたしの妄想が見せた夢幻だったんじゃない……。

そう思い当たると、存外ホッとする。

それで気付いたんだけど、あたしって迫るのは好きだけど迫られるのはどうも苦手……！

「良かったら、田中くんもどうですか？ 一人より二人で調べた方が、楽しいですし」

「そうですね、自分もあの花壇好きだし」

椿本先輩と最初に出会った花壇、今も先輩が丁寧にお世話をして
いることはよく見てるから知っている。一応女の子として、綺麗な
花は好きだ。

少しくらいお手伝いできたらいいなー、と純粋に素直に着いてい
けたのは、椿本先輩の穏やかなオーラのなせる技。これで相手が柳
井くんとかだったら、この機会に乗じてどんなラブハプニングを画
策しようかとしているところだ。

「で……なんですか、これ」

それが、ラブハプニングを画策されるとは。

図書室の奥、資料室、密室。

昼休みというのに無人。

「お楽しみ、だね」

メガネという枷を外したフェロモン全開の椿本先輩。
に、いつの間にかテーブルに座らされているあたし……！

おおお、これはとんでもなくR指定な展開じゃあるまいか。ギリ、とあからさまに緊張するあたしに椿本先輩が立ったまま肩を抱く。近い近い近い。色気に当てられて萌え死ぬ。

兄ちゃん、兄ちゃんの体が今や大変な目に合いそうだよ。

「ちょっと待って下さい。先輩、今日はお花のこと調べるんですよ」

「きみだって、お花みたいに可愛いよ。僕が今知りたいのはきみのことだけ」

「う……！」

見事にキュンした。

興味のないモブキャラに迫られるのとはワケが違う。これぞまさに一級品とでも言わんばかりのお色気キングに間近で囁かれたら、どうにもならないほうがおかしい。

本当に可憐な花を相手にするみたいに、先輩の優しい指が鼻先に触れる。恥ずかしくなって顔が熱くなる。

兄ちゃん、ごめーん！

「慣れてないんだ？ きみはどこまで行ったことがあるの？」

「ど、どこまで？」

「どこまで、触れられたことがあるかってこと」

そうっと腰を撫でられる。

ビクビクして情けない声が漏れた。ぬおおお、これ以上はダメだろ、兄ちゃんの体！

歯を食いしばって身動きのとれないあたしの顔を、椿本先輩が前髪をかきあげながらからかうようにのぞき込んでくる。

「意外とウブってことか。……きみには、不思議な魅力があるね」
「んごっ」

あるね、の「ね」で勢いよく肩を押し倒され、あたしはテーブルに後頭部を強か打ち付けた。色気の無い声出た……。

そして先輩の顔が覆いかぶさってくる。もとより電気がついていない部屋は、外の明かりを頼りにしていたけど、今もそれが遮られていて影のかかる先輩の顔しか見えない。

こうしてみると、本当に色男だ。妖艶に、かついたずらっぽく微笑む表情が似合いすぎる。

「何も持っていないように見えて、実は何か人を惹きつけるものを内に秘めてる。それを感じるとき、人はきみを美しいと思うんじゃないかな。きみの、いつも近くににいる友人たちも」

「え……」
「それを、知りたいな」

いや、こ、この人何言ってるのー!?

何か秘めてるって、そりゃ、乙女魂だとは思っけど。先輩が言うようなあやふやにクサイ秘めた魅力はどこをどう探してもあたしの中には存在しそうにない。

男なのに、う、美しい?

え、ここ笑うところ？

ヒリヒリする頭の痛みもあって、なんとか冷静を取り戻してきた。となると、画的にも危ないこの状況をどうにかしなければ……！もし正真正銘の女の子だったら、キャンインヤーンと鼻血ものになったかもしれないけど、今や体は男そのもの。

羞恥心通り越して恐怖。

いろんな意味でトラウマになる。

「せ、先輩、えっと、よく考えて」

「何を？」

「自分、初めてなんですよ。こういう風に口説かれるのも、触られるのも」

「嫌？」

「い、嫌というか……正直、テ、テクニクがないというか、むしろ何をどうしていいやら分からないというか」

「かわいいこというね。いいよ、全部僕がリードしてあげるから。一つ一つ丁寧に」

キケンなところに伸びかけた手をすかさず取り上げる。

り、リードされたら取り返しのつかないことになってしまいますんでね！兄ちゃんが帰ってきたとき、とんでもない体に作り替えられてたら困ると思うし。

えへへと取り繕って笑ってみる。

今度は狙ったように近づいてきた唇を反対の手でガードした。

「……甘いね」

ぺろりと手のひらをなめられ、あたしはすかさず起きあがるとそのままの勢いで壁に先輩を押しつけた。

ガンツととてつもない轟音が響き、近くの棚のガラスがぐらぐらと振動を伝えている。

火事場のくそ力ってヤツだろうか、さっきまで押さえ込まれていたはずが、今はあたしが先輩を強く押さえ込んでいる。

「ダメですね。やっぱり自分じゃ、先輩を満足させてあげられそうにないです」

「ここから盛り上がるとこだと思ったけど」

「残念ながら。どうも力不足で」

「そんな上目遣いで誘ってきておいてよく言う」

「相手なら、また今度してくださいね」

先輩を掴んでいた手をスッと放して、隣のドアから速やかに退出する。ふう、と息をついてバクバクする心臓を押さえ込んだ。

あぶ、危なかった。

また今度、って正直こんな緊張感、二度とヤです。嫌われたかもしれないけど。それはちよつと残念だけど。

……だって、苦痛に顔を歪める先輩の顔がやたらせくしーだったもの。冷静を装って心のシャッター超切ったわ。

こんなときまで、あたしって、めでたいな……！

「田中、どうした」

廊下のだ真ん中でうづくまるあたしの耳に、よく通る聞き慣れた声が入ってきた。ぴくっと耳を反応させるも、顔が上げられない。

「また体調が悪いのか？ 弁当放ったまま戻ってこねーから何してんだと思ってきてみれば」

近づく気配がする。何が何でも顔を上げないあたしを不審に思っ
てか、その人、和磨は肩を強引に掴むと顔を上げさせようとする。

「おい！」

「は、恥ずかしいから、ダメ」

今、和磨に見られたら嫌だ。さっきまで自分が陥っていた状況だ
とか、それを回避するために自分がしでかしたこととか、そういう
のを思うと平静に和磨の前にいられない。

らしくないとは思っただけども。

和磨は何かを感じ取ったのか、動きを止めた。
けど。

「……今一馬が半裸で猫とじゃれてる」

「よしきた、どこだ！？」

「元氣じゃねーかよ、おい」

キラッと上げた顔は、呆れた顔つきの和磨に半眼で見つかった。
……なんつー騙され方だよおい。和磨もあたしの扱いをよく分か
つていらっしやる。

「和磨ひどい、乙女心をよくも踏みにじってくれたな！ んぐぎっ」

戻そうとする顔を強引に固定される。

「何が乙女心だ、変態。……何があった」

「な、なんでもねえ」

「っていう顔か、これが？」

「見んな」

なんか前にもおなじようなやりとりをしたような気が。でもでも、
だからってしっかり和磨の顔を見ることができない。

目を泳がせつつ、どうにかこの状況を打破しようと思い巡らす。

「顔、赤いぞ」

「か、和磨が近いからじゃないかな。ドキドキするよ、うん」

「じゃあ、こっち見ろよ」

「眩しすぎて無理」

「……立て」

ひい、声色が低くなった。そこまで怒んなくていいんじゃないかな！

冗談冗談全部冗談、そう言いたいのに言えない。こみ上げてくる熱いものをなんとかこらえようとしていると、腕を掴まれて無理矢理立ち上がらされた。

ふらふらと壁に寄りかかる。

和磨が怖いぐらいの表情で近づいてきて、あたしに手を伸ばしてくる。

「なんで、そうなんだ」

そつと首もとに手を当てられる。何かと思えば、いつの間にか開いていたらしいあたしのシャツのボタンを、一つ二つと留め始めた。開けた覚え、無いんですけど。

「男と一緒に寝てみたり、キスしてみたり……俺が、どれだけ」

な、何の話？

いきなりばやき始めたその内容が分からなくて、じっと見つめるとふいっと顔をそらされた。

「なあ、今度は誰なんだよ」

「今度は、ってどういう意味……」

「――宗二くん」

つ、椿本先輩！

出てくるの早すぎ、また今度って言ったばかりじゃないですか！
おそらく険しくなりつつあったあたしの表情も、今はぽかんとマヌケに違いない。まさかここで再登場されるとは思わなかった。しかもいつの間にか名前呼び。

う、後ろめたい恥ずかしいでしょう。

「泣かせてるんですか？」

「……っせえな」

「それとも、慰めてあげてるんですか？　僕が、いじめたから」

「よりによって、こいつかよ！」

和磨がチツと舌打ちをした。ぎゃあいやあひいい、と脳内收拾がつかなくなっているあたしの手首をとって、強引に歩き始めてしまった。

先輩にもなんと言っているかわからなくて、結局何も言えず。メガネ姿に戻った先輩からはもう何の感情も読みとれなかった。

「だからこいつには注意しろって言ったんだ」

背を向けたままそう吐き捨てる和磨を見て、そういえばそう言われたこともあったなと今更思い出した。

だからって……別に、和磨がそこまで怒ることないだろう。

掴まれた手首に感じる強い痛みで、そう分かった。

変化、
五つ目。

変化しました本題編妄想付き

視線を、感じる。

昼休みもそろそろ終わるのか、廊下には教室へと戻る人が増えている。その中を急かされるように歩きながら、さりげなく注目を浴びているのだ。

……これのせいだろう、とあたしは困惑気味に思う。

あたしの視界には、手首から手のひらにかけて強く握られている自分の右手がうつっている。繋がったその先を辿ると、その後ろ姿がある。

男らしい骨張ったたくましい体躯に、色気を感じるうなじから続く形の良い顔のライン。こんなときでさえ見惚れてしまう完璧な後ろ姿。

あたしを引っ張るのは、和磨だ。

椿本先輩から逃げてきたところを見つかったからというものの、ずっとこれだ。視線を浴びてることも和磨は気付いていないのか、やめようとはしない。

男子校とはいえ、男二人仲良くお手で繋いでるなんてどう思われることか。それに加え、相手は健全な男前である和磨だよ？

人が見てしまうのも無理はない。

あたしは精神が女だからまだいいけど、和磨にとって堂々と男と触れあってるこんなシーンを見られるのは嫌じゃないのか？

それともサインなのかい、今後ろから抱きついてもオールオッケ

ーバッチコイという誘いなのかい。

……絶対ねーだろ。というか、あたしもそこまでKYなことはない。

変な噂が助長されても困るしな。

ただでさえ、この光景を興味深そうに見ている生徒たちはひそひそとあらぬ誤解をかけている。あたし発信ならともかく、今は和磨があたしを掴んでいる状態だ。

三ツ瀬はやっぱリソツチだったとか、あんな普通の男を相手にしているとか。

心は女なんだがね。

「和磨」

でも、そんなこと言ってもどうにもならない。ようやく決心して声をかけると、和磨はすぐにピタリと止まった。

あ、良かった、聞こえた。

「そろそろ離して。一人で歩ける」

ゆっくり繋がれた手を引っ張ると、ビクッと和磨の体が震えた。

……あれ、変な反応。

ふざけんな好き好んで繋いでたわけじゃねえよ、的にふりほどかれるかと思ったのに。

和磨はハッと小さくため息を付くと、あたしの手をゆっくり離れた。

「和磨、あー、迷惑かけてごめん」

「……何がだよ」

「最近ずっと、イライラしてるでしょう。別に迷惑かけるつもりはないんだけど、いろいろと和磨が不快に思ってるのも事実だし。だから、ごめん」

最近、特にそう感じる。

おそらくそれはあたしの感情を抜きにしても、男と見つければ誰でも良いと思われるような不誠実な振る舞いをしているのが原因なんだろう。

さっきのは別にあたしから好きで椿本先輩とベタベタしてたわけじゃないんだけど。和磨的にはどっちにしろ同じだ。

和磨はイライラしたように頭をかくと、こちらに振り返った。

「なんでこういうときだけ、謝るんだよ。こういうときだけ、そんな態度とって。他の野郎には全て許しているくせに」

「え、許すって、どういう意味？」

「俺の気も知らないで……」

顔が苦しそうに歪む。初めて見る、和磨のその表情にあたしもどうしていいか分からず、言葉が続かなかった。

どうして、和磨がそんなこと言うの？

和磨の気持ちは、分からない。

「……なんでもねえ」

「和磨、あの」

「うるさい、喋るな。もう、俺に構わないでくれ」

「……な」

——なんだそれー!?

和磨の去っていく後ろ姿を見ながら叫びだしたいのをぐっところえた。か、構うなって、ここまで連れてきたの、あんただろ!

言いたいだけ言っというて、あとはあたしに黙れだど! あたし、ちゃんと謝ったのに、一方的に罵られるってどうなの。

……本格的に、嫌われたの。

和磨の振り返らない後ろ姿を見ながら、一瞬脳内をよぎる苦しそうな顔。いつもの怒った顔なら何とも思わなかったのに、そういう顔をされたら本気で思ってしまう。

苦しむほど、嫌な思いをさせてたんだろうか。

「意外と、ショック」

——だからか、気付いたときには足が動いていたのか。

「和磨！」

背中に怒鳴り、腕にすがりつく。

「どういうことか、説明して！　なんで、そんな風に言うの。和磨の気持ちを聞いてない」
「なっ……！」

突然の襲撃に驚いたらしい和磨は、目を大きく開いてあたしを信じられないように見下ろす。

しかし、ひるんではやらない。周囲がどよめいても、ここは役得だとばかりに押し切ってやる。

「こっちだって納得いかないよ。いくらイライラされてもいいけど、それだけで何の弁解もできずに嫌われるのは嫌！」

「離せ、くっつくなバカ！」

「こういうのが嫌なの？　男のくせに男にくっつくのが嫌なの？　そんなの仕方ないじゃん、あたしなんだもん」

これが、あたしなんだもん。

兄ちゃんの姿してたって、女だし、イケメン好きだし、くっつきたくなることだってあるし。そういうの、和磨全部知らないでしよう。

「だって、あたしはあたしだよ」

今まで喉につつかえて誰にも言えなかった気持ち。勢いで出た言葉は、スツキリしないどころか喉にちくちくと痛みをもたらした。

和磨には、嫌われたくない。

ぎゅう、とさらに力を込めて腕にしがみついていると、田中、と
眩きが落ちてきた。

「……なんだよ、それ」

しばらく逡巡したあとに出た言葉は、呆れを含んだものだった。
けれど、それに反して声色は優しい。

反対の手で包み込むようにあたしの頭を撫でてから、自らの肩口
に押し込んだ。

和磨の匂い。

どうして……。

少し驚いたけど、しばらく堪能していたい。

と思ったら、和磨はすぐに離れた。

「かずま？」

はあああ、と盛大なため息をつきながら地面に座り込んでしまった。
いや、え、なにそれ、どんな反応かい、とその小さくなった頭

を上から見下ろす。

あーだのうーだの、情けない、病気だ、末期だ、とぶつぶつ呟く声が聞こえる。

「え、どうしたの」

和磨に合わせて座り込もうとしたら、先に延びてきた手に引っ張られて和磨の眼前に転がり出た。

ヒソヒソ話でもするような距離だ。両手をつき四つん這いの状態で、ゆっくり目を上げて和磨の顔を伺い見ると、その目とバッチリぶつかった。

うわ、近い。

目と鼻の先にあったその形の良い唇が、そっと耳元に近づく。潜めた声は、甘い吐息と一緒にだった。

「おまえが好きなんだよ、最悪だ」

「――ぎゃあああ！」

自分の叫び声で目が覚めた。

勢いで吹っ飛ばされたのか、ティディベアが地面に転がっている。はあふうと荒く息を付きながら、改めて周囲を見回す。

……兄ちゃんの、部屋。

興奮で高鳴る心臓が、次第に冷静を取り戻していく。

「なんだ、夢か……」

夢オチの常套句である。

言わずにはおれない。夢でなければなんとする。

だって、和磨から愛の告白。

……ありえねえ。現実ではなかったことよりも破廉恥な夢を見てしまったことが非常に恥ずかしい。

もはや痛い妄想だ。よりにもよって和磨だし。一番遠いに違いない和磨だし。

か、和磨だし。

何あの告白、現実だったら死んでいる。

「都合良すぎ、いくら嫌われてるからって」

嫌われたと確信したところまでは、確かに現実だったはずだ。

はず、っていうのはもう妄想と現実の境目が分からなくなっているから。それほどまでにショックだったらしい。

和磨に、嫌われたってのが。

ふう、とため息をつく。

「……やば」

そこで、もっと衝撃なる事実が。

立ち上がろうとしたところ、ついた肘の下に長い黒髪が絡まっていた。冷静にそつと手をどけてもう一度体を起こす。ふるつと頭を振れば、それに合わせて黒髪がさらりと流れた。

正真正銘、あたしの髪の手。

いつもは短いはずの髪の手が、見事に腰まで伸びていた。

一夜にしてこれほどの成長を遂げるとは呪い人形もビックリ。動揺してんだか冷静なんだか良く分からないことを思いつつ、いつぞやと同じく胸元にも手を伸ばす。

あ、うん、お帰り。

すっかり我が元へ帰ってきてくれたようである、女性のシンボルである脂肪。

「やっちゃったなあ……」

ぶつくさ言いながら部屋の中唯一の鏡の前に立つ。そこには、兄ちゃんの妹、つまりあたしの以前の姿が映っていた。

懐かしい、とは言っても、二日ぶり。

実は、何を隠そう朝起きてこの姿だったことは初めてじゃない。これこそが、あたしの身に起きた最大の変化なのだ。

発動条件はなんとも恥ずかしいもので、夢に興奮して飛び起きるとこの姿になっているのである。

おい、男子の朝の生理現象じゃあるまいし。あー、ゴホン。
さして取り乱さないのは、これが一時的だと分かっているからだ。
最初にこうなったときは本当に元の姿に戻ったのかとしばらく部屋
の中をぐるぐる回っていたんだけど、そのうち気が付けば兄ちゃん
の姿に戻っていた。

だから、多分今日もすぐに戻るだろう。

兄ちゃんに似ているその顔をじっと見る。兄ちゃんより睫毛は短
いし、鼻も小さくて、頬もふくらんでいるけど。
ちゃんと女の子、だ。

「そうだ」

あたしは思い出して、机の上から目当てのものを持ってくる。ま
っすぐな前髪にそれを留めてもう一度鏡を覗き込んだ。

十夜さんから、あたしに、ともらった赤いヘアピン。いくらもら
ったとはいえ、宗二がするののも思っていたので、付けるのは初め
てだ。

うん、いい、シンプルだけど意外と可愛い。

くるっと体を回してみても、おっとやりすぎたと思ったときにはタ
イミング良く。瞬きの瞬間、あたしは宗二の姿に戻っていた。

「うわあっ、兄ちゃん、それはダメ！」

慌てて前髪からヘアピンを取り除く。なにやら危ない画を見てし
まったようで誰にともなく申し訳ない。

はー。

ぐったりと座り込んで、なんとはなしに思った。

もう、限界なのかも。

そろそろ身辺整理をしたほうがいいのか。いついかなるときにどのようなことになっても、すぐに対応できるような心構えを。

諦めを……。

ここで何故か和磨の夢の告白が脳裏をよぎって、慌てて頭を振り払った。

そのとき同時に、机の上に置いていた携帯が鳴り響いた。デイスプレイには、コタローの文字がある。

「……もしもし？」

「あ、そーじ出た！」

「って、あれ、柳井？」

「あのさ、今いいところなんだけど、そーじも来ない？」

「い、いいところ？」

「そーじも、多分」

「……たぶん？」

「大好きだ」

「ブフォッ」

夢の告白第二弾きたこれ。

日曜日は萌えの巣窟

本日、気が付けば日曜日。

いろいろなことがあって正直ノホホンと曜日を数えることがなくなっていたわけだけれど、今、この時は日曜日で間違いないのだ。

日曜日、ウフフ。

それは、世間一般では学生の休日の意味する。

学校が無いということは、クラスメイトと会うことはないということ、しかし学校がないからこそ、得られる至福の時間があるというわけで。

あたしはダンスから引っぱり出したファンシーなクマさん付きTEEシャツの袖に惜しげもなく腕を通した。適当に財布だけカーキ色の細身ジーンズのポッケにねじり込み、いざゆかん。

極楽のパラダイスへと続く扉の前で、あたしは合図ともなるインターフォンを押した。

「はーいっ！ あ、そおじ、いらっしやい。どーぞーって、ここおれの家じゃないんだけどなー」

迎え入れてくれたのは、神々しいまでの光を放つ天使……そう言っても過言ではない。

つついボケーっと思入ってしまったあたしに、天使もとい柳井くんが不思議そうに首を傾げた。その姿までも今の格好にピッタリだ。

胸元にポップな星が刺しゅうされた薄手のセーターに、肩ひも付きカーゴパンツ……。

何を隠そう愛でられ系男子ルックに間違いはない。

「そーじってば」

「あ、ごめん。おじゃまします……コタローは？」

「アイツなら厨房だぞ。今日はコックだからな！」

ぶわー、なんかお茶目なこと言ってる。ヒョコヒョコと嬉しそうに廊下を駆けていく柳井くんの後ろ姿をニタリニタリと見つめつつ、あたしもそれに続く。

柳井くんから電話があったとはいえ、お呼ばれたのはコタローの家。小さな頃から何度も出入りしたことがあるため、見慣れた光景だ。

キッチンへと続くドアから中に入ると、そこには確かにエプロン姿のコタローの姿があった。

「コタロー、こんにちは。お邪魔します」

「先輩！　ちょうどいいところに来たっすね、あと少しでチーズケーキが焼き上がるところですよ」

あたしの姿を見つけて、コタローが楽しそうに言う。
うん、いい匂いが漂ってきた。チーズとレモンの何とも言えない

甘ずっぱい匂い、昔からこれが好きだったなと思い出した。

「あのな、さっきまでおれも手伝ってたんだよ。チーズと、砂糖と、レモンとー、ダマになんないように必死でかき混ぜた。すげーだろ」
「うん。そのために今日二人集まったの？」

「あ、そう、いきなり柳井先輩が話がある！って呼び出してきたんですよ。それで、せっかくだから先輩のためにケーキ焼こうってオレが提案したんす」

「そしたらもうそーじ呼んだ方が早いんじゃないかってなって」

そして朝早くに電話を……って、二人いつから集合してたの。

わー、でもこうして呼んでくれたのは素直に嬉しい。宗二の姿になってからというものの、休日に友達と遊ぶってことがまだなかった。こう見えてあたし、誘われない限りは結構一人で遊んでしまうタイプだからな。

「ちなみに、二人だけじゃないよ」

「え？」

「まー、アイツは少しも手伝おうとしねーけどな。今部屋で待ってるよ」

待ちきれないといったように、オーブンの中をのぞき込みながら柳井くんがそれとなく呟いた。

二人だけじゃない？ アイツ？

……それってもしや。

よく考えてみれば、柳井くんがいるところには必ずといっていいほどあの人がいたじゃないか。

あの人が、いるとなると。

破廉恥なマイブレーション！ ……どうしよう！

部屋に入るなり、土下座の勢いで身を隠そうとしたあたしは、それが実行されることなく両手を持て余した。

「こんにちは」

サラリと挨拶をこなした彼は、今コタローの部屋にいる唯一の御客人。サラリの後はスツと音が付きそうな程自然な動作で手元の本へと視線は移っていった。

そしてあたしの胸はホツとなで下ろされた。

「こ、こんにちは。……拓磨くん」

な、ななな、なんだ。そっちか……。

最悪な状況を想定してただけに、漢字一文字違いの勘違いには拍子抜けする。へたり込むように拓磨くんの側に座り込み、モフモフのじゅうたんにすり寄った。

……どれだけ恐れてんの、あたし。

あれが夢にしろ、そうでないにしろ、そんなことはないにしろ、
気まずさと居たたまれ無さと恥ずかしさと、いろいろなものがごち
ゃ混ぜになっている今、できるなら和磨に会いたくないと言うのが
本音だ。

おかげで夢が入り込む前の現実より、どうやって和磨に接してい
たか覚えてない。

「何、読んでるの？」

焼き上がるまで待ってて、と柳井さんとコタローに背中を押され
部屋に通されたので、今現在拓磨くんと二人だ。

気晴らしに声を掛けると、拓磨くんは理解不能な異国の言葉を口
にした。

……なんて？

下から本のタイトルを読もうとするけど、到底言葉にできなかつ
た。

「難しいの読んでるんだな……」

漢字で間違いないんだけど、読み方が分からない上に、読めたと
してもおそらく理解できないに違いない。

相変わらず拓磨くんはすごいというか、もはや意味不明というべ
きか。

はー、と感嘆のため息を付いていると、拓磨くんはふと本をカバ
ンにしまい始めた。あれ、ごめん、邪魔してしまった？

その手元をじっと見つめていると、カバンの中には他にも本が何冊か詰め込まれていることや、手紙らしきものが入っているのも分かった。

「ラブレター？」

あ、つい口に出しちゃった。拓磨くんは、手を止めるとすぐにひよいっと手紙を指先でつまみ上げた。

真っ白な便せんに、ハートマークのシール……古典的だよなあ。

「今朝、もらったんです」

「拓磨くんに？　へー、やっぱモテるんだね」

今時手紙ってのがもう、拓磨くんらしいというかなんというか。もちろん拓磨くんの意向じゃないだろうけど、こう、拓磨くんを好きな人ってひっそりと秘めた恋心を持ってる気がするから。

現に、ストーカー紛いな人までいたわけで。

「モテるってのが、どういうことか、僕にはよく分かりません。人の好意ほど、分からないものはないです。だって、確実に目に見えないから」

「好きってのは、うん、目には見えないね」

だから、思ってもみないところから急に好きだとか言われると本当にどうしていいやら分からない。

「目に見えないのに、どうして好きだと思えるんでしょう。根拠は？」

「そうだよ、根拠だよ。都合良すぎるでしょ、まして今は男なんだからそんなの友情で片づけられる話だし」

「……」

「全く、夢も希望も乙女心も詰まりっぱなしの妄想だね。それでまた勝手に気まづくなってるのかさ、ほんと最悪」

……って、あたし、何の話？

拓磨くんも、もう随分と意味が分からないらしく、じつとりあたしを見つめている。うわあわわ、なんでもないなんでもない手を振る。

「えーっと、拓磨くんは、まだ好きな人できないの？」

あ、じわじわと首が傾いていく。分かりやすいなもう。

「ま、そういうのってその場面にならないと分からないもんだよね。ほら、自分だって……いや、やめとこう、これ以上は」

ほんの薄っぺらい自分の恋愛事情が浮き彫りにされるので。却下。

生まれてこの方、あいにくと大層な経験をしてきていない。いや、今この状態があたしに限らず今世紀最大の経験ではあるけれど、人生経験としては。

今ひとつ。

「どっちにしたって、拓磨くん、あまり女の子をたぶらかしちゃうダメだからね。その気があるうと無かろうと」

「たぶらかす……」

「いや、ほんと、拓磨くんはその顔面が立派な武器なんだから。あ、それついでにお兄ちゃんにも言っておいて。この度も多大なるダメージを被ったと」

意味が分かっているのかいないのか、拓磨くんは素直にこくと頷いた。良くできましたとばかりに笑みを向けると、一つ二つと瞬きを返される。

あー、拓磨くんと話して少しスッキリした気がする。これやあんな美形を目の前にしたら、躍らされるのはその前に立つ女子のみ。それにまんまとあたしも引っ掛かってしまったのだよね。うん、乙女ってそんなもんだよね。

「それにしても……拓磨くんはさすがだね」

と、その違和感に、ステップを踏みたいけど困惑して今一步踊り出せないでいる。

……拓磨くん、全身黒のイモジャー。

惜しい! と思いつつも、それがまたどことなくかわいく見えてしまうのが、これぞ美形のなせるわざだろうか。
あえて言おう、萌えであると。

男同士だっているいろいろある

しばらく拓磨くんのイモジャー姿を眺めていたあたしだけど、拓磨くんはまた難しそうな本を読み始めて会話も無くなってしまったので、ふと部屋を見渡した。

コタローの自室は相変わらずきれいに整理整頓されている。男子高校生にしては珍しいくらいサッパリした部屋なんじゃないだろうか。

もちろん、年相応のマンガやらゲーム機やら遊び道具も置いてあるんだけど、それぞれ棚にスツキリ収納されているので邪魔にはなっていない。勉強机まわりも教科書や筆記用具などがあるのみで、勉強に必要ないだろうものは見あたらず。

それでいてカレンダーやら小物などオシャレに配置されているなんて、なんという空間クリエイター。あたしの部屋も汚い方じゃないけど、ここまでさりげないこだわりは見せていない。

これ、ダンスとか開けたらきれいに丸まったパンツが行儀良く並んでいるんじゃないだろうか……。

決して不純じゃない、いたって真面目な好奇心を抱きつつそろそろとダンスに近寄る。腰ほどまでしかないそのダンスの上には、これまたオシャレなインテリアが……。

「……あ？」

オシャレというか、不格好というか……激しく見覚えのある歪な

フォルム。紙粘土でつくられたネコだかウマだか分からないマスケットがかなりの存在感で鎮座している。他にもペンギン？だったりトマト？だったり便器？だったりジャンルもフリーダムな意味不明な物体がころころと。

「こ、これ」

呆然としていると、部屋のドアががちりと開く。

「宗二先輩、お待たせしましたー！　って、どうしたんすか、そんな渋い顔で？」

「こここ、コタロー、なんでここにこれが」

「ああ、それ。ずっと大切に保管してたんですけど、やっぱり飾っておきたくて……先輩からもらった誕生日プレゼント」

やっぱあたしが作ったヤツだあああ！

コタローは動揺するあたしを、しばらく不思議そうにみていたけど手にしていたトレーを簡易テーブルの上に置くと側までやってきた。

「この意味を感じさせない珍妙な形とか、手がちっちゃくて満足に作れなかったんだらうなうって思うところも……かわいいですよね」

その一つを手にとってうっとり見つめるコタロー。か、かわいい

いか、コレ？ どう見ても嫌がらせとしか思えない凶悪なプレゼントだ。

断じて言うが、今現在はこんなものをせっせと作ったりしていない。これは、小学生の頃、毎年の夏休みの自由研究のついでに余った紙粘土で作っていたものだ。コタローの誕生日がちょうど夏休み最終日8月31日だったばかりに、ついでに作ってついでにあげるという適当な恒例行事となってしまうていたのだ。

「これ、そーじが作ったのか？ うえ、へたくそだな」

後ろからのぞき込む柳井くん。その通りの意見をありがとう。世間一般の目は確かにこれで間違いないのに、この不細工な人形を見つめるコタローの熱視線はと言えば。

「なんてこと言うんすか、一馬先輩！ これは、幼き頃の宗二先輩が少しずつつ丁寧にそしてオレのために愛を込めて作ってくれたものなんですから」

制作時間五分のソレに、そんな重い感情こめてないんだけど。…このコタローを前に訂正するのも野暮なので何も言わない。

柳井くんもゲーツと砂を吐きそうな顔だ。

「うん、でも、コタロー。さすがにこうして飾っておくのもやめておいたほうがいいんじゃないかな……。知らない人が見たら完全にコタローの人間性を疑うというか」

あたしですら恥ずかしいし。

ね、これは押入の奥深くに眠らせておこう、ね。と物体に手を伸ばすも「うわあー嫌っす！」と情けない声で止められた。よほど気に入られているらしいのがまた心が痛いわ。

幼き頃のあたし……当時はなんとも思わなかったのか。最低だな。ちなみに、あたしがもらっていたコタローからの誕生日プレゼントは子どもながらやけに金がかかっていたのに、すでにあたしの手元にはない。

超最低だ。

「もー先輩までなんでそんなこと言うんすか！ オレは毎年毎年、自分の誕生日を楽しみにしてたっすよ。母さんも父さんもいなくても、先輩がいて、二人だけでお祝いすれば、嬉しかったんです！あの頃の先輩、うう、天使みたいにかわいかったっす」

「……なおさら、後ろめたいわー！」

そんな嬉しいエピソードに、この五分の適当な愛が入り込むには重すぎる。

しばらく、片づけて、嫌だ、隠して、嫌だ、捨てて、絶対嫌だ、と応酬が続けていたが、それをじっと見つめていた柳井くんが口を挟んだ。

「仲良いよな、おまえら」

思わぬ言葉だったので、二人して物体を挟んだまま動きを止める。

「おれもミツカとは小学生の頃からずっと仲良いけどさ、プレゼントとかしたことないぞ。小太郎も料理している間ずっとそーじの思い出語るし、そういうの聞いていると、なんかおまえら男同士の友達って感じじゃなくて……こう、恋人同士みたいだよな」

「うわっ……！」

ゴリツと音がして物体が地面に落ちた。紙粘土が少し剥がれて、ネコみたいな顔に亀裂が入る。

わー、あっけなく壊れたー！

いきなり手を離すからだよ、と物体を追いかけてながらコタローに目を向けて、思わず絶句した。

「ち、違うつす」

かお、真っ赤だ。

ほっぺたを押さえて、潤んだ瞳で見つめられていると、まるで柳井くんの言葉を肯定しているかのようだ。けど、コタローの口からはそれを否定するような言葉が出た。

「いえ！ あの、確かに先輩のことは好きだけど、恋人になりたいと思ったりもするけど、そういう風に見えるなら嬉しいけど……」

うおー本音ぶちかましすぎだろ！
いや、まあ、うん、最近のコタローの様子からなんとなく分かってたけども。

「あれ、でも、なんか……違う」

コタローは言ってしまったから、自分の言葉の違和感に気付いたようだった。

そら、そうだ。恋人同士って、宗二の姿をしたあたしとコタロー、もとい男と男で簡単になれるものじゃない。

今まで通り当たり前が好きというには、大きく変わりすぎた現状が横たわっている。ましてや、それを知る術はないのだ。

あたしはそのコタローの戸惑いの理由を、知っている。

「コタロー、お祝いは毎年、三人でしてたよ」

コタローの好きは一体どこに向かっているのか。

一体、誰を、好きなのか。

当然のように一人足りない過去の思い出が、コタローの想いをねじまけているんだな……。

真っ赤になってあたふたと動揺するコタローを見ると、ものすごくかわいそうに思えてきて、あたしはなだめるようにコタローの名前を呼んだ。

「わー！　ぎゃあ、オレ、なんか今変なこと言わなかったっすか！

？」

「大丈夫、大丈夫、コタロー。なんでもないよ」

「宗二先輩、ほんとうに!？」

「うん。コタロー、好きだよ」

「お、オレも好きっす!」

「ほら、なんでもない」

「……はい!」

コタローが単純で良かった。どうにかなったんだかどうなのか、結局曖昧になっただけのような気がするけど、コタローは納得したように頷いてくれた。

ほーっと息を付いて、徐々に顔から赤みがひいていく。あたしはコタローの頭をがしやがしやと撫でた。

「やっぱり、なんか普通とは違うよな」

「……それを言うなら、柳井!」

「はえっ!？」

元はといえば、柳井くんがイラン一言をぶちかましたせいでコタローが混乱してしまったのだ。これ以上かき乱されてたまるか、とあたしは仕返し兼ね指先を柳井くんにつきつけた。

驚いたように自分を指さす柳井くん。たっぷり時間をかけて頷いてあげる。

「自分ではそうでもないように言ってたけど、きみだって十分和磨と仲良いでしょ」

「え？ だから、おれらはそんなプレゼントしたりとか」

「別にそれだけが友好の証じゃないよ。いつも一緒にいるし、必要以上にベタベタしてるし」

「してるー？ ミツカが世話焼きなだけだよ。それこそ、最近じゃそーじのほうがミツカとベタベタしてる！」

「ぬおっ！」

思わぬ反撃が来た！ ガキッとコタローの動きが止まったような気がしないでもないけど、今はもうそっちに気を取られている場合じゃない。

今のあたしにとって和磨のネタはタブーと言わなかったか！ 言っていないか！

「ミツカ、昔から人と関わるの嫌ってるけど、そーじには気を許してる、絶対。だってミツカから話しかけたり、触ったりとかって、今まで無かったことなんだぞ。この間なんて服着替えさせたり見詰めあったり」

柳井くん、その言い方じゃ語弊があるんだがね。コタローを見ないようにして、あたしは必死な柳井くんに首を横に振った。

「着替えさせるって、体育のとき着替えに手惑ってた自分を手伝ってくれただけで、見つめ合うのみにらみ合うの間違いだと思う」

「だーから、ミツカはそれすら普通他人にはしないもんなんだよ。おれは家族のようなものだからしてもおかしくないけど。な、拓磨？」

急に話をふられた拓磨くんだけど、いつの間にか本を閉じてあたしたちのやりとりを見ていたらしい、即座に頷いた。

あれあれあれ、柳井くんを責めようとしたはずなのに、なぜかあたしが身に覚えのない胸のざわつきを感じている。

「そう！ 今日の話はそれだったんだよ」

え？ 何が？

意味の分からないあたしの手首を、柳井くんはとってテーブルの前につかせた。そこにはベイクトチーズケーキが一切れずつお皿に乗っている。焼きたてホクホク、いい匂いが漂っている。

「そんなこんなな二人ですが。一昨日から様子がおかしいとおれは思ったの」

「……あ」

のろのろとコタローも正面に座り、拓磨くんも当然とばかりにあたしの隣を陣取り。四人で小さなテーブルを囲み、あたしはもしかして、と冷や汗をかく。

「一昨日、昼休みが終わった頃から二人とも全然話さないし、顔を合わせないし。ミツカに聞いてもなんでもねえだし、そーじは上の空で聞いてやしないし」

あの夢妄想まで繋がったあの事件の直後だ。ハッキリ言ってあたしは自らがどのように行動したのか覚えていないんだけど。
……気付かれていたのか。

「何があったか白状しろ！」

柳井くんは、いつに増して男らしく声を張り上げた。

微笑ましさって時に残酷

「ミツカと、ケンカした？」

焼きたてホクホクの、柔らかいベイクドチーズケーキをもぐもぐと咀嚼しつつ、力無く頷くあたし。

目の前、椅子に座る柳井くんが、怪訝な表情でそんなあたしを見返す。

「……たぶん」

「って、そおじ、その多分は何だよ。ケンカしてないのかどっちな
の」

「いや、うん、たぶん」

いろいろと複雑な乙女心があるので、詳しいことは話せませんがね。いや、こともあろうにな夢妄想も見ただけけど、ケンカしたことはもちろん事実だった、はず。そこは夢じゃなかったはず。……たぶん。

なんとなくちらりと隣の拓磨くんを見ると、催促したと思われたのかフォークに刺したチーズケーキをほいと差し出された。うん、食べるけど。

「まあ、でも言われてみればそんな様子だったな。ケンカかー。そ

りや二人とも目も合わせないわけだ」

思い出しているらしい、柳井くんは足をぷらぷらと遊ばせながら首を傾げ斜め上方向を見つめている。

柳井くん曰く、あの日、和磨はひたすらそっけなく、あたしはひたすら無反応だったという。そんな二人に挟まれて居心地の悪い思いをしたらしい。申し訳ないと思うけど、あたしも正直何をしてたのかサッパリ覚えていない。そのときは覚えていたかもしれないけど、すでに夢妄想のインパクトに塗り替えられている。

ちなみに和磨は朝から姿が見えなかったとのことで、今日にはここには連れてこられなかったらしい。アーヨカッタ。つか柳井くん、そうでなくてもそこは空気を読むとこだろう。

「……そもそもなんでケンカなんかしたんすか？」

あの混乱を経て元通りに戻ったコタローが、ずいと体を乗り出し興味深げに聞いてきた。

「そうだよ。昼休みいなくなったそーじをミツカがわざわざ探しにまでいったってのに、帰ってきたら二人ともあんなだもん」

全くねえ。なんでだろうねえ。あたしも知りたいわ。
とりあえず口の中に入ってたものを飲み込んで、小さく頷く。

「ケンカっていうか、まあ、厳密に言えば自分が和磨に嫌われてんの。なんかさ、俺の気持ちも知らないで、とか急に怒り出しちゃったんだもの。自分、嫌な思いさせちゃったって気付いて先に謝ったっていうのに」

こう考えてみると、本当に理不尽だ。むすつと唇が尖る。

「最初はなんで怒らせたんすか？ 嫌な思いつて？」

「多分、和磨は自分がいろいろな男の子に移りするのが嫌みたい。……この間も、その、椿本先輩に迫られて」

「せまつ……!？」

コタローががちゃがっちゃと音を立てて、机に手を付いた。びっくりして後ろに仰け反ると、なおも焦ったような表情で近づいてくる。後ろでは同じように驚いたらしい柳井くんが驚愕に目と口をポカンと開けていたけど、次第にぐぐぐと眉間にしわを寄せ嫌悪の表情になっていった。

「せせせんばい一体何をされたんですか……! 椿本って誰!」

「違う違う違う! なんかいうかこう、流れで? 勢いで? 先輩の趣味で? 別に何されたわけでもないよ」

兄ちゃんの悲劇は阻止したし。

必死で弁解するも、コタローはなおも心配そうにわなわなと震え

ながら見つめてくる。でかい犬が耳を垂らしているようでちょっと微笑ましいけども。

「宗二先輩って油断しすぎですよ。いつも気付けば誰やあれやに襲われてるんすもん」

と言って、あたしから視線を横にスライドさせる。その先には、あー、拓磨くん。言われてみれば、いつもコタローってタイミング悪く乱入するフシがあるよなあ。しかし、それは今言わなくて良い。つられてそちらに顔を向けていたあたしに、拓磨くんがまたチーズケーキを口元に持ってくる。条件反射でそれを口にするあたし。

「……つか、拓磨」

今度は早いスパンでもう一度フォークを差し出され、あ、ちょっと待ってね、と咀嚼を早める。不穏な声色で声を掛けたコタローが、意に介さない拓磨くんからそのフォークを取り上げた。

「なんで先輩に食べさせてんだよ！」

拓磨くんは空になった手を見つめ、コタロー、ではなくあたしを見、ダメ？と言わんばかりに首を傾げてきた。

ダメなわけがない……！

なんだかよく分からないが、拓磨くんは以前一度してから、あた

しにあーんすることに味を占めてしまったようである。

さっきも普通に食べようとしているところ、突然皿を奪われ、ス
ムーズにあーん体勢へと入っていた。

「宗二先輩も許さないください。オレだってそんなにしたことな
いのに……」

「ごめん、つい嬉しくて」

「ケーキ、作ったのオレっすよ？」

「うん、おいしかったからさらに嬉しくてさ。コタロー、ありがと」

素直に感謝を口にする、コタローはしぶしぶ元の体勢に戻り、
がつくりとうなだれた。あれ、そうなっちゃうの？　こう言えば何
が何でも喜んでくれると思ったんだが。

もしかして何か間違っただんろうか……と、心配になっている
と、コタローが深くため息を付いてさらにうわあと不安になる。

「なんとなく、分かったっす。三ツ瀬先輩が怒った理由」

「え、今？　やっぱあれかな、男のくせに男と仲良くしてんなよみ
たいな、チャラチャラした行動を迷惑がって」

「ある種正解っす」

「……えー、別に人が何してようがどうでもいいじゃん。ね、和磨
心狭いよね、柳井？」

何故かフォークを口に入れたまま無然とした表情だった柳井くん
に話を振る。一度、むーっと唸ってから、フォークを皿に落とした。

「でも、おれもなんかヤダ。あの先輩嫌いだし、そんな人とそーじが仲良くしてたらおれ、やだー」

「や、やだって、柳井……。椿本先輩嫌いの？」

「うん、初めて会ったときにさ」

え、もしかしていきなり口説かれたり！？

「やたらバカにしたように、可愛いですね、って言われた。それからすれ違うたびに鼻で笑われたりとか、なんか目の敵にされてんだよな」

「ええっ！ そっち？」

これほどまでに美少年の柳井くんだから、あの特殊な嗜好をもった椿本先輩にしてはとんだターゲットだと思ったけど、逆なんだ。バカかわいって、からかわれてるわけでなく？

……そういえば、前に見た椿本先輩の彼氏らしき人も、男らしくて格好良い人だったもんな。もしかして、柳井くんみたいなかわい子には食指が動かなかったりするんだろうか。

「気に入られるより何倍もいいけどな！ ミツカが言うには、男相手にとっかえひっかえらしーんだ」

「そそ宗二先輩！ 絶対二人つきりになっちゃダメっすからね、エジキにされちゃたまないっす」

「大丈夫だって」

つか、あたしも同じようなことをしているような気も……。椿本先輩みたいに過激じゃなくても似たようなことは……。

うん、拓磨くん、ゴメン。

まあ、いたたまれないんで言いませんがね。

「……そーじ、しばらく大人しくしてたら？」

「えっ、あ、ゴメン！　ちゃらちゃらして！」

「あの先輩と会わないこともそうだけども、他の男とも仲良く、しないでよ」

「……え？」

「そーですよ、先輩！　禁止にしましょう。いいですか、今ここにいるメンバー以外、明日から仲良くしちゃダメっす」

え、あれ、何の話！？

子どもみたいに拗ねた表情をしている柳井くんと、拳を握って力説しているコタロー。えええ、と説明を求めるみたいに隣の拓磨くんを見れば、いいんじゃない？　とでも言いたげな妙に澄ました顔つき。

なんじゃい。

「待って、なんでそうなるの？　それに、ここにいるメンバー以外って、和磨も？」

「ちようどいいじゃん。そーじがマッソーな人間になるチャンスだぞ。どうせミツカはミツカでそーじと距離取と思うし」

「それじゃあますます仲直りできないんじゃない？」

「言ったら、そもそもミツカは人と関わるのが嫌いなんだよ。下手

に干渉したってもっと煙たがられるだけだと思うけど」

柳井くん、なんでそんなサッパリしてんだろ……。

でも、言われてみれば確かに一理ある。クールぶってるし、真面目だし、そもそも自分からにこやかに友達を作ろうとするタイプじゃないもんな。つーか関わるなって言ってきたのアツチだし。

それにそれに、あたしだってやれば誠実にもなるところを見せてやろうじゃないの！

「よし、分かった。これからここにいる三人以外とは仲良くしない……決めた！」

「そうじ、えらい！」

「それでこそ先輩っす。よし、これで中村部長とも接触しなくなりますね！」

「……えっ？ あ！」

あれ、そっか、一方的にきやあきやあしなくなるだけじゃなくて、もともと仲良くしているひとにもそっけなく振る舞わなくちゃいけないってこと？

「それはさすがに人間としてっ」

「そーじ！」

「宗二先輩っ！」

ぎゃああと自らの失態に気付ikitとも簡単に自分の決意を却下し

ようとしたあたしだったが、それも柳井くとコタロー、それぞれの笑顔に阻止された。心底嬉しがつているのか、ハートをまき散らしながら懐いてくる無邪気なネコと犬のようである。

ちよつと……かわいすぎて逆らえない。なにそれわざと？ 作戦なの？ おいしいの？

……この二人が揃うと最強だな！

「ガンバツテ」

粉々になった決意を手のひらからサラサラとこぼしていると、追いつ打ちのように拓磨くんの励ましの言葉が続いた。

隣を見る。何故かちよつぱり微笑んでいるように見えるその表情が、脳みそをゴーンと打ち鳴らした。

何故、今、ここで、その顔を……！

「うん、がんばる……！」

目から液体どころか、鼻から赤い絵の具出そう。

情けなくも、こうしてあたしの禁欲生活が幕を上げたのである。

禁欲生活の被害者

——気付いたときには、椿本から引き離すようにアイツの手を取っていた。

イライラしていた。

いつもひょうひょうとしているアイツが顔を真っ赤にさせていることも、その原因が椿本にあるっていうことも。

コイツが、何も知らないことも。

どうして、俺だけがこんな思いをしなくちゃならない？

胸の内が苦しく、熱い。まるで自分が自分じゃないような、他の誰かが勝手に俺の思考を体に乗っ取っているかのようだ。

きっといつもの自分だったら抱かないだろう感情。それをどうして当然のように抱えているのか、それすら自分で自分が理解できなかった。

「和磨」

名前を呼ばれて、現実が戻ってくる。一瞬で冷静を取り戻した俺は、自分の手の先に何が繋がっているのかに気付いた。

手……普段からスポーツもしないらしい、骨張ってはいるが男にしては華奢な、田中の手のひらだ。

「そろそろ離して。一人で歩ける」

その手が力を取り戻して引っ張ってきたのに焦って肩が震えた。俺は何を考えていたのか。

最初に手を繋いだのは、忠告も無視してあの椿本に近づいたバカなアイツを引っぱり出すためだろ？ それだけのはず、もちろんずっと繋いでいるつもりはない。

そう自分を安心させて、手を離す。それでも田中の顔が見られない。

「和磨、あー、迷惑かけてごめん」

言いにくそうに田中が謝る。

「最近ずっと、イライラしてるでしょう。別に迷惑かけるつもりはないんだけど、いろいろと和磨が不快に思ってるのも事実だし、だから、ごめん」

どうして、おまえがそれを言うのか。どうして、オレに謝るのか。確かに不快だ。田中の節操のない行動は、同じ男として理解できないし、それが目障りだというのも本音だ。

だが、田中の口からそれを指摘されると、何故だか無性に腹が立った。

「俺の気も知らないで……」

口から勝手に漏れた言葉は、自分でも思ってもみないものだった。おかしい。これを言うのは、おかしい。俺は別に、理解しあいたいわけじゃない。

目の前の田中も、眉間に小さくシワを寄せ、信じられないといったばかりに俺を見ている。

……これ以上は、ダメだ。

「もう、俺に構わないでくれ」

逃げるように口にしていた。

足を踏み出すわけにはいかない。理解されるわけには、いかない。

——認めたくなかった。

この、胸の痛みを。

土日を経て、俺はいつも通り一馬と共に登校した。

正直、あの直後は納得行かないことばかりでどうしようもできず、ひたすら自分の殻に閉じこもっていたわけだが、休日一人で息抜きできたのがよかったのだろうか。よくよく考えてみれば、あのときのできごとなどほんの些細なことで、俺が思い悩むことなど無かつ

たはずだと落ち着くことができた。

しかし、俺はともかく問題は田中だろう。下手なケンカ別れみたいになってしまっているのを、どう思っているのか。

いつものように席について考えていると、教室に飛び込んでくる足音がした。

「うー、ちょっと聞いてよ！」

眉間にシワを寄せて何か堪えているらしい田中だ。

ここまで走ってきたのか髪が乱れて、顔は汗ばんでいる。それを直そうともせずはこちらにずかずかと向かってくるのを途中まで見て、近づいた瞬間俺は顔を背けた。

……んだよ、いつも通りじゃねえか。どこそこの男がやばいだろうしようと俺に報告してくるときと違わない、一方的な声のかけ方だ。考えて損したと思いながら、呆れつつもう一度顔を上げる。

――が。

「柳井！」

名前を呼ばれたのは、俺じゃない。俺の脇を見事に素通りして、田中は俺の斜め後ろ、一馬の元へと一直線に向かっていった。

俺に、声を掛けなかった。

すり抜けた風だけが、そこに残った俺の頬を撫でる。思わず振り返りそうになったのを、すんでのところでグッと堪えた。

「はよー、そーじ。朝っぱらからどうしたんだよ」

「どうしたもこうしたも……あのこと、やっぱ無謀だったよ！ 十夜さんなんかこっちのことなんかお構いなしに、死ぬ気で追いかけてくるしー！」

「あ、昨日の約束のこと？ ちゃんと守ってんのか、えらい」

「ううう、柳井、もっと誉めて」

はあ……？

つーか何の話だ。俺にはさっぱりだが、一馬には理解できているらしい。涙声になっている田中をたしなめているのか、笑い混じりに声をかけている。

……昨日の約束って、なんだ。

昨日は日曜日だったじゃねえかよ。一体どこでどうやって取り付けたというんだ。俺は一馬が寝ている時に外に出て、帰ってきたときにも一馬は同じくベッドの中だったから特に外出していないんだと思っていたが。

「そーじ、いいじゃん。今日はおれと一緒にいてやるからさ。な？」

「……うん、今日の柳井すごく頼りになる」

「今日のそーじは、随分弱気だなー。もう、疲れた？」

「精神的にね、いろんな意味でね、グツタリしそう」

「あはは、がんばれ」

わしゃわしゃと髪をかき混ぜるような音が聞こえる。うー、とか

身を任せるように唸る田中の声も。

俺はすっかり後ろを振り向くタイミングを失ってしまい、動けずにいた。いつもだったら三人顔をつきあわせれば自然と他愛ない話をしていたはずなのに。

今、このとき、当然のように俺が入っていない。聞き耳だけ立てる俺の背後で、完結している二人の世界。

……確かに、構うなと言ったのは俺だが。

田中は本気で俺を避けるつもりか!?

むかつく。

なんか、すげえ、腹立つ!

二人の楽しそうな笑い声や囁き声が聞こえるのが、煩わしくてしょうがなかった。

それから授業が始まって、二人だけの会話は続いていた。俺が誘われることもなく、俺から声をかけることもなく、ただ嫌でも耳を傾けてしまうばかりで。

漢文だとか、数式だとか、まったく頭に入らない。入ってくるのは、チーズケーキがどうのこうのとか、また遊びたいねとか、やっぱりおもしろいことになったねとか、黙って! しーしー! とか。それで極めつけが。

「あのさ、やな……かずま」

「あはは、そうじどもってんなー」

「どうしてもこれ呼ぶ? いま?」

「もちろん。そーじの方が照れるって珍しいよな」

「いやー照れるとかそんなんじゃないってね！　だってほら……やな、ええと、かずま」

「うん、そおじ」

なにいちやついてんだこいつら……！

机に突っ伏したい気分になりながら、眉間に手を当てる。完全に二人だけの世界だ。あいつ、俺にはしおらしく謝ってきたくせに、一馬にはそうなのか。

気がつけば、田中は今日、一馬とばかり一緒にいた。昼休みも、ふらふらと教室を出ていかないし、訪ねてきた男も一馬づてで顔をあわせるのを断っていた。

確かに俺に謝ったのは、男と関っていたことを反省してのことだったのか？　だからって、俺をも避けるのか？

理解できない。一馬に聞くチャンスはなかったし、聞けても俺はきつとそうしなかった。

結局一日一馬とも田中とも話をしないまま、一人帰路についた。寮ではなく、実家に。寮生活をしているとはいえ、俺の実家はそれほど離れていない。拓磨の学校に近いところにある。

「あら、どうしたの。帰ってくるなんて、珍しいわね」

「夕飯は？」

「あるわよ、もしかしてママの手料理目当て？　素直にそう言えばいいのにい」

とびらを開けるなり、スーツにエプロン姿というミスマッチすぎる出で立ちの母さんに迎え入れられた。常にショートカットでバリバリ働くキャリアウーマンな母さんは、良くできた主婦でもある。今も仕事から帰るなりすぐに夕ご飯の準備に取りかかっていたのだろう。

「拓磨も帰っているわよ。そういえば、この間会ったっていったけど、外でも二人仲良しなのねえ」

「まさか。偶然。共通の知り合いがいるだけだって」

「あら、そうなの。良かったら今度連れていらっしゃいな」

七海にしたって、田中にしたって、それは嫌だ。お友達にも良い母として振る舞うわよー、と意気込む母さんの脇を通り抜け、リビングに入る。そこには小さめの本を片手にガラスコップで茶を飲む制服姿のタクが確かにいた。

「おかえり」

本から目を離さないまま言われる。俺も、おうとだけ返事をして冷蔵庫から麦茶を取り出した。いつもは学校からすぐの寮だったせいか、今日は久しぶりに家まで歩いて疲れすぎた。電車に乗ればすぐだが、いろいろと考え込んでいたので乗るタイミングを逃してしまった。

「寂しくて一人で帰って来たんだ？」

「ぶはっ!？」

盛大に麦茶吹き飛んだ。情けなくむせながら、アツサリと言いつたタクをギッと睨む。ようやくタクは本から目を離すと、凶星だと言いたげにゆっくり瞬いた。

「タク、おまえ何を知ってる」

「さあ？」

相変わらず理解できない弟だ。こてんと首を傾げるのは、ウソでもしらばっくれているわけでもなく、本気で言っているらしい。頭いいくせにカンで生きるな、まじで。

質問を変える。

「おまえ、昨日誰かと会わなかったか？」

「うん。七海に誘われて、チーズケーキ食べにいったけど」

「七海？ そいつだけか」

「一馬と、あの変なやつ」

「……田中か！」

やっぱり俺の知らない間に昨日会ってたんだ、あいつら。

麦茶を一気飲みし喉を潤してから、俺はソファに腰掛けるタクに勢いよく詰め寄る。タクは、怪訝に眉根をひそめて、隠れるように開いた本を顔の前に覆っている。

「何の話をした？ 約束ってなんだ」

「兄貴、気になるの？」

気にしてねえよ！と、言うにはあまりにも必死だったことに気付いて、ついつい顔が強ばる。そうだ、そうだな、俺が気にすることじゃねえんだよ。いくら今日田中が一言も絡んでこなかったからって、俺と目すら合わせなかったからって、一馬には何故か頼りっぱなしだったからって……！

……っーか、あいつ。

構うなって言って、本当に無視することないだろ。

「兄貴」

「はあっ！？」

声が掛けられて、思わず変な方向に思考が逸れていたことに気付く。あり得ない意味が分からない田中嫌い、と呪いのように言い聞かせ、なんとか自分を落ち着かせようとする。

そんな俺を、タクは本の上から目だけのぞかせながら見てきた。

バカッ、こっち見んな！

やけに恥ずかしくなって、脱力しつつソファに倒れ込む。こんな情けねえ自分が気持ち悪くて、反吐が出そうだ。

「兄貴、好きなの？」

「……は？」

隣からぼそつと聞こえるタクの声。何のことか分からなくて、力を抜いたまま呆然と聞き返した。

「宗二のこと、好きなの？」

「好き……って、どういう意味だ」

「だから、キスしたいかってこと」

キス……俺が、あいつと、キス？

「って、したいわけねーだろ！俺も、あいつも男！何をどう間違ってもするかバカ！」

「男同士じゃしないの？」

「……おまえ、したいと思うか？」

「したけど」

ふーん、と何の感慨もなさそうに呟くタクを信じられない思いで見つめる。

え、いま、なんて？　した、とか言わなかったよな……。いくら常識に疎いからって、こいつ、恋愛観までおかしな方向にねじ曲がってねえだろうな……。！

ダメだ、分かっていない、男はすべからく女を好きになるもんだ。キスも、抱擁も、全部女相手にするもんで、何をどうしたって男相手には……。しない。

「あれは何かの間違いだ……」

数十日前の、自分の失態が思い出されて、ますますやるせない気持ちになった。

つか、だいたいおまえは突然何を言い出すんだと、横目でタクを見たら、すでに本に視線を落としていた。

すげえマイペース。

こいつみたいにな、何にも囚われることなく生きることができたら、どんなに楽だろうか。そんなことを考える時点で、俺って随分と優柔不断だと情けなくなった。

禁欲生活の被害者（後書き）

うだうだ和磨くんのやたらかきにくいこと。難しくて一ヶ月悩んでいましたすみません、で、これか……。

入れたかったネタ←

「兄貴、宗二のことたぶらかしちやダメだよ（って、宗二が言ってた）」

「誰が、たぶらか……！（されてるのは俺だろう！）」

かみあわない。

禁欲生活の誇りある被害者（前書き）

禁欲生活二日目。赤髪の不良視点。

禁欲生活の誇りある被害者

スーパーの駐車場で、馴染みの顔ぶれに囲まれたのはセンとユーギオカードをトレードしているときだった。

どいつもこいつも自己主張の激しいルックスで、動物みたいに本能のままこちらを威嚇している。前だったら、何も考えず近づいてきた時点でぶっ飛ばしてるところだが。あいにくと、俺たちには誇るべき制約がある。

腰を落とし地を蹴って、戦闘態勢だった野郎共の脇下からすり抜けた。

もう後ろから誰も追いかけてきていないことを確認すると、俺たちは通りに面した公園に入ってようやく足を止めた。

「俺たち、逃げ足早くなったもんだよなー」

軽く口笛とか吹きながら昔懐かしのブランコに立つと、センもだよなあと言いながら隣のブランコに座る。ポケットにねじこんだカードを取り出しては、一枚一枚確認作業に入った。

「しっかしどいつもこいつも凝りねえよな。あ、それ、『レッドポツポチャン』かぶってね？」

「『邪悪なるぬりかべ』とトレード」

「え、あれ使えんの！？ 毎ターン固まるだけで使えねえからサトシにやった」

「バック！ オマエ、アレ知らないのかよ！ 『インテリメガネ』装備したら最強の切り札になるんだぞ！」

「ちょ、知らねー！」

「だからジャンプは毎週チェックしとけって言ったんだろ。最近の『インテリメガネ』の説明項にもちゃんと記されてあるからな。もちろん俺のファイトは最新ルールだ」

センは、浅黒のつるぴか頭を夕陽にきらりと光らせ言い切った。まじかよ、知らねえよ、公式ルールは更新が早すぎてたまについていけねえ。

こうなったらサトシに返してもらうかなあ、とも思ったが、あの生意気なクソガキのことだ「もらったもんは返せませえん」とか憎たらしいことを言うに違いない。ぶん殴りたいが、それもダメだ。

宗二さんと約束している、ケンカはしないと。

この際ルールをねじ曲げる方が早えか。

「新しいカードも手に入れたことだし、ファイトしとくか？ モモ」

よっぽどつまらなそうな顔をしていたらしい。きまじめだか、その分空気を読むのに長けているセンが誘ってくる。俺はあーうー、と考え、最終的にいいやと返した。

「今日もセンには勝てる気しねえしー。負けたらまたカード奪われるだけじゃん。俺、今最強手札模索中なの」

「最強手札って。オマエ、まずは最新ルールを守れよ、いつも攻撃ばっかめちゃくちゃだし」

「ルールとか、面倒。守るのなんて、ださい」

正直に言ってブランコをこぎ出す。センの呆れた声を背中に受ける。

足に力を入れると、ブランコが風をびゅんびゅんきって、徐々に高さを増していった。空が近くなる。手を離したらどこまで飛べるか試してみたくなった。

このスピード感とスリル、ケンカと同じだ。

野郎の顔面を殴れば殴るほど、一瞬にして発散されるエネルギーのせいかな、爽快な気分になる。内に溜まったモヤモヤ、ストレスだって人さえ殴れば後には残らない。あとは飛んでくる拳をいかに華麗に避けるか。あえてあたってやるのも一興だが、苦渋に滲む野郎のツラったらおかしくてしょうがない。

それが、以前までの楽しみだったのに。

変わったのは、宗二さんに出会ってからだ。見るからに弱者で手加減してやるつもりもなく、完全にこちらから仕掛けたケンカだったのに結果は惨敗。正直最中のこともうろ覚えだ。ただただ向かっていったこちらの手足が一つも届かなかったという事実だけ、よく覚えている。

朦朧とした意識の中、月明かりの前に佇むその姿の神々しさを見た。蝶のように華麗に舞い、狼のように高潔なその姿。なんか一瞬で落ちた。憎しみとか苛立ちとかそれすら抱き忘れて、なんか分かんないまま尊敬してしまった。

宗二さんを慕う野郎どもはみんな同じだろう、センだって。

何も思わないで居るとただの平凡な野郎なのに、惹きつける何かがある。ぶっちゃけ不思議な人だ。

「あ、宗二さん」

激しく脇を行き来する景色の中、歩道を歩く制服姿のその人をピンポイントで見つけた。疲れているのかグッタリと肩を落としているのが遠目からでも見える。

何があっただろ。

十夜を通して久しぶりに会って、宗二さんは変わったような気がする。儚さというか、弱々しいのがまるで華のような危なげな色が増している。

「セン」

力を失い始めたブランコから飛び降りて、まだカードを一枚一枚めくっているつるぴか頭に声を掛けた。宗二さんを指さして伝えると、センもカードを手から取り落としシャキリと立ち上がった。

よっし、声掛けにいい。朝宗二さんの学校に行くと露骨に煙たがられるからな、宗二さんはきちんと勉強するんだ、エラくてリッパだから。

「宗二さん!」

公園の入り口を通りかかる際に、声を掛ける。辺りを見回した宗二さんだったが、こっち、と続けると顔がぐりんとこちらを向いた。

「げえ」

あれっ、ぶん投げたカエルが壁にぶちあたったみたいな音。とりあえず、今日もオットメゴクローサマですと伝えると、口が半開きのまま、何を察知しようとしているのか視線が左右に揺れだした。

「宗二さん？」

呼びかけても返事はないし、一步後退る。なんだ、とセンに目だけで問いかけるが、センは俺ではなく宗二さんをガン見したままだ。

「あ、そうそう。今日俺たち、絡まれたけどケンカしなかったんですよ。な、セン」

えらいでしょー、と動かないセンを小突く。

「そ、そうなんです！ ほら、きれいなもんでしょ」

気を取り直して、センがバツと拳を差し出すと宗二さんは体をぎ

ゆうっと小さくした。うわっ、ちっさ。でかい俺らはついつい上から見下ろすようになる。

つか、センがそういう乱暴なことするから、高潔な宗二さんが気分を害してるんじゃないか？

「えっと、宗二さん、俺らと一緒に遊びませんか！ 今ちようど……」

「ルール」

気分を変えようと詰め寄る俺に、もう一步後退った宗二さんがポツリと呟いた。

ええ？

俯いた宗二さんからは何の感情も伺えない。機嫌が悪いのかそうでないのかも、分からなかった。はあ、と何の意図か読めないため息。

「男なら、ルールは守れ」

カッと視線を上げるなり、俺に目を合わせ凜として言い放った。意志を宿した強い眼差しに引き込まれそうだった、というかもう圧倒されている。

啞然とした俺とセンが我に返ったときには、宗二さんはすでに音もなく俺たちを通り過ぎた後だった。勢いよく振り返るも、まるで最初から存在していなかったかのように跡形もなかった。

「カッ……」

「ケーな、おい……」

言い切れなかった俺のセリフを、センが引き継いだ。

終わった今になって、ずぞと鳥肌が立つ。長く説教されたわけじゃない、たった一言言われただけでこの重量感。シビレル。

……ルール。

孤高の狼らしく馴れ合うのが嫌いな宗二さんが、冷笑と共に深くゆっくりと告げた「今後一切近寄るな」。

「やばい、宗二さん、ムラムラする」

「ああ、ムラムラのゾクゾクだぜ……」

今夜も眠れねえぜ……！

今度は俺からセンにカードファイトを申し込むと、当然だろと言いたげに頷かれた。

「よっしゃ、今度は勝つ！」

「せこいまねすんなよ？」

「トーゼンだろ、男ならルールは守るもんだ！」

宗二さん！

俺、これからもあんたに付いていくぜ！

禁欲生活の誇りある被害者（後書き）

「（仮にも）男なら、（あたし、男と口をきかないという）ルールは守れ」

必死でした。

勘違いがもう中二病みたいです。

禁欲生活の悩める加害者

ああ、胃はキリキリするし、心臓はグツタリと重い。今日も一日が始まってしまふのかと思うと、気が沈まないでは居られなかった。

禁欲生活三日目にして。

すでにあたしは、身も心も疲れ切っていました。

インターフォンが鳴って、あたしはのろのろと家を出る。おはようございまーす！と人の気も知らないで飛びかかってくるのは、元凶の一人であるといってもいい、七海小太郎くんだ。

「先輩、どうしたっすか？ お腹痛い？」

適当な挨拶しつつ歩き出した途端にコタローから心配される。その長身をゆったりとかがめてあたしの顔をのぞき込んでくるが、別になんでもないし、と半ば拗ね気味に返しておく。

そんで、さらにもう一步踏み出した瞬間、あたしの視界いっぱい、まなじりをつりあげた獰猛なお顔が飛び込んできた。

「宗二、覚悟はできてんだろうなあ？」

ぎゃひっ！ とととと十夜さんっ！

「わっ、先輩！」

しゅばつと音を立ててすぐにコタローの真後ろに隠れる。脇の下からそうっと覗くと、塀に背中を預けていた十夜さんがふらりと体勢を整えるところだった。ポケットに手を入れたまま横柄な態度で、一歩二歩と近づいてくる。

「中村部長」

「おい、そこ退け。今日という日は一発ぶん殴んねえと気が済まねえ」

「なんですか、先輩に構われないのがそんなに嫌なんすか」

「うるせえ、テメエなんざどうでもいい。おれは宗二、テメエが気に入らねえんだ。その態度、人をバカにしてんのか？ ああ？」

心底怒っているのがありありと分かる、ドスのきいた低い声で語りかけてくる。バカにしてません、滅相もございません、でも取り返しの付かないこの感じ。

柳井くん、コタロー、拓磨くん以外とは話さない、という約束をした次の日、早速出会った十夜さんをさりげなくかるうーくスルーし申し上げてからというものの。今日三日目に至るまで、かなり本気で怒らせてしまったらしい。

うえ、マジでこええ……普段から猛獣オーラ出してるけど、ここまで機嫌を損ねるとは。優しさを知ってるだけに、逆に真剣で怖い。

「先輩、いきましょ」

シャツをんぎゅーっと握りしめていたらしい。顔だけで振り返ったコタローがあたしの拳に触れて、そっと離れた。それから、耳元で小さく言う。

「逃げるが勝ち、っす」

……やっぱり？

結局今日も初日と変わらず全力疾走することになった。後ろから鬼の形相で追いかけてくる十夜さんを見て、顔を真っ青にするコタローの今までの苦勞がよく分かった。

どうにか十夜さんをまき、学校へとたどり着いた。というかこうして逃げ回っていてもいつか窓をぶち破ってまた学校へと侵入しそうで怖い。以前のこともあったのか今は教師が厳戒態勢で校舎を見張っているのが唯一の救いではある。

疲れた、と思いながらふらふら教室内へ一歩踏み出すと、顔に何かがぶつかった。

「あだっ……んー、ごめ」

ギョツとした。みたいな顔をしているに違いない。鼻を押さえながら見上げたのは、人間。間違はなく人間。それも、十夜さんと同じくらい出会いたくない厄介な人間。

和磨は、柳眉をそつとひそめて、不機嫌を隠そうともせずにとつぽを向いてしまった。

……十夜さんとは真逆で、避けるではなく避けられている。

約束をしている今、声を掛けられないならそれはそれで良いんだけど、乙女心は正直にドスンと重みを増したりもする。

無視された。つーか完璧に嫌われている。

「ミツカ、歩くの速い……って、ぶはっ、そーじじゃん。おはよー」

立ちつくしていると、今度は後ろから何かがトンツとぶつかる。

無邪気な柳井くんを見るとなんだか気が抜ける。

「何？」

「んーん、ほんとにこれでいいのかなって」

「あーミツカのこと？ まあね、オレともあんまし口きいてくんなくなっちゃったし」

「えっ、なにそれ、いいの？」

「さあ。効果テキメンってことなんじゃないの？」

何の効果っていうんだろ……。もともと仲良いはずの二人を、そうさせちゃったのってやっぱりあたしが原因？ だとしたら申し訳ないな、純粹に。

「柳井、自分謝って……」

「いいよ、そーじ。もうちょっと、もうちょっとだから」

「何がもうちょっとなの」

「……へへ。オレ、ずっとミツカと一緒にだったから、よく分かる。もうちょっと、おとなしく待ってて。名前も、ちゃんと呼んでよ？

一馬って！」

柳井くんはなぞめいた笑みを浮かべるなり、鼻歌でも歌いそうなほど上機嫌に席に向かって駆けた。

な、なんだそれは……！

ウツカリその笑みにやられたあたしは、ドキドキと胸を高鳴らせていた。なんというか、やたらと柳井くんが大人だ。ことと磨に關しては積極的というか輝きが増すというか、何かを企んでいそうである意味恐ろしい。柳井くんたち以外とは会話しないという約束のことも、何が狙いなのかあえて会話しない和磨の前で仲良くしてきたりするし……一馬呼びもしかり。

この約束の果てには、一体何が？

……ホント、あたしの憔悴以外に、何があんの。

とかいって、結局律儀に約束を守るあたしって、偉いよね！ベベベつに、後から渋り始めたあたしに柳井くんが付けてくれたゴハウビのために頑張ってるんじゃないんだからねっ！？

ほんと、「オレの自慢のイケメン」とかいう気になりすぎるタイトルのブロマイドとかのために頑張ってるわけじゃないよ、うん。ほんとにイケメンかどうかともわかんないわけだし。うん、いや、た

だでくれるっていうんだったらもらってあげてもいいよっていうく
らいのスタンスだし。

別に言い訳に必死になってるわけじゃないし。

「期限はオレが良いっていうまでねー、とか無邪気に言い放つあたり、柳井くんって結構すごい性格してるよね。有無を言わさず頷いたあたしも結構すごいけどな」

かわいそうな意味でな。

やー、だって、もう三日もろくにイケメンイベント楽しんでないんだもん。昼休みにイケメン探して校内うろろしたりとか、偶然を装ってイケメンとの接触を図ったりとかたぶらかしたりたぶらかされたり……。

まあ、それこそろくなことはしていないわけですが。

今も廊下を歩くあたしの視線の先に、爽やかな笑みを振りまくスポーツメンタイプの男の子を見つけて思わず目が釘付けになる。立ち止まって窓のさんに肘を置き、そのまま見つめてしまう。

「いいな、絵になる」

ぼつりと呟いた。今カメラがここにあれば盗撮したに違いない。といいつつ、ポケットには携帯が入っているから写メ取れるんだけど。

ポケットに伸びかけた手をなんとか静止させる。

見るだけならいいじゃん、写真におさめるくらいならいいじゃん、

とか一瞬でも思った自分にカツを入れといた。

いくら約束事でも、あたしだって誠実になってやろうと決めたのだ。

「もしかして、好きなの？」

「いやいやいや、まさかそんないきなり好きだなんて。でもいいな、とは思ってる。チラ見、ガン見飛び越して、声かけてもいいくらいのレベル」

「知り合いじゃないの？」

「うん、今日初めて見かけたけど、今じゃなかったら良かったのに……」

律儀に約束を守る男ですからね、あたしは。今まで十夜さんとか和磨を散々遠ざけといて、ここに来てチャラチャラ声掛けるなんて自分でも嫌だもんね。

「へえ？」

「今はだから、喋ってる場合じゃ……」

……ん？

喋ってる場合じゃ、ないはずだよ。

ハッとして、あたしはぶぎゅうんと音が鳴りそうな程首を回して横を向いた。

そこにいたのは、嫌悪に顔を歪ませた金髪の男。あたしと目が合

うなり、さらに眉間にしわを寄せ、嫌そうに小さく口を開いた。

「理解できない」

って、思っし約束破ってんじゃんコレ！

あまりにもナチュラルに男と会話してた。上に、なんかいきなりすごい嫌われてるっぽい。

いろいろな意味でどうしよう。

っていうか、この人、金髪のデスティニーさんだよね。金髪というチャラさを表に出しておきながら、実体は純情に顔を赤くする愛らしさ漂うあのイケメン……。どうして急に敵意を向けられて？初めて喋ったあときはあんなに乙女だったのに。

「きみ、田中宗二クンで間違いないよね？俺、二組の九条光なんだけど。ちょっと話がしたいんだ。あの彼女のことだ」

「……すいません、急用を思い出したのでこれで」

忘れてたけど、前に会ったときはあたし、女だった……！

一体それをどう説明しろと。真実を話しても信じてくれないに違いないのに、ごまかすにしても約束がある今そう簡単にはできない。

どう考えたって一分二分で終わる話じゃないしね！

あたしはいそいそと窓から身を乗り出した。

「え、あ、何してんの！」

敵前逃亡です。とりあえず笑っとけ。

「ねえってば。おい……彼女のこと、どう思ってたんだよ！」

ひらりと飛び出し、すたとんと着地。いやほんと、ここが一階で良かった。

彼女って、やっぱりあたしのことか？ 何をデステイニーさんがそんなに必死になっているのか分からないが、答える余裕は今はない。

背中に向けてさらに叫び続けるデステイニーさんを心苦しくも無視しながら、あたしはこの場から離れた。

草まみれの状態で教室に戻ったときにはもう昼休みは終わってしまっ、柳井くんから遅かったねと残念がられてしまった。また、和磨の前で仲良くしようとしてたんだろう。柳井と呼んでたしなめたら今度は拗ねられた。だから和磨の前であからさまに一馬とは呼べないって。

「そういえば、また演劇部部長来てたぞ。今日はいませんって言うておいたけど」

「また？ この前も来たけど、忙しいからって断ったのに……なに重要な話かな」

「……約束は、約束だからな？ オレのいないところで破ったりしてないよね？」

「うううう、うん、だいじょぶ」

「ぶっ、そうじ怪しすぎ」

約束、破りたくて破ったわけじゃないことを分かって欲しいけどでもやっぱり言えない……！ どの人もこの人も、あたしの都合が悪いときに限って近寄ってくるんだから！ なんなのわざとなの！

柳井くんは、あたしの気持ちを知ってか知らずか、にししと楽しそうだ。前の席では和磨が相変わらず背を向けていて、こっちの会話に入ってこようもしない。

なんだかなあ。ほんとにいつになったら約束果たせるの？

「いいけど。何にせよ、そうじがむやみに他の人と仲良くしないのって、かなりせいせいする。ははは」

かわいい顔して、言ってること結構酷くない？ せいせいって、ただあたしの不幸を楽しんでいるだけなんじゃないだろうな……。

「ミツカも追いつめられてるし、あともうちよつと」

柳井くんの笑みが、怖え。

またさらに心臓がドスンと重くなった気がした。

禁欲生活の被害者と被害者の末路

「……っうう、んあ」

自分の口から漏れる甲高いうめき声が、嫌でも教室内に響く。

「あともうちよつと」

その柳井くんの言葉は文字通り、もうちよつと、で間違いなかったらしく、その日の放課後、まさかの事態が起きたのだ。

本当は、柳井くんに手を引かれ学校を出た時点で今日一日は終わっているはずだった。寮で柳井くんと別れ、それから一人で家まで帰り、あとは夜ご飯を食べて風呂に入って寝るだけ。

なにはともかく、それで一日は終わっているはずだったのだ。

……財布さえ、なくしていなければ。

「いっそ、諦めてしまえたら楽なのに」

自分の教室のドアに背中を張り付かせて、ぼそりと一人ごちる。走って戻ってきたためか荒れた息を落ち着けてから、深く息をつき、

もう一度決意したあとで中をのぞき込むも、もちろん状況が変わっていないようはずもない。

放課後になってから随分と時間がたち、外からの光は頼りない。かといって教室内は電気がついていっているわけでもなく薄暗いまま。

そこに浮かび上がるのは、一人きりでゆったりと椅子に座っている男子生徒の後ろ姿だ。

眉根をひそめ果てしなく情けないツラをさらしながら顔を戻す。人通りのない廊下ではあたしがどんな表情をしようが構わない。それこそ、声まで出せるならうええだとかげええだとか醜い奇声を発していたことだろう。

つかそれより、そんなことより。

なんだってこんなときに、遭遇しなくちゃいけないんだろう。あの後ろ姿は見まごうことなく今一番会いたくない……というか、会えない人物に違いなく。

どうしようもなく立ちつくす。

問題は、昼休みデスティニーさんに気を取られて昼飯を買わず食わずで外を逃げ回ったことにあるのだ。そのときまでは財布を握りしめていたことを覚えている。けれど、帰り際コンビニに寄ったときにその財布が存在を無くしていたことで、いつ行方を見失ったのかということに初めて気付いた。

いつそ見捨てることのできない小心者で貧乏性な自分が憎い。

一応あたしが通っただろう外のルートは探せるだけ探してみたものの、痕跡は少しも残されちゃいなかった。あとは教室のあたしの机の周辺だけなのだ。なくてもいいからせめて、あるかどうかだけの確認だけでもしたかった。

今、教室内に飛び込めば二人きり。

……和磨と二人きりだ。

約束があるから。本当は話しちゃいけない。だからといってこれみよがしに無視するなんてそんなこと、罪悪感で心がむちゃくちゃ痛い。よく考えたら、この非情な約束ができてから和磨と二人きりになったことなかった。柳井くんや、違う誰かしら人がいたから話さないでいられる空気にできたのだ。

財布の存在確認がしたい。でも和磨と二人きりになりたくない。ううう、なんというジレンマ。

逃げて財布の有無が分からないまま心を不安にさせるか、いつそ和磨を無視して心に傷を負うか……どっちにしろ心がやられるなおい。

「……はあ、無難に約束を破るしかないか」

となると、結局これである。もちろん後から柳井くんにも正直に白状しよう。自分は自分でした約束も守れないガラスハートのチキンですってね。

実際はどれ程か、体感時間は長く、そうやつのことで決めてあたしは顔を上げた。

「入りたいんだったら、入れば？」

一歩足を踏み出そうとしたとき、教室内から低く感情の無い声が

響いてきた。つい扉に足をぶつけて騒がしいガラス戸の揺れる音がする。

「いった……！」

「用があるんだろ？ 俺に構わなくても気にしないから。そうされてるほうが余計気になる」

あたしの痛みものともせず、和磨の後ろ姿が冷酷に言い放つ。そうされてる、ってのは教室に入れずうじうじしていたあたしのことを言っているのだろう。

気付いてたのか……。

「つーかさ」

足を押さえたまま気まずく見つめていると、やっと和磨が振り返った。目があって何故かそらしてしまう。

「早いところ無視でもなんでもすれば良かっただろ。遠慮してんの？ いつもみたいに知らないフリでもなんでもしろよ」

しかも、怒ってる。ほんっとーに久しぶりに和磨から面と向かって言葉を掛けられるから、変な感じもする。ケンカした後初めての会話だし……。

痛みの薄れてきた足を撫でながら、どう言えいいのかと唇がふ

わふわと動く。約束があつて、ということもあるけれど、一番はまた嫌われたと思いたくない気持ち大きい。

「約束が……いや、あの、別に無視してたわけじゃないよ？　ちょっと並々ならぬ事情があつてね、通常通り振る舞えないけど。あ、今は財布探しに戻ってきたわけ。和磨が寝てるんじゃないかってすぐ入れなかったけどさ」

なんか上手いこと言えずにへたくそな言い訳みたいなのを並び立てながら、平静を装って自分の机まで向かう。机の引き出しに手を入れて、財布……あ、見つけた。良かった、あとはこれを持って帰るだけでいいんだ。

「フーン」

……帰れねえ！

なんか知らないけどすげえ睨み付けられていて、足が縫いつけられたように動きません！

「かずま、ねえ」

えええ、なにそれどういう反応ほわい？

目を細めてフンと白しく鼻を鳴らす仕草なんか、和磨らしくなく、でも妙に堂に入っていて香り立つ色香やらなにやら、凄まじく

似合う。こういうときでも鼻を押さえる自分尊敬するわまじで。
見られないように、というか見ないように横顔で、ああうん、と
適当に相づちを打っておく。

「最近やたらと一馬と仲いいよな。俺が邪険にしたからそっちに行
ったのか。邪魔かよ」

「……は？ か、和磨なに言ってるんだよ。邪魔と思ってるのはそ
っちでしょう」

「俺が？ へえ？」

だからなにその反応。なんか今日の和磨って様子が変。絡みづら
いっていうか、妙な色気を振りまきながら、自信たっぷりな雰囲気
で責めてくる。

顔を見たら負ける気がする……。いつもいつも、あたしって不当
に怒られるよなあ。つか、怒らせてる？

「和磨だって、避けるじゃん。声掛けてこないもの」

「掛ける必要ないだろ。お前にはいつも一馬がいるし、俺を嫌って
るんだから掛けて欲しくもないくせに」

逃げ腰で弱々しく反論するも、和磨の有無を言わせない言葉が返
ってくる。

またこれだ。和磨と言いかうと和磨はこれっぽっちもこっちの言
葉の意図をくみ取ってくれない。責めるだけ責めて、あたしの言い
分なんて聞いてくれない。

せっかく、仲直りしたくて言葉も交わさないでいたのに……逆効

果だ。

「勝手」

「……ああ？」

「和磨は勝手！　いつ、嫌ってるなんて言ったの！」

「無視してきたじゃねえか！」

「それはっ……悪かったけど！　でも、和磨だって構うなって言っ
た！　怒らせたとき、心底嫌ってるみたいにな、言った！」

「本気で言うわけないだろ！」

「じゃあ、冗談だったの！？　なんだそれふざけてんの！」

意味が分からない。むかつく。

あたしは顔も見ないでいようとしたことも忘れて、座っている和磨を睨み付けた。意外とすぐ近くに顔があったけど、ときめく隙もなくただ腹の立つ顔としか認識しない。

目鼻立ちがハッキリしててきめ細かな肌で、羨ましくも綺麗で。
むかつく。

これは夢か？　あの夢の、前触れか？

「俺だって、分からねえんだよ！　この、バカ！」

手首が引っ張られて、体が前のめりになる。気が付けば顔はさらに近いところまであって、和磨の荒い吐息が直接唇に触れる。

「また、バカって言う」

嫌われてると思うの嫌なんだって。

そう思うだけで、何故か、涙が出そうだ。堪えるのに必死で、ただひたすらすぐその和磨の顔を睨み付ける。

きっと、夢だ。絶対ゆめ。

「和磨は、どう思ってたんだよ……自分のこと、嫌いな」

「……嫌いじゃ、ねえ」

手首を掴んでいたはずの和磨の手が、離れてあたしの腕を掴み直し、それからまたゆっくりと引き寄せる。近づくあたしの体は、座っている和磨の両腕に囲われるように前のめりを続け、そうして肩と肩が触れあった。

「嫌われたくねえ」

あたしが言うべきハズの言葉を吐いたのは、和磨だった。そのときはすでにもう腰に手を回され、体が密着していた。

分からないまま、抱きしめられていると気付く。弱々しく、でもしっかりとした力だった。

「かず……ま」

名前を呼んだら、さらに力が加わった。口から苦しげなうめき声が漏れる。首の裏を和磨の熱い吐息が撫でてくらくらする。

……やっぱり、夢だ。また破廉恥な夢を見ているんだあたし。そうでなければこんなことあるわけがない。

呆然と考えていると、急に体がバランスを崩した。椅子に座っている和磨の体ごと傾いている。

「えっ……うわ、うわああ!？」

瞬間、凄まじい椅子の倒れる音と共に、体が宙に投げ出された。しかし勢い付いて手足を付いたのが幸いだったようで、体はどこも痛くない。

あーびっくりした、まさか前のめりに倒れるとは……。はふう、と安堵のため息をつき……。かけて、それも飲み込んだ。

あた、あたたた、あた、あたし。

和磨を押し倒しとるがなー!

ぎいやあ、ひいいい!　なんてオイシイシチュ……。じゃなくて!　大変な事態に!

「あ、ご、ごめん、和磨!　い、今どきますどきます!」

でもちよっと待って、痺れて体が動かない!　いやあの、違うの、

この状況を堪能したいがためのウソじゃなくて本当にね!?

とにかく焦りながら誰かへと言い訳したくなるのには理由がある。

仰向けに倒れた和磨の、その乱れた格好のなんと淫靡なこと!

ぎやあ、ムラムラするー!

体を打ち付けたからか、痛みに顔を歪め、何故か顔をほんのり上気させ、気色ばんだ和磨は最強に妖艶だった。なにそのサービス。あたしの下半身に対する挑戦かほんとスミマセン。

あたしの影を被り、今後絶対に無いだろうこの上からのアングルだが、長らく眺めていると絶対に取り返しの付かないことになる。いろいろな意味で。ホント乙女心を失いかねない。

「和磨、あの、大丈夫!？」

「……たなか」

うおおお、そしてかすれた声であたしの名前を呼ぶな!

「あああのあの、和磨、あのね、今すぐ逃げた方がいいと思う!ほら、突き飛ばして逃げるんだはやく!」

すみません、ふがいなくも自分は動けそうにないので。もちろん、痺れで!

つか、ほんとこれ、他人に見られてたらヤバイよな。放課後だからって誰もいないことはないだろうし……大きな音がしたから、誰か見に来るかも。どう見たって男が男を押し倒してるようにしか。

「何、やってんの」

あれ？

和磨じゃない冷たい声が背後からして、あたしは首だけでそちらを向いた。パチリと音がして部屋の間かりが付く。

照らされたのは、その、まさか危惧していた第三者。まばゆく輝く、極上の金髪。

「うわあ……超デスティニー……」

運命を感じた。睨まれてるってのに、ドキドキするよ、ハハハ。
なんでいつもタイミング悪く登場すんの。

「……和磨、ごめん。ほんと、あらぬ誤解を……って、あれ、和磨？」

いまだ見下ろしながら和磨の顔を伺うと、明らかに様子がおかしかった。そう、顔が赤い……変な意味じゃなく、本当に。

息も荒い。それからさつき首裏に感じた熱い吐息を思い出す。
もしかして、和磨……！

「九条くん、手を貸して！ 和磨を保健室に連れて行く！」

地面に転がるように体を投げ出したあたしは、手首の痛みに顔を歪めながら和磨の頭を抱きかかえた。やっぱり頭も熱い。いつからこうだったんだろうか、全く気付かないあたしは最低だった。

とにかく早く、安静にさせなきゃ。

動かない金髪の九条くんをもう一度見上げる。呆然とあたしたちを見つめていた九条くんはやっと合点がいったのか、足の方に手を伸ばした。

「どういうことか、後でじっくりきかせてもらおうから」

うわ、やっぱり言葉にトゲがある……大変なことになりそうだけど、今はしょうがない。うん、と力強く頷いて、あたしたちは二人掛かりで辛そうな和磨を運んだ。

禁欲生活の被害者と被害者の末路（後書き）

とうとうやらかした。

ここから始まる禁欲生活

放課後の保健室には、生徒も保険医の姿すら無かった。
しーんと静まりかえった白い空間。

ただ一人黙って眠る和磨を見守り続けて、はや10分。

……どうしよう兄ちゃん、大変なことになった！

いや、うん、あのね。

こんなときに言うのもなんだが、病に冒されて苦しむ和磨の色男っぷりがどうしようとかね、そういう話はもうとうの昔に終わっている。それからそんなこと考えた自分に嫌悪して、和磨をここまで追いつめたのが自分じゃないかという自意識過剰と詭弁の嵐も、今し方通り過ぎた。目が覚めたらちゃんと和磨と向き合って、謝って、それからこれからは仲良くしてと言う決意もついた。

けれど、まだ終わっちゃいなかったのだ。

あたしが、目下問題にすべき事実はもう一つ……。

「なんで、また、このタイミングで……」

女に戻っちゃいますかね！？

声に出せそうもなかったので、心の中で絶叫しました。

ウワアア、と悲鳴に近い女声を出している時点でもはや意味がな

いのだけど。伸びすぎた髪もこぢんまりと主張する乳も、今は空気を読んでくれと言いたい。

……まさか、今戻るとは。

寝起きで女に戻ることは最近よくあったけど、こうして日中戻るのなんて、初めてのとき以来だ。

一体何が何のきっかけでこうなるのか、サッパリ分からん……！前科もあることだし、今また見つかったら下手すると警察沙汰だぞ。二度も男子校に忍び込んだ変態女子の汚名をかぶることになるぞ。ガチだぞリアルあたしだぞ！

それだけは……！

逃げだそうかと思ったけど、今この状態の和磨を置いていくのはヤバイ。いろんな意味で。そうなると保険医を呼びにいつてくれている九条くんが帰ってくるのを待つしかないが、鉢合わせだけは避けたい。いろんな意味で。

どうしたらいいんだ、宗二ー！

「……たなか？」

「っひぎい」

雨乞いの儀式のように天にかざしていた両手を咄嗟に頭にやる。逃げるか逃げ出すか飛び出すか、いろいろと混乱したあげく握った後ろ髪を上着にしまいこんだ。

そのまま驚愕にひきつらせた顔を動かす。

「うっ」

熱で朦朧とした和磨と目が合った。

お、おき、おき、起きとるがな！

「ここ、どこだ……？」

涙目で探るように視線をさまよわせる和磨。なんですかその獰猛な肉食獣のようなナリしといて、森に迷い込んだウサギみたいな仕草は。

わしーんと心臓を掴まれないように、ぐうっと喉を締める。
とにかく！

あたしは視界に入らないように、まるでそこらへんに落ちている石のごとく小さく体を縮めた。コホンと咳払いをして、怖々と口を開く。

「ほ、ほけんしつ」

ちょっと今喉が乾燥しててー、みたいな雰囲気をかもしつつ意識して低めの声を出してみた。

「保健室？ どうして、んなとこに……」

ば、バレてない？

和磨の声も小さくときれときれで、起きてるとはいえ半ば夢うつつの状態のようだった。何が起きたのかもはっきり覚えていない様子。

これは、助かったのか？

とにかく、何でもないかのようにこの場を立ち去るべきだな……うん、無事を確認できたし、下手なことになる前に早いトコ退散……。

「って、待って、起きちゃダメだってば」

「……っつう」

「ほら、和磨、熱あるんだから！ 安静にしてなきゃ、治らないよ」

「ねっ……？ どうして、俺が」

「そんなの」

あたしが聞きたいというか、むしろあたしのせいじゃないかという自己嫌悪はすでに終わってるんですがね。外からのウイルスには強いに違いない和磨、絶対メンタル面でのダメージが原因なんだよ。だって、倒れる前の和磨、あんなこと言ってたし。

「なんで、俺……」

「和磨、いいから今は、寝て」

て……？

無理矢理起きようとするもんだから、その肩を押さえ込んでまたベッドに戻そうとしていたんだけど、案外近い距離で和磨と目が合ってしまった。

その、和磨の顔と言ったら。

「う、あ？　お、俺、なんか」

「な、なに」

なにその顔。

「なんか……変なこと、言ったか？」

「変なこと……」

「バカ、思い出すな！」

って、そっちが聞いてきたクセに！

反論したかったけど、和磨はこれでもかってくらい目を見開いて、その顔をカワイソウなくらい真っ赤に染めあげていた。熱のせいかと疑うのも不自然だと分かるくらいその顔を指摘しようとさらに近づく、病人とは思えない程の力で突っぱねられた。

「いたーっ！」

「あれは、げんじつか？　体の感触がリアルに思い出せ……って、何を思い出すって……！？」　お、俺は何をしでかして……！」

「か、和磨落ち着いてよ」

「これはゆめか？　心なしか田中が女だ！」

確実に女だよ。

って、和磨がえらい混乱していらっしやる。さっきまでの朦朧としていた姿がウソのようで、今なら校庭を何周でも走り込みできそうなほどの元気だ。

しかしこれを夢と思っているようならなにより……そのまま混乱トリップしていてくれ。

地面に尻餅をついたまま和磨を見上げると、見んな！と言われ、狭いベッドの上にも関わらず激しく後ずさをされた。

何やってんだろ。

「でも、なんか、焦ってる和磨って、かわいい」

「か！　……バカ！　頭がぐちゃぐちゃでまとまらねえんだっての

……！」

「熱のせいだよ、四十度いきそうなくらいあるんだからね、あんまり動くと大変だよ」

「夢ならさめる！」

現実だからあの世逝きだ。

まさか和磨がこんな取り乱すなんて思わなかったから、すごく、なんというか、新鮮というか、おもしろいというか。

それに。

「怒ってないのが、すごく嬉しい」

おそらく緩みまくっているであろう顔でホッとため息をつくように言うと、ゴンツと音がした。どうやら和磨が後頭部を壁に打ち付けたようである。声にならない悲鳴を上げながら、うずくまっている。

「ぷっ、ははは、和磨らしくないー」

「……怒るぞっ」

「怖くないよ、真っ赤だから」

「うるせえっ」

なんだ、本当に怖くない。和磨が怒ったって、怖くない。何度怒鳴られたって、あたしはちゃんと笑える。和磨が怖くない顔をしているからってのもあると思うけど、それ以上に今のあたしの気持ちもきつとあるからだと思う。

和磨と真っ正面から、向き合える。

嬉しさだったり、おかしさだったり、そうやって笑っていると、イライラとかモヤモヤとかなんかいろんなもんがスポンって体中から抜けていった。

「はは、良かった、和磨と話せて。……和磨の言ってくれたことは、あたしと同じ。あたしだって、嫌われたくないんだよ」

「……なんだよもう」

「和磨と、仲直りしたい。もっともっと、仲良くしたいよ」

今の素直な気持ちを正直に言うと、和磨は頭を打ったときより深くふかしく沈んでしまった。
なんで？

「それ言うか……俺が、どんな気持ちで」
「あ……」

どんな気持ちで？

和磨が前にも同じようなことを言ったのを一緒に思い出した。まさにケンカしたときだ。その先は語られなくて、あたしはそんなの分からないって、イライラしたんだ。

和磨は、どんな気持ちで。

両手で頭を抱え込む和磨の顔は見えないけど、その隙間からこぼれる一言を取り落とさないように、あたしはベッドに手を付いて体を前に乗り出した。

震えながら唇が開かれた。

「どんな気持ちで、おまえのこと見てると思ってんだよ……」

泣きそうな声。必死に我慢してたのを、勝負に負けて口に出してしまったみたいだ。

「認めたくなかったんだって……もう、ここまできたら、腹くくろしかねーよ……」

「なに、が？」

「なんでこんなことになるんだよ、最悪だ」

……さいあく。

それも確かに聞いたはず。でも、どこで？
どこで？

夢、で？

どうして、最悪なんだっけ。

そして彼は禁欲しない

布団の中に引きこもってしまった和磨を置いて、誰もいない夜の廊下をフラフラと歩きながら、あたしは胸に一つの結論を抱いていた。脳裏に浮かぶのは、和磨が最後に見せたあの表情だ。

最悪と言った、和磨。

あの現実のような夢妄想と照らし合わせるならば、その最悪には意味がある。導き出されるのはあの言葉でしかない。

「和磨は、好きなんだ……」

緩やかに弧を描いた唇。

あのととき和磨は、切なく笑ったのだ。決して悲しみじゃない、何かがふっきたみたいに、諦めたみたいに。

和磨らしくない。というよりも、怒っている顔ばかりを見てきたのだから、そんな風に笑うだなんて思わなかった。

……あたしのことが、好きなんだ。

「うわっと」

あまりの恥ずかしさに俯いて早歩きし始めた瞬間、曲がり角で人にぶつかってしまった。とりあえず、何事も無かったかのようにサッと体を滑らせ脇を通り過ぎようとしたが、失敗に終わった。

なんか手首が捕まっていると思って、伺うように顔を上げると、驚いた表情と目があった。

って、九条くんのこと忘れてたよ！

「あ、ごめんじっくり話し合おうだったよねこれはその逃げようとしているわけじゃなくてそれがあの」

「こっち」

咄嗟に、説教される！と思って敵前逃走前の言い訳を繰り広げてみたのだけど、九条くんは聞こえていないのか聞く気が無いのか、あたしをすぐその教室へと引っ張り込んだ。

こ、腰を据えての説教？

和磨を保健室に運ぶのを手伝ってもらうとき、静かに不機嫌を称えていたあの九条くん。さらに保険医まで探しに行かせて腹に据えかねているに違いないあの九条くん。

嫌われている理由が定かじゃないにしろ、土下座して謝るのが最善な気がする！

「ごめ……あぐっ！？」

深く顔を落とす途中で、むしろ無理矢理顔を上げられた。んなさ

い、と続くはずだった言葉を噛んでしまつて、ついでに首も痛い。
九条くんは片手であたしの顎を掴み、もう片方の手で、電氣をつけた。

明るくなつた視界で見えた、九条くんの表情は何故か苦い。

「くじょ……」

長い髪の毛がふわりと肩に落ちてくる。頬を通り過ぎて、あたしの後頭部へと回つた両手がそれを優しく撫でている。

あれ、そういえば、今、あたし、女だった。

「どうして、こんなところにいるの？ またこんな格好して」

どうしてこういうときに会うんだって、本当に……！ 毎度学ラン着ているとか、どんな趣味だよ。

目線を逸らしたら、聞いているのと言わんばかりにちよいと後ろ髪を引っ張られた。

「今日も、会いに来たの？」

「……会いにつて、九条くんには？」

「なっ」

ぼふんと自らの顔をおさえるその乙女。いやだからなにその可

愛い反応は！ 違う違う、とくぐもった声で必死に否定しているのがまたね、可愛いわけなんですが。

「あのね！ 俺じゃなくて、宗二に！」

「ええ？ 宗二に？ どうやって……」

「俺だって、きみが会いに来てくれたら嬉しいけど……というか現に、こうして会えるとは思ってなかったから嬉しすぎるんだけど……」

泣きそうだよ、九条くん……！

ここまで乙女モードが似合う金髪チャラ系男子もおるまい。

じっくり目の保養にさせて頂いていると、持ち直した九条くんが目があった。ほっぺたをぱしりと叩いて、さっきのがウソみたいな真剣な顔。

「俺は、きみの名前も、知らない。……だから、知りたいと思う。名前以外のことも、いっぱい」

はあ、と一つため息をついてしばらく、強く引き結ばれた唇を開く。

「その前に、言わせて」

「どうしたの？」

「宗二は、やめた方が良い」

……は？

ちよつと待て、意味が分からない。やめるって何を？ 宗二のフリだってんなら無理なんだけど、というか、複雑でねそこはね、気持ち的にも物理的にも。

脳みそフル回転だけど、口は開いたままふさがらず。

それをショックだと思われたのか、九条くんは、ごめんねと申し訳なさそうに謝る始末。意味不明。

「こういうことを言っでは卑怯だと思うんだけど、宗二、アイツ、その、興味がないんだ」

「え、な、なに、に？」

理解できずどもったのがまた動揺と取られたらしい。九条くん、さらに言いにくそうに続ける。

「きみ、に。ハッキリ言っちゃうと、男にしか興味がないみたいなんだ、よ」

「……」

当たってますが何か？

みたいな顔を冷静にしたはずなんだが、これはまた絶望の無表情と思われたに違いない。なんか優しく肩を抱かれた。

「きみにはなびかないんだ」

それで耳元で苦しげに囁かれた。

おい、なんのフォローだよ。つかむしろサービス？

何を勘違いされているのか知らないけど……これ、ちょっと、こっちの状況に謝罪を求めたい。そうシリアスなシーンを演出されてもさ、こちらら萌えさせていただくしかないわけよ？ 悪いけど、イケメンなら誰相手でもこうなる女ですよあたしは。

「ごめん、やっぱり卑怯だね。本当なら、きみが本人の口から聞かなきゃいけないことかもしれない。けど、何も知らずに裏切られるきみを思うと、我慢できない」

あたしも我慢できないわコレ。

兄ちゃんホモ認定な上、そんな宗二をあたしが好きだという完全な勘違い発言。笑うどころか切なすぎて涙が出そうだ。

しばらくそのままでいたけど、段々申し訳なくなってきた、あたしは九条くんの胸をやりわり押しやった。

「……違うよ。そうじゃないって」

「本当だよ、俺を信じて」

「信じるもなにも……」

「だって、あの三ッ瀬ですら熱くさせるような男だよ」

「えっ、和磨!？」

思わぬところで出てきた名前に過剰反応してしまった。さっきのを思い出してまた顔が赤くなりかけるのを、そこにあった服をぎゅっと握りしめて我慢した。

「え、し、知ってるの？」

「あ、えーと、宗二づてに……うん」

「そっか、じゃあ、言っちゃってもいいか。たぶんだけど、三ツ瀬も好きなんじゃないかな……宗二のこと」

ぽてんと投げかけられた言葉は、あたしの頭と鼻先と肩をこんこんと落ちて、地面にべしゃりと着地した。

……んんん？

その言葉を拾う間もなく、自分の脳内をよぎったあの「好き」の二文字が、耳から飛び出して同じく着地。

あ、好きって、そっち？

「そっか、和磨が好きなのは、宗二か……」

そうだ、あくまであたしは「宗二」なんだ。

「あたし」が好きなわけじゃないんだ。

勘違いしているのは九条くんばかりじゃなかったのか。なんか、熱が抜けてスッキリした。ついでに違う何かまでごっそり抜け落ち

て、脱力する。それを腕で支えてくれた九条くんが、ごめんと呟いた。

「俺じゃ、駄目かな」

俺にしなよ、と言う九条くんの顔が、違う顔とダブる。あたしを見て、関係ない女だと言ったあの和磨。

……なんで、前よりもっとショック受けてんだろ。

「あたしは……」

どうするつもりだった？

きつと、このままじゃ、駄目だ。

そして彼は禁欲しない（後書き）

禁欲しない彼←

（やべ、なんでこんなにかわいいんだよ！ 上目使い禁止！ だいたいあのね、男物の服着てるのが庇護欲そそるの！ つーか違う欲もそそってんの！ もーやだー！）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0535m/>

非公式男的男攻略マニュアル

2011年11月13日06時05分発行